

明治学院歴史資料館資料集

第4集

— 『精神的基督教』 —

明治学院歴史資料館

明治学院歴史資料館資料集 第四集

明治学院歴史資料館

序文

明治学院歴史資料館館長 久山 道彦

「明治学院歴史資料館資料集」(第四集)をお届けします。この第四集は、木村駿吉編『精神的基督教』明治二十三年十月刊の復刻版にあたります。何故この本を復刻したかと申しますと、この本が、明治二十三年の七月五日から十五日にかけて明治学院講堂で開かれた、基督教青年会主催第二回夏期学校の講演内容を掲載した貴重な記録となっております。そればかりでなく、当時、明治学院の普通学部に在籍していた島崎藤村は、この夏期学校の様子を小説『桜の実の熟する時』の中で次のように書いていますからです。

「日本にある基督教界の最高の知識を殆んど網羅した夏期学校の講演も佳境に入つて来た。午前と午後とに幾人かの講師に接し、幾回かの講演を聴いた人達はチャペルを出て休憩する時であつた……」

やがて復たベルの音が講堂の階下の入口の方で鳴つた。屋外へ出て休んで居た聴講者等まで、階段を登つて来た。チャペルの方へ行く講師の一人が捨吉たちの見て居る前を通つた。文科大学の方で心理学の講座を担当する教授だ。菅とは縁つゞきに当る人だ。

「M—だ。」

と菅は低声で捨吉に言つた。基督教界には彼様いふ人もあるかと、捨吉も眼をかゞやかして、沈着な学者らしい博士の後姿を見送つた。

続いて旧約聖書の翻訳にたづさはつたと言はれる亜米利加人で日本語に精通した白髪の神学博士が通つた。同じく詩篇や雅歌の完成に貢献したと言はれ宗教家で文学の評論の主筆を兼ねた一致教会の牧師が通つた。今度の夏期学校の校長で、東北の方にその人ありと言はれ、見るからに慷慨激越な氣象を示したある学院の院長が通つた。・・・」

以上のような、明治学院で開催された明治二十三年の夏期学校の情景は、『明治学院九十年史』にも九十一頁から九十四頁にかけて引用されています。また、『島崎藤村研究』第9・10合併号には、秋山繁雄による「島崎藤村の教師たち―『桜の実の熟する時』を中心として」があり、その七十五頁から九十四頁に、Mは「元良勇次郎のことか」と書かれており、「亜米利加人で日本語に精通した白髪の神学博士」とあるのは「フルベッキ」のことかとあります。「宗教家で文学の評論の主筆を兼ねた一致教会の牧師」とは「植村正久」と判明します。「今度の夏期学校の校長で、東北の方にその人ありと言はれ、見るからに慷慨激越な氣象を示したある学院の院長」とあるのは「東北学院院长押川方義」のことです。そして「まだその日の講演を受持つS学士が通らなかつた。初めて批評といふもの、意味を高めたとも言ひ得るあの少壮な哲学者の講演こそ、捨吉達の待ち設けて居たものである。」と書いてあるのは、「大西祝」のことで、藤村達が関心を持った講演内容は、今回の復刻で全貌が明らかになっています。この「捨吉」が島崎藤村であることはいうまでもありません。

それに加え、特筆すべきことは、後に明治学院院長となる田川大吉郎が、東京専門学校を明治二十三年七月に卒業した直後に、明治学院で行われたこの第二回夏期学期に出席していることです。田川

大吉郎自身も、大正末から昭和初期にかけて自分が明治学院で院長として采配をふるうことになろうとは、この時点では予期しなかつたことでありましょう。

この第四集に掲載した木村駿吉編『精神的基督教』は、原則として、原文に忠実に復刻したつもりですが、読みやすいように漢字を当用漢字や常用漢字に変え、変体仮名は現代表記に改め、難読字にはルビを振りました。専門的研究者用と言うよりも島崎藤村達が若き日に耳を傾けた講演を多くの方々に、とりわけ若い魂に広く知っていただきたいからです。もし、原文そのままをご覧になりたい方は、国立国会図書館の電子図書館としてインターネットで著者と書名をキーワードで検索すると、原文を見ることが出来ますので、そちらをご覧ください。

なお、国会図書館所蔵版と同志社大学所蔵版とは、本文末の「第二回夏期学校来会生姓名簿」に大幅な違いがありましたので、名簿に関しては同志社大学所蔵版を基本とし、国会図書館所蔵版を参考に補正を行いました。

また、本文中には、現在では差別用語と考えられる記述があります。本歴史資料館は、人権の尊重と差別の撤廃を強く願ひ、差別の歴史から学ぶために、原文をそのまま歴史資料として収録し、批判と検討に供することとしました。

最後になりましたが、二〇〇六年十一月に『明治学院百五十年史』編集委員会が発足いたしました。本歴史資料館も、明治学院の百五十年の歴史を検証する役割の一端を担うこととなります。明治学院に関する戦前・戦後の学内刊行物や新聞などご所蔵の方がいましたら、ぜひ本歴史資料館にご連絡いただきますたく存じます。そして今回の第四集が『明治学院百五十年史』の資料として役立つことを期待します。

緒言
目次

目次

精神的基督教序、	横井時雄	1
第三回夏期学校主意書	木村駿吉他	3
歡迎之辞	押川方義	5
説教 耶穌基督之本旨	海老名彈正	19
名声非于立志之標準	嶋田三郎	29
説教 聖徒之交	植村正久	33
耶穌基督之意識	海老名彈正	38
贖罪論	ドクトル、ジエ、ダブルユー ノックス	45
科学与有神論	ドクトル、オフ、フヒロソフ	55
日本之青年与実業	中島力造	60
靈之能及其生長	伴直之助	74
現今之神学	ドクトル、ジエ、デー、デウヒス	87
希臘道德移于基督教道德之顛末	ジー、ダブルユー、ノックス	94
講演 第一回、第三回	大西 祝	94
欧米漫遊之話 其一	押川方義	129
聽押川氏欧米漫遊之話述所感	海老名彈正	147
欧米漫遊之話 其二	押川方義	154
与于第二回夏期学校生徒書	エル、デー、ウイシヤルド	172
日本東京 夏期学校生徒諸君		178
博物学教授ドラムモンド君の演説		178

凡例

- 一、復刻にあたり、原則として出来る限り原文に忠実であることにつとめた。漢字は原則として新字体としたが、送り仮名はそのままとした。変体仮名・異字体は現代表記に改め、難読字にはルビを振った。
- 一、原文が明らかに間違いであると思われるものと、表現が不適切と思われるものには、「ママ」のルビを付けた。
- 一、読不能の箇所は、□であらわした。
- 一、出典の年月日については、その出典の奥付に従った。
- 一、今回、内容を理解するために編集者が手を加えた箇所には、「」を付した。
- 一、原文中には現代では不適切と思われる叙述があるが、歴史的資料の復刻という性格上、原文のままとした。

理學士 木村駿吉編

精神的基督教

東京 内田老鶴圃

※上記表題紙は、原本の表題紙に真似て作製したものです。

第二回

夏期學校

演說并二
說教集

※上記扉は、原本の扉を真似て作製したものです。



本 書 の
巻 尾 ヲ
捺 印 無
き 者 は
偶 版 た
る べ し

第二回夏期学校の開設に關してはジョン、テー、スウィフト氏の尽力極めて大なり今茲に此書を公にするに当り特に之を以て氏の尽力を表出し併せてそれを鳴謝するの辞に代ふと云爾

明治廿三年十月 編者誌

緒言

第二回夏期学校は本年七月五日の午後を以て開き同十五日に至り全く閉ぢられたり、此の十有一日の間には三十回ばかりの講義と勸話及び質義応答などもありたるが今此等多くの筆記を悉く編輯出版せんことは非常に大部の書となすにあらずんば到底出来得べからず、故に予が本書を編輯するに当りて自ら有益なりと認めたる講義をも捨てざるを得ざる場合ありき、殊に質義^{マユ}応答及び勸話の如きは全く之れを省くこととせり

本書に掲げたる講義中、外国講師の講演に係れるものは英語の原稿より之れを翻訳し其の他は速記者の筆記に依り各講師の校閲を請ひて其の誤りなからんことを務めたり、然れども翻訳の疎漏、校正の不行届の爲め尚ほ不完全なる所も多からん

卷末にウイシヤルド氏の書簡、ドラムモンド教授の演説及び夏期学校生徒姓名簿を加へたり

本書を編輯するに当り時間と労力を惜まずして余等委員を助けられたる人数名あり今特に其の名を掲げざれども本書を世に公にするに到れるの功多く此等の人に販^マすべきなり

明治廿三年十月十日

編集誌

目次

序文

第二回夏期学校主意書

歡迎之辭

耶穌基督之本旨

名声非于立志之標準

聖徒之交

耶穌基督之意識

贖罪論

科学与有神論

日本之青年与実業

靈之能及其生長

現今之神学

希臘道德移于基督教道德之顛末

講演第一回

講演第二回

講演第三回

欧米漫遊之話其一

聽押川氏欧米漫遊之話述所感

欧米漫遊之話其二

与于第二回夏期学校生徒書

博物学教授ドラムモンド君之演說

第二回夏期学校来会生名簿

横井時雄

押川方義

海老名彈正

嶋田三郎

植村正久

海老名彈正

ノツクス

中嶋力造

伴直之助

デヴヒス

ノツクス

大西 祝

押川方義

海老名彈正

押川方義

ウイシャルド

精神的基督教序

基督の道は礼拝の儀式に非ず、教会の政治に非ず、信仰の条目に非ず、又新旧の聖書に非ず、更らに又二千載以前のナザレのイエスを追想し其人を以て吾人修身の模範となすことにも非ざる也、然らばキリストの道とは何ぞや、曰く生命なり光明なり曰く栄光あるキリスト、一理想のキリスト―神の右に座する生氣活発なるキリスト―、をして信仰と神恩とに由つて吾人の心裡に常住せしむるにあり曰くこの生氣活発なるキリストの光明と生命とによつて、吾人の心身全く一新してキリストの品格を実現するに至るにあり、精神的のキリスト教とは蓋し之を謂ふなるべし

当年の夏期学校は日本近時の宗教史上著しき階段を成せり、時機すでに到来して而て夏期学校は実に日本基督教会の新生命と新志望とを表白するの会場となりたり、実に当年は吾人が心靈上の独立を世界に廣告せしのと謂つべし、蓋し我國民は遂に必ずキリストの真理を信奉すべし、然れども此真理に附帶して歐米に行はるゝ、処の信仰の条目、教会政治、儀式慣習等に至つては、吾人は遠慮会釈もなく之を批評取捨する耳ならず、却て大に日本の歴史風習思想に適中するものを新たに發達せんとす、吾人は斯の如き主義を以て基督教を我邦人に伝播して後ち始めて成功ある可きを信するなり、故に此主義を賛成して協力援助せんとする人あらは何の国何宗派たるを論せずして事業を共にせんことを希ふと雖も、之に反して吾人に向ひ此宗規を奉すべし此条目を守るべし此慣習を行ふべしと云ふ人に向つては断然事業上の交を絶たんとす、イエスキリスト吾人を釈きて自由を得させ給へり、吾人をして再び奴隷の下に繋かれしむる勿れ、皇天上帝わが邦土を眷顧し我邦民を引率して世界列国中の光明たらしめんとす、嗚呼此盛時に際して我邦

に生れたる青年諸子は豈^な幸福なるものに非ずや、上帝の主旨に従ひ文明清福を進め真理公道を周^{まわ}くするは当代の青年諸子の頭上にある天職に非ずや、神より来る生命と光明の府源は諸子の頭上に開かれ、驥足^{きそく}を濶伸する中原は渺々^{ひょうひょう}漠々として諸子の眼前に横はる、而^{しか}して此信仰と此機会を有しながら若し奮ひ起ると能^{あた}はずんば諸子は何を以てか生きて世に立たんや、諸子は世に出て、事に当るの日までには尚十年の星霜^{せいそう}あり、諸子が深く且つ大に自ら修養研磨すべきは実に此間にあり、請ふ世俗、典籍、儀式、理屈の奴隸となることなくして、常に万有とキリストにある純朴自由なる天眞の気を呼吸せよ、

「精神的基督教」は当年夏期学校講演の粹を選んで編成したるものにして、日本教会中の諸名士の卓論を以て満つ、当年の学生諸士は之を一読して転^{うた}た追懐の情に堪へざるものあるべく、他の青年諸子は之に由つて日本教会を代表すべき思想に接せらるゝことを得べし、而して此書の世を裨益すること蓋^たし少小に非ざるべし、今や版将^{ばんじやう}に成らんとするに際し、これが編成の勞を執られたる理学士木村駿吉君、余に序言を徴す、因て敢て偶感する処を記し以て命に應ず、

明治廿三年十月十日

横井時雄

第貳回夏期学校主意書

吾人青年ガ苦学一年ノ路程ヲ終リ例ニヨリテ有セントスル処ノ夏期休業モ今ヤ吾人ヲ待テ既ニ数旬ノ後ニアリ而シテ此ノ時日コソ吾人青年ニ取リテハ最モ愉快得意ノ時ニシテ然モ吾人ノ體質上精神上共ニ必要欠ク可カラザルノ者タリ然リト雖モ馬ヲ驅ル者未タ必スシモ峻坂險路ニ傷カズ舟ヲ破ルモノ未タ必スシモ激流奔河ニ於テセス浪ナキノ静流砥ニ似タルノ平路世却テ過チヲ其得意ナル処ニ得ル者多シ今吾人ガ前途ヲ望メハ学ビノ山ハ高クシテ其頂ヲ見ズ技芸ノ流レハ大ニシテ其際涯ヲ知ラス彼ヲ思ヒ此ヲ想ヘハ此夏期休業モ決シテ優々為スナキノ間ニ徒費スベキノ時日ニアラズシテ却テ大ニ為スアルベキノ日タルヲ覺ユルナリ聞ク米国ニ於テハ此事夙ニ識者ノ注意ヲ促シ為ニ適當ノ法ヲ設ケテ其制全国ニ行ハルト悲ヒ哉吾国ニ於テハ此事未タ世人ノ注意ヲ惹カス又識者ノ口ニ上ラズ予輩ノ知ル処ヲ以テセバ唯僅ニ昨明治二十二年一二有志ノ尽力ニヨリ西京ニ夏期学校ナルモノヲ開キタルノ外絶ヘテ他ニ此事アルコトナシ嗚呼閑居ハ不善ニ傾キ易ク逸樂屢々岐路ニ導ク吾国今日ノ青年ニシテ此閑日ヲ送り果シテ必要有益ノ時日タラシムルモノ夫レ幾人カアル予輩力足ラズ識乏シ敢テ自ラ揣ラズ奮テ爰ニ第二回夏期学校ノ為ニ力ヲ致サンコトヲ盟ヒシ所以ノモノハ蓋シ又窃ニ此ニ慨スルアルヲ以テノ故ナリ今茲明治二十三年七月第二回夏期学校ヲ東京ニ起シ広ク同感ノ士ヲ全国ノ青年諸君ニ募リ智徳ノ基礎ヲ福音主義ニ立テ聖書ニ依リテ神ニ対シ世ニ処スル道ヲ覺リ謹嚴博識ナル諸大家ノ講義演説ヲ聞テ健全ナル理想ヲ得時ニ或ハ集テ一堂ノ下ニ互ノ胸襟ヲ開キ或ハ出テ、品海ノ清波ニ胸臆ヲ洗ヒ和楽団樂ノ裡ニ徳性ノ啓発誘掖ヲ計リ青年ノ志向品性ヲ高メテ社会ニ健全純潔ノ元氣ヲ与ヘ大ニシテハ邦土ヲ救ヒ少ニシテハ一身ヲ救ヒ必要有益ノ時日ヲシテ真ニ必要有益タラ

シムルヲ期ス今此ノ目的ヲ以テ起サントスル第二回夏期学校ノ要領ヲ摘示セハ左ノ如シ(要領略)

委員長

大学院

理学士

木村駿吉

委員

第一高等中学校

村上直次郎

明治廿三年五月

同志社

丹羽清次郎

明治学院

多田素

東京英和学校

間島弟彦

立教学校

坂井徳太郎

スチール学校

瀬川淺

歡迎之辭

押川 方義

大志望を懐抱し、大事業を成就せんには、不撓不拔の精神を要する而已ならず、鉄石の如き身体あるを要します。今や青年諸氏の出入したる校門は既に閉され、將に炎暑天地を焼く候とならんと致します。諸君は紅塵万丈の生活を避け、身体を消衰せしむる土地を去り、身体を息め氣力を養ふ可き好時期を得ました、此息体養氣の最良地は郷里に若くはありません、愛郷の真情は馳獸追草の野民より、剛胆鉄腸の豪傑までも、共に通じて有する処の天性であります、左れば若し諸君が此の天性に従つて故郷へ帰り給はゞ、其処には恩愛ある親戚や、旧交ある親友は諸君を迎へて居ます、諸君を迎ふる者豈只親戚朋友のみならず、諸君の嘗て踏みたる土地も、遊びたる山川も、交友としたる草木池沼も共に諸君を歓迎するであります、是れ豈懐旧の情を惹起し、精神を振勵し、身体を健康にするの所ではありませんか、然るに此炎暑をも厭はず、此歡呼をも聴かず、爰に開設したる此学校に御來臨になつたのは、私共に於きまして大なる喜であります、又諸君が御臨校になるには、兼て潤大なる志望を懐き、人品を高尚にするの道と、徳望を養成するの法とを明かにしようとの御望ある事と信じます。

一体去年西京に於て夏期学校が開かれました節は、ちようど米國キリスト教青年会の書記ウィツシヤルド氏が滞在中にて大に尽力せられ諸君の爲めにも多少の便益を与へられたと申すことを伝聞致して居りました、然るに我邦に於て夏期学校といへるものは之れが初めての事であり、且つ重に骨折りたる人も米國の人でありたれば、勢ひ其差図に従つて諸事を取扱ふは当然のことでありましたらう。

元來ウィツシヤルド氏は、ムーデイの代表者と云ふも敢て不可なき程、ムーデイ風を帯びたる人とか申せ

ば、其人の管理したる学校に、自然ムーデイ風の方法を其^正僣移し来るは敢て怪む可き事でない。左れば爰^三に一言致す可き事は、今年の夏期学校のごとで御坐ります、只今略委員長木村駿吉君が御話になつた通り、今年委員諸君の尽力に依り、昨年とは多少趣を異にする学校を設けられました、勿論此学校はキリスト教徒の發起に係り、其目的はキリスト教主義に基いて智徳を練磨することでありましょう、また兼て先輩諸君の経験ある説話を聴きたり、交際に依りて有効なる感化を受ける為めかと愚考致します、其目的略^四此の如き者とするも、其方法に至つては敢て^{あえ}一定したることもありませぬ、只よく時世の必要に適合するやう致すのが緊要であります、そこで兼て委員より廻し置きました、趣意書に示せる方法をもて、今年は爰^三に此夏期学校を設けました、即ち我等が我邦の現状を察し、又多少の経験を経たる結果で御坐ります。

前に申述ましたムーデイ風の夏期学校と今年の夏期学校とを比へて見ますれば、其目的は敢て^{あえ}異なる処もありません、其方法に至りては同じきこともあれど、又大ひに異なる処も御坐ります。其訳は細かに申述べずとも解りますれど、ムーデイ氏の夏期学校は専ら米國青年の爲めに設けたるものなれば、其国情や時勢に適合するやうに致して居ります、されは吾々日本人が設くる学校も、日本青年の需^{必要}に応じて時勢に適當なるものを選ぶ筈で御坐ります、此れ諸君の委託を受けられたる、委員諸君が大ひに骨折られて此組織を作り、此方法を設けられたる次第で御坐ります、同じく日本に開いた夏期学校にして、去年と今年と其趣の変つて居ると云ふ訳は、目下我国の時勢が吾等を驅て爰^三に至らしめた訳で御坐ります、左れば去年のは悪しく今年のは良い^{又と}扨と申す訳は少しも御坐りませぬ、去年は去年、今年は今と、時勢の変遷必要に相応なる学校が立たなければならぬ筈で御坐ります。

然るに近頃伝聞する処に拠りますれば、此学校に付いては、種々に批評せし人もあり、非難せし人もあつ

て、東京辺には牧師輩のうちにも中々苦情を申し、不足を唱へ、此学校の目的は何の点に在るか解からぬ、演説者の名前中には歴史家もあり、文学者もあり、経済家も政事家もあり、或は教育家、新聞屋、又は説教者などごたまぜである、而して其の演説を聞けば、種々様々なるものがある、どうも、キリストス信者が集つて暑さも厭はず、昇る処の学校には相応しませぬ事である杯、云ふものがあるようですが、斯かる人はキリスト信者の集りと云へば、何時でも会堂の集りの如く、説教斗りを聴くか、若くは聖書斗りを讀んで居る筈だと予想する人か、否らずは何か為めにする処ありて斯かる説を言ひ触すのでありましょう、それは兎に角、吾等は諸君の為めに、利益ありと思考せし処を断行するに躊躇するものではありません。

抑もキリスト信徒たる者は、キリスト教を遵守すると同時に、時勢の進向に伴はねばならぬ、吾等は真理の為め、国家の為め、救民の為めには、火の中水の中をも厭はぬと云ふ決心が必要である、之れがキリストの御心である。左ればキリスト教徒にして世の開化の先導者ともなり、文明の要素ともなり、事実の实行者ともなることなからしめば、これ所謂死せる信者ではありませんか。方今キリスト教に反対する人の語を聞くに、キリスト教は世の文明を裨益するものに非ず、哲学科学と併行するものに非ざれば、学問益々進歩すればキリスト教愈衰頹するなり、今日欧米に有名なる学者政事家のうちにキリスト信者ありと云ふは、畢竟彼等の心中より信ずるに非ず、只世俗に背反せんを恐るゝ而已と。キリスト教は果して哲学若くは科学に反するものなるか、上智の人には無用の長物なるか、世の文明には関係なき者なるかと云ふか如き問題は、今日御互の充分なる研究を要します。又キリスト教に付ては、道理上不抜の確信を有たねばならぬ形勢であります、是れ只己の為めのみでなく、他人の為め又国家の為めである、兎角人はキリスト教に直入して其真偽を研究すること少く、生きぬ聖書を読みましたがる故に、信者自身は能くキリスト

教の、世の文化や学問に關係ある處を明白に了解して、己が信ずる處の教の理由を示す支度を、常に備へ置くことが肝要であります。

今日キリスト教を信する者は、一概に西洋の文明はキリスト教の結果であるなど、漠然たる証拠に拠る斗りではなりません。勿論經驗ある信者は、キリストを土台として立ち居る者なれば、容易に動揺す可き理由はないが、又他にキリスト教の証拠をも探り置くが宜しく御坐ります。到底信仰は通常の人に取ては、証拠を基ひとするものである故に、其証拠堅固なれば信仰も自から堅き道理であります。而してキリスト教の徴証する處も昔と今とは稍異なる處がある、昔私共がキリスト教を聴ひた時は、西洋の文明は何にも寄らず専らキリスト教の結果であるやうに考へ、又其様に教へられたかと思ひます。設令ば欧米各国の政事の善良なるのは、キリスト教の結果であると云ひ、又經濟論の盛なるも、教育の普及せるも、家政の整頓せるも、法律の善美なるも、商業の隆盛なるも、文学の燦爛たるも、人民の自由独立なる氣風も、凡そ文化に關係あるものは皆キリスト教の結果に非ざるはなしと云ひ、又米人が独立の戦争を思ひ立ちしも、華盛頓「※」が国の為に力を尽せしも、ワットが蒸汽を發明せしも、コロンバスが新世界発見の大功を奏せしも、其他貧院なり、孤兒院なり、救助院なり凡そ慈善に關係せしものも皆是れキリスト教の結果なりと云ふ。語を換へて申せば、一個人の改良より一家一國及び社会全体の改良に至るまで、所謂國富み兵強きも、皆キリスト教の恩沢に歸しました。斯かる好結果を生せしは是れ斯の教が神より出でしことの確乎たる証拠であると云ひ、又聖書には高尚なる道德の教あり、予言あり、奇跡あり、神より出づるに非ずんばどうして此の如き力が顯はれましようかと申しました、其他古人が聖書に付て述べました其人の感覺も直ちに斯教の証拠となりました。設令はニウトンが聖書は哲学中の哲学であると申しましたれば、直ぐに之れ

を取りて、創世記は神が特別にモーセに指命して、創世の順序を記載せしめた確拠となしました、其他カ
ントが嘗て世に驚歎す可きもの二つあり、一は外界の天上にある星辰、一は内界にある吾良心なりと云ふ
たことがありますと、説教者は直ちに之れを引用して、キリスト教の真理なることの証拠と致しました。
此の如き徴証のうちには、キリスト教と直接若くは間接に於て、是非とも関係なくしては解し得ぬこともあ
りますれど、又凡て関係なきこともあるかと思ひます、斯かる説を聞て大ひに感服し、之れを丸受に受け
ました斯かる証拠の土台の上に立てたる信仰は、若し証拠が崩れると、之れと共に信仰も動揺するは、自
然の勢免れざる処である、されば今日信仰の堅固ならざるも、これが原因の一つでありましよう。

前に述べたる泰西の文明は、果してキリスト教の結果なるか否ざるかは、今日に於て充分心を潜めて研究
すべき時勢となりました、依つて此回の夏期学校はキリスト教の牧師教師のみに依頼せず、内外を問はず
各科の専修家を頼みて其所見を聞き、又質問会などを設けて自由に質義をなし、其真の事情を明かにせん
ことを勉めたく希望致して居ります。

吾等が泰西の文明はキリスト教の結果でありと申す時には、反対者は直ちに斯く申します、若し果して歐
米今日の文明はキリスト教の結果であるとすれば、該教の未だ起らざる以前、若くは其教の伝はらざる古
代の国々は一も文化の国ならざる筈なるに、其実否らざるは何故ぞや古昔の印度国は世界文明の本家に非
ずや、又支那なり、埃及なり、希臘なり、希臘なり、希臘なり、羅馬なり、みな著名なる文明国ならざるはなし、希臘の技術が
世界に冠たりしこと、羅馬の兵隊が世を圧倒せしこと、支那埃及に旺盛なる文学の流行せしことは此れ、
歴史上の事実には非ずや、又現今にても尚支那人は商売に於ては或は英米人にすら恐怖の念を懐かしむるに
非ずや。左ればキリスト教なくば文明なしといはゞ何故に、キリスト教外の邦国に文明の跡あるやと、斯

かる駁論に対しキリスト教は泰西文明の本源なり抔云ふ説を漠然保持したる斗りにては、とても満足なる答を与ふることは出来ずまい。故に是等の徴証に付ても充分なる証拠を求め信仰の土台を据へ置かねば、信仰は恰も砂上の家屋の如きものとなります、キリスト教ならでは、とても起し得ぬ性質が、今日の文明に存在して居ることを、明白に且つ確實に了解して居ることが至つて緊要である、若し此事を確實に了解するを得ば自ら確信をも生ずるであります。

初め我邦に渡来せし宣教師は多く其熱心信仰及び忠誠なることに於て敬す可く服す可き人物であつたに相違は御坐りません、然し其智識に至ては、上品な識者とまでは尊称し難き人もあつたに相違御坐りません、是等の人の証拠として説ひた処は、己が学校にて学んだ事や、書物で読んだ事でありましたらふ、彼等が決して仏者の所謂方便の如き説をなしたのでないことは、其人物を見ても善く解ります、然し充分研磨したる教理を伝へたと云ふよりも、寧ろ受けし者を其佩服せしと云ふ嫌ひがある、そこで其徴証する処も或は浅近を免れませなんだらふ、又彼等が説ひた処の教は歴史上の宗教であつたに相違ありません、何の宗教でも一国に入りて後ち数百年の久きを経ば、其国の歴史と混合する宗教となる是れ即ち歴史上の宗教にして、日本には日本風の仏法あるが如く、キリスト教に於ても亦た如此であります、西洋にては夫れ相応なる信仰箇条も出来教会も出来又治会法も行はれて居ります、これか即ち其国を益する訳であれば、其教を伝ふる者も其粹斗りを採りて之れを伝播する訳にも行かぬものと見へ、知らず識らずの中に宗教と共に其国の風俗慣習をも持来るは自然の勢と見へます之れを私は歴史上の宗教を伝ふるものと申ます。夫れ一國は慣習風俗の為に維持せらるゝことの多くある者なる故に、斯る宗教を受くるに際しては吾等最も注意に注意を加へて、是れはキリスト教の粹である、是れは唯其附属物にて緊要なるものでないと云ふ処を

見透さなければなりませぬ。然るに今日のキリスト教信者は既に欧米にて夫れ相應に發達したるキリスト教を伝へられ、又其假(ま)に之れを受けし事である、斯かる時には吾等が心裏に特有する天性のキリスト教を呼び出して之れを發育せしむるより、寧ろ既に充分發育したる外形のキリスト教を注入して、之れに吾心を合致せしむる様にと試むるは、誰にも免れ難き数でありましよふ、吾等は生れながらキリスト教の種子を有て居る、此種子は物に應じて發育しますが、殊(こと)に聖書の助けに依りて發育をなします、然し之れは多少キリスト教を実験した人の上に云ふ可き事にて、初めは是非宣教の助けを要します、是れ即ち博愛の仁人が己れの確信する宗教を他人に伝へんが為めに、物を喜捨して宣教者を派遣する所以(ゆゑ)であります、そこで昔時彼国より来た処の人は大ひに献身の人であつたに相違ない、当時我邦の時勢は何も外国には知れて居らぬ、只知れて居る事は日本は真神を知らざる国、未開の民、偶像崇拜の人が住める国と云ふ事のみで、恰も今日亜弗利加人を見ると均しくありましたるふ、斯かる国に入込むは誰にも危険の感じがある、此時に際し宣教の勞を取らんと決心し、遙かに東洋の一小島を望んで父母の本国を去つた人は、其献身の精神、博愛の情歎賞(じょうたんしょう)す可きであります、彼等豈(なほ)他意あらんや、唯キリストの意を意とし、真神の聖意を体し、真理を宣べ福音を伝へ、無智の民を救ひ、之れをして暗を去りて明に就き、サタンを離れて神に帰せしめたるは此れ、我等の義務なり報恩なりと思へるのみ、左れば苟もキリスト教の証明をなさんと熱心せる者は其僧たると俗たるとの論なく、みな其精神が顕はれて居る、彼等の鋭意熱心、及び献身の心に富み、他人を感化する効力のありましたことは、当時まだ封建の迷夢は醒めやらず、尊大の心を有つて此国を日の本の国と号称しまして、唯運命を腰間の秋水に頼んで居つた客氣の青年が、或は横浜に或は熊本に或は札幌に於て命とも頼める此日本刀を打捨て、続々とキリストに降伏したるのを見ても善く知れて居ります。

彼等が高潔なる道徳と宗教上の確信を示しましたから、此等青年輩もその熱心と誠実に動かされ遂に其人物をも信任するに至りました、既に其人を信じた上は其人の説く処の道をも信ぜずに居られましょふか、彼等が不完全なる日本語を使ひ、吾等が不充分なる英語にて学ぶにも拘らず、意外に感化力がありました、然し人は何時も誤謬がちの者であれば、彼等が熱心なるにもせよ、献身美徳あるにもせよ、其教ゆる処は皆無謬とは云はれませぬ、左れば其説く所の教理に於ても精粗の分、純雜（じゆんざつ）の別もあり、要と不要とを混淆（けうわう）したこともあり、キリスト教の骨髓と其末葉を混淆（けうわう）したこともありましたらふ、設令は宇宙の主宰は独一の神なり、人類には罪惡あり、人は清廉潔淨になる可し、救を得るは罪を悔ひキリストを信ずるにあり、人は愛を以て人と交り、信を以て世を渉る可し、悟道は唯信の一字にあり、諸の誠命は愛の一字を以て之れを覆ふ杯（さか）云ふ事を教ゆる傍らにあつて、君等は一日も早く洗礼を受けよ、晚餐の儀式に連なれよ、洗礼は小兒も受く可きものなるぞ、日曜日には何事も出来ぬものなり、唯聖書を読み会堂に集るが信者の務である、朝夕は云々の法に従つて祈祷せよ、聖書は一言一句も誤りなき神の御告げと信ぜよ、キリストを今世に信ぜぬ者は如何なる人にもせよ、最早救の道なく、不滅の火に投げ入れらる、凡ての哲学科学も聖書に背くものは誤である、凡て他の宗教はみな偽りである、其教ゆる処はみな真理に背て居る、爾等速かに家にある位牌を片付く可し、神棚は之れを毀て、夫婦は其両親と別居す可し杯（さか）云ふことを教へ、又云々の信仰ヶ条は尽く之れを遵奉せよと教へられましたと思ひます、是がキリスト教の要領とキリスト教国の風俗慣習とを、混淆（けうわう）して教へたと申した訳で御坐ります。

当時吾等は我国を文明の国とし、我民を文化の民とし、熱心燃るが如く、一日千秋の思ひをもて、社会を改良せんことを期しました、而して所謂開化の国文明の民としようと思ふは、我国の人民を欧米人の如く

し、我社会を欧米の社会の如くせんとの心底でありました、此中には善き考もあれども、又妄想もありましたらふ。一体既に社会を組織して居る国の風俗慣習などを改めんとするには、善く其依て起る処の關係を明らかにせず、充分なる攻究を尽さずして妄マヤに之れに手を付けますれば、反オウゴて改良どころでなく風儀を乱し、風俗を害ハルひます、進向と申すことは事業の成功には最も大切なることであれど、警突マツの進向は随分危いものであります、今日までキリスト信者が社会万般の事に及ぼして居る事柄は、之れは明白に又正直に公平に觀察し了得せねばなりません、唯功德の一方のみを見て其他を蔽カケふが如きは正人のなす可きことではありませぬ、左れば善でも悪でもキリスト徒マツが為したることは為したとし、為さぬことは為さぬとす可き筈であります、キリスト教徒が欧米社会の文明を助け、之れを奨励し、又此教が今日の文化に係はらないことは甚た少ないに相違ありませんが、又其信者が社会開進の妨害をなしたと云ふことも偽りでない、彼等が種々なる慈善社会を設け居れども、又嘗て反対者を追害し、異論者を窘まんぢ逐し、新説を抑制し或は刀を執つて数万の人を殺害して崇教の道と誤解したこともありましたが、斯かる事情あれば、今日我国が新たに此教を受くるに臨み、能く其關係する処を明白に又充分に攻究しなければならん訳の起つた次第で御坐ります。

元来私共がキリスト教を信ずるは何故であるかと云ふに、キリスト教は真理で有るからである、キリスト教は吾等をして善良に廉潔に剛胆博愛ならしむるからである、特に日本を救ふ教であると信ずるからである、夫故に若し仏法でも儒道でも其他の教でも、我キリスト教よりも吾等を善くし、国家を善くすること就て明白なる事実と道理があるならば、私共はキリスト教を打捨て、他の教を採らねばなりません、又宗教よりも哲学が更さらによく此目的を達せしむるならば之れを採らねばなりません、若し又此教が此国に害

ありとすれば、何をも云はず之れを捨てねばならぬ而のみならず、之れを全く我国より驅逐せねばなりません、夫故にキリスト教は何をしたか、何をなしたか、何をなしたか、又將まさに何をなさんとして居るかと云ふことは、公平無私なる活眼を開ひて之れを認むるが今日に急切の問題で御座ります、或はキリスト教は哲学と關係が有ると云ひないと云ふ、之れが學問を興したと云ひ、興さぬと云ふ、又政事を改良したと云ひ、せぬと云ふ、教育を奨励したと云ひ、之を妨げたと云ふ、又ニュートンやベーコンはキリスト信者である、グラッドストーンやビスマルクもキリスト信者でありと云ひ、ないと云ふ、これ等の事は調べ易きに似て分り難きことであります、唯其法の宜きを得ば眞実なることを見出し得られます、設たまたま令たまはグラッドストーンの家庭に及ぼす感化力を見ますれば、彼は眞実の信者と見るより外に仕方はありません、吾等はみなキリストの信者とし、日本の臣民として、実にキリスト教は自己の爲め家の爲め國の爲めに如何なる事をなす可きかと云ふことを、明白に了解して、己か奉ずる教に何時も確信を有ちたきものでござります。

兎に角吾等は今日の日本では満足することは出来ない、今日の状況は満足を与へない斗りでなく、熟察すれば一方ならぬ苦痛と心配とを与へます。吾等は己れを犠牲として是非とも我國を改良しなければならぬ、これには男女共通なる道德の標準を要す、又吾等が邦家と共に向ふ處の運命を確定し、天職をも信ぜねばならぬ、キリスト教は吾等に是等の道をよく教へ呉まれます、我國は夫婦の關係もよくない、親子の道にも過不及がある、朋友の關係にも善くない處がある、売買の路も善くない、我國には今日一定した道德の標準すらもない、是等のことを思へば痛苦腸を断つ感じはありませんか。私共が日本人民として、キリスト信者として、日本の青年として、此社会に對し過去の先祖、現在の同胞、将来の子孫に向て負へる處の責任は大海よりも深く、泰山よりも高くある、人は信仰の自由を有します、左れども眞正の教へを信ずる

が、已れに對する而已のみならず、國家に對して義務である、これ社會の内は交互に感化力を及ぼすからで御坐ります。

吾等はキリスト教が一個人を良くし、又國民を良くすると思へばこそ、誠実にキリストの教を受けて居るなれ、然し今日の教會の有様を見ても、信者となつて社會に出る人を見ても、キリストの力はさまで顯はれて居るとも思はれね、是れ我等の遺憾に任まかさざる所である。今日は最早キリスト教を宣言し、洗礼を受け、教會に入り、教式を守ると云ふ位の事で足れりとす可き時ではない、何の教が果して信ずるものを良くし、社會を良くし、我日本を確かに救ひ得るかと云ふが無二緊要の問題である、唯外國渡來の教は信ずるとか信ぜぬとか、西洋は嫌ひとか好きとか、其風俗を採るとか採らぬとか、國粹を保存せねばならぬとか否とか云ふことは、彼の何の教が實に我國を救ふやとの重大なる問題と比べては未葉の疑題である。

キリスト教が己れを救ひ又國を救ふと云ふ大切な問題は確かに之れを解説せねばならぬ。此の解説は獨斷の妄想では役に立たぬ、今日は歴史上事実上また道理上の解説を要する運命に到着致しました、今年は國會も開け、人民にも自由權利を主張する端緒が開けたが、未だ我國の運命は判然致しません、私は信じます、是非とも我國人を救出して國運を磐石の安きに置き、恰も今日英米の國運に付き危険なる世評のなき如くなさねば寢食を安んずることが出来ぬと、諸君は既に己を救ひしキリスト教を知り給ふか、諸君は真に之れを知り給ふか、己れを救ひ得ざる教ならば他人をも救ひ得ざる可し、己れを救ひし者はまた人をも救はん、キリスト教は果して歐米人を救ひ出だせしか、果して然らば我日本も之れに依りて救はれましょふ、キリスト教が救世の重任を負担して其目的を成就しつゝあるを見て、私はうた感歎に堪へません、キリスト教に此大能があるを信じます、諸君はキリスト教が人心に与ふる秘奥の力を受け、之れを悟らるゝ

時は山をも抜き海をも渡るの勇敢力を感得せらるゝ、而已ならず、死者の蘇生し遠友と再会したるが如き歡喜を得られます、其他此教が哲学に、理学に、また經濟に、社会に、文学に、また婦人に、青年に、家庭に、其他社会万般の事に関係することを御了解になる時は、更に此教の勢力を御悟りになりましたよ。

今各地より御来集の青年諸君は有為の方々であるを知る、大志望を懐き真実と熱心をもて我國を愛し給ふを知る、此夏期学校は此と彼とを視察して諸君の智識を増し、信仰を堅め、真理を攻究する為めに可成の便益を謀り居ります、今日は一体信者が正直質樸の風を帶ぶるよりも、寧ろ儀式的に流れんとして居る有様である、之れは誠に苦がくしき弊風で歎ずるも尚余りあります、斯る人の手を仮りては全能の神も救世の大事業を望まれますまい、キリスト信者で信なき時は信者の名義を有たぬが宜しむ、名あつて實なき信者ほど有害無益のものはありません、今日一個の信者に取りても、教会全体に取りても、無くてならないもので、欠けて居るものが一ッあります、これは確信の一字で御座る、これが諸弊の原因ともなりませぬ、左れば此確信を養成するは目下の急務である、即ち經驗上より出づる堅固なる信仰である、今日吾等は最も深く神に対しキリストに向つて此確信を要します、また己れの有様と国の運命を見透して正確なる信仰を有つべき筈で御座ります。古今此の確信即ち山をも動かすやうな信仰を有つた者が沢山あつて、此人の手を仮りて以て有益なる事業が出来ました、されど今の我国人の信仰は総じて吹けば飛ぶ様なものである、今日此処に御集りの諸君がキリストヤンたるの名義に叶ふ丈の確信を懐かるゝならば、日本を動かすに何かありましょふ、諸君宜しく日本キリスト教徒の天職を知られよ、我等は唯我國家を以て満足する而已ならず、東洋各国は其教化を我天職に依頼して居ることを信ぜられよ、又純正なるキリスト教理を發見して之れを天下に公布すべき責任あるを信ぜられよ、大山を動すにはそれに適する力を要します、急

流を下る大艦を止むるにも又同じことであります。

今日靈界に向つては動かざること大山の如く、悪風に流れ邪行に走ることは急潮を流るゝ大艦の如き、我日本の人民を進め、或は止むるには、我滿腔の精神を以て働くことが必要である、確信なきものにはどうして滿腔の精神が有たれましよふ、堅固なる精神が此確信を維持します、此確信ある人始めて堅固なる精神を有ちます、之れがキリステヤンたる人物を養成する基本であります、此学校は諸君の智識を推し開き、信仰を堅からしめんことを希望して居ります、諸君願くは我國の現況を察せよ、又願くは諸君の地位の重大なるを知られよ、重きを負ふことはポーロの如く、確信愛心はキリストに似られよ、神は常に此の如き人の出るを待ちて、其救世の共働者たらしめんことを望み給へり、吾等も其分に与らんことを熱禱致します。

諸君が夏期学校に御滞留の間、己れの脳を以て神を觀、己れの心を以て神と交り、己れの手を出してキリストを抱き給はば、初めて確信の道が悟られましよふ、爰に至り初めて世の標準となることが出来ます、抑も信仰の箇条の如きは此限りある時日では学ぶ暇がありません、一旦此確信と云ふことを会得せらるゝ時は、紅塵雜沓の間に在つても、寂寞閑暇の中に居ても寂然として悟る處あり、ポーロの所謂斷へず祈る可し、キリストの所謂爾等心に憂ふる勿れ神を信じまた我を信ず可しと云ふ秘義に達せられましよふ、是れ啻に安心立命の道に達したるのみならず、期せずして神意を行ひ、喜んで大業を成就し得る法であります、されば其自他を益すること幾はくでありましよふ。

皆さんは此言を聴かれて仰せられん、此の言たるや誠に善し、然し此確信は如何なる方法にて得らる可きやとそは、既に申置ました通り、己の脳を以て神を觀、己れの心を以て神と交り、己れの手を出してキリ

ストを抱きなさい、語ことばを換へて申しますれば、自己で工夫をなされ、研究をなされ、自修をなされよと申す外はござりません、其訳は工夫もせず、勵んで自修をもなさざる人には確信を得るの路は御坐りません、確信とは経験上の堅固なる信仰であります、故に今回は此学校に於ても余り注入的獎勵的古法に依らず、開発的自修的の法に任せたく、希望致して居ります、諸君希くは之れを御了知あれ。

終りに一言申置きたき事が御坐ります、近頃は兎角失敗々と申す事が流行致します、設たごえ令しは先日開かれました同盟会でも、又去年の夏期学校でも、此集会は失敗した、彼の集会はやりそこなつた杯なごと面白そうに申まをして居りますが、是は誠に不祥の語であります。失敗と申しても腹一杯やつての上ならば、忌む程のこともありませんが、吾等の不熱心なる精神や浮薄なる行爲が此失敗の原因となりますれば、大ひに責む可く又恥づ可きの事ではありませんか。若し此学校が失敗したと云はゞ、夫れはどう云ふ意味でありますか、或る少数の委員が失敗したとか、或る一部分の者が失敗したとか申しましょふか、若し学校が委員のものであり、或る部分の者に属するならば、論者の語の如くでありましょふなれども、若し諸君銘々のものであらば、此学校の失敗は少数なる部分の失敗でなく、諸君銘々の失敗、又学校全体の失敗である、凡そ人は平素自由独立自治など申す事をよく口に唱へますが、これも唯席上斗りの談となつて、事に臨んで活用することなければ、丸で無益の空論であります、諸君希くは力を尽して此校の成功を図られよ、此の成敗は諸君の頭上にもかゝることであります。

諸君は東西南北より御来校せられたる方々で御坐りますれば、其嗜好も違ひ、其事業も異りて居りますれば、とても此短日数の学校にては皆様に満足を与ふる事は出来ない而已のみならず、御不都合の事もあり、御不満足の外もありましょうが、此校を自分のものとし、演説場に会するにも説教会に集まるにも、或は折

禱會を開くにも質問討論をなすにも、何時も愛心和氣を以て、また眞實熱心に勧められ終に好結果の現はるゝ、集會たらしめんことを希望して止まざる處で御坐ります、左れば神必ず此校を助け給はん。

〔※「華盛頓」は、ジョージ・ワシントンのこと〕

説教 耶蘇基督之本旨

海老名 彈正

本日は恭たやまつしき説教を不肖に依頼されて、不肖が諸君の前に立ことは眞に悦ばしくも思ひ、又大に恐しくも思ひます、諸君は主に召れたる方である、されば主は徒らに召し給ふ筈はない、必ず何か必要な目的があるに相違ない、バプテスマのヨハネがユダヤの野で天国は近けりと言ひふれましたが、これは丁度日本の現状にあてはまります、主が我等を召し給ふは我等をして天国の住民たらしめんが為である、語ことばを換へて言へは我日本国にこの天国を建て給ふ手伝を為さしめんと目的より出たるに相違ない、否我等若しこの大任に堪へ得るならば、支那朝鮮は勿論全東洋に於て一大天国を建給ふ所の大業みやびの手伝を為さしめんが為であります、私は之を思へば、眞に神の前に立て諸君と偕ともに感謝すると同時に、又恐縮せざるを得ませぬ。

然るに東洋の天地に天国を建てんと欲せば、先づ我国より始めなければならぬ、我国に天国を建んと欲せ

ば先づ我心の中に建なければならぬ、先づ我心の中に天国を建て、而して後始めて人々の心の中に之を建つることを許されます、若し我心に天国を建ることが出来ない者ならば、決して日本全国は愚か他一人の心の中にすら、尚天国の影だも建ることは覚束ない、況んや施ひて支那朝鮮に及ばすなどとは、夢の中の夢よりも一層甚しきものであります。

熟ら聖書を繙ひて見れば、この天国は最も清らかなる国であることは少も疑ありません、聖書は始めから終りまでこの清らかなる天国を目安として書たものである、其天国の聖き民を養成することは実に神業の本旨である、即ち聖と義と識とを以て造られたる神の像を銘々の心の中に、身の上に造り成すことである、私は聖書には最も高尚なる倫理学が教へてあると言ひましようか、聖書には最も深遠なる哲学が教へてあると言ひましようか、聖書は流石に神の黙示であるがゆえに、完全なる理学が教へてあると言ふて誇りましようか、否聖書には超然たる哲学は教へてない、別に精密なる理学は教へてありません、何となれば是等は聖書に於て研究すべきことではありません故に、さらば聖書につきて誇るべきものはなんでしょう、何も誇るべきものはありませんか、曰くあり、我等か、口をそろへ声を揚て誇るべきものは、公明正大の人物あることであります、聖書ほど高尚なる、元氣ある、正大なる人物の多い、書はない、聖書ほど實際に公義正道の目的を達したる人物を枚挙したるものは（私の読み又聞た所では）ありません、アブラハム、モーセ、サムエル、ダビデ又はエリヤ、イザヤ等の如き、いづれも世界に推し出して毫も恥しからぬ人物である、彼等は遠く世の豪傑の上に輝きつゝあるポーロ〔※〕、ペテロ、ヨハネと等しく、実に驚くべく、活発なる、正大なる、確乎たる人物である、是等は東西の聖賢と比しても更に劣らぬ人物である、且つ聖書は耶穌基督を特書したる書であります、ソクレテースは哲学の理屈に於ては基督に優るかも知らぬ、ピ

タゴラスは数学の手術てぎぶに於ては基督に優るかも知らぬ、其他種々の技芸に於ては基督に優る者多くありましよう、然れども人間てふ肝腎の点に至りては、独り我等の主イエス、キリストが世界に超然として雲上に巍々たるまぎことが聖書の特色であります、基督は眞の人間である、神の子である、聖書は神が、キリストの如き者を造り給ふ經論をかけたものである、之れが基督教の真面目であります、我等がキリストを信じ、又聖書を読む要点は、眞成の人間即ちキリストたらんが為であります、これが取も直さず、天国を建るのであります。

さて人心を解剖して見れば、(キリスト信者はかりでなく誰れも彼れも)二様の不思議奇妙なる反対の性情あるを見出します、一は穢れたる、邪なる、腐つたる所の性情です、一は清く、正く、聖なる所の者を慕ひ、実に思を焦して仰き慕ふ所の性情であります、是は何人の中心にも必ずある、心底を叩て見れば生民あつてよりこのかた未だこの二様の作用あらざるものは一人もない、是れこそ人間の眞の性情なれ、聖書は八釜敷き理論を以て、花々敷き文章を以て、この事を説き示しましたものであらふか、決して然らず、即ち神の靈に導かれたる預言者及び使徒等が肝を揉み洗ひ、腸を絞ほり上げ、心の奥底を叩て、眞に感じ明に悟りたる事にて、即ち心の奥底に於て經驗せし所のものなれば、固より情あまりて言葉足らざる文にて示し置かれました、即ちダビデの詩篇の如きは我等の感じあは能はぬ所の罪惡をも能く感發してある、我等が微かに感じ得る深遠高尚なる人情をも能く写し出してあります、前に述べし邪情惡行の本源は何ぞや始祖アダムが墮落したる結果であらうか、まだ脱却せぬ禽獸根情であらうか、そは兎あれ角あれ、この根ぶかきこと知るべからず、然れどもこの根深き根情を脱却せざれば、決して聖なる神の像を我心の中に彫刻することは出来ませぬ、凡そ世の中でこの罪惡を脱き棄るほど難きことはありませぬども、この聖なる神

の像を全く装ふほど切に願はしきものはありませぬ。ポウロ曰く万の受造者は今に至るまで共に歎き共に
 勞苦くるしみことあるを我儕われらは知る、たゞ此等のものみならず、聖靈の初て結べる実を有る我儕われらも自ら心の中に歎
 きて神の子とならんことを俟つと、こゝが生ると死ぬるとの境目にして、こゝが神の子となると悪魔の子
 となるとの関所である、吾等が目撃する所の人間は是れ真成の人間即ち神の子でない、唯神の子たらんと
 切望するものである、凡ての受造者は皆神の子たちの頭れんことを望む者ではないか、故に真成の人間で
 も神の子と成ること能あたはざる者は空しく滅ふるより外はありませぬ、実にそうです、今の社会も同じく真
 成の国でない、天国こそ真成の国であります、今の国々はこの真成なる天国たらんと苦勞するのです、若
 し天国に進むことの能あたはざる国々は、皆失敗して滅亡する外はありませぬ、故に一國を救はんは欲せば、
 之を天国になさねばならぬ、之を天国となさんと欲せば、先づ自から神の子とならねばならぬ、是を以て
 我日本を救ふと否らざるとは、吾等が神の子となるとならざるとに依ります、故に我帝国の興廢は実に諸
 君の身の上にあります、諸君は奮発興起して之が救ひを全ふすべき責任を負ふて居る、此責任を全ふせん
 には、自ら罪惡に勝得る能力と確信とを有し、施ほひて天下をして罪惡に勝たしむるが肝要です、この尊き
 意識が主キリストの内心には存在します、故にキリストは爾曹なんぢら恐るゝこと勿れ、われ已に世に勝てりと申
 されました、我等の大將軍は世界の大綱を握り、十分其身に經驗せられて既に罪惡に勝ち給ふた其當時は、
 天下未だキリストのものにあらず、天国も未だ建つて居なかつた、乍は去さキリストは其身に經驗し給ふ所よ
 り、あり／＼と天国を世界に建て得る見込が確乎と立たのです、凡そ人々を罪惡より救はんと試みん者は、
 必ずこの經驗より始まること明かです、ルーテルの脱罪の如き、釈迦の脱欲の如きも、各經驗して確信す
 る所がありましたからです、我が親愛なる兄弟姉妹よ、經驗に依らなければ何でも彼でも到底空論です、

どうしても罪惡は去らなければならぬ、理屈も無用にして、文章も必要でない、凡そ人たらんと切望する者は、實際に罪惡を去らなければならぬ、諸君は最早罪惡を脱しましたか、よし未だ脱却せずとも、脱罪の道を了解しましたか、慥かに信仰が立ましたか、抑も罪惡を脱するとは酒好が酒をやめ、虚言者が虚言をつかぬやうな一二の汚行を去るのではない、凡百の罪惡を体より脱却するのです、全く罪惡を仇敵と見なし慥に勝利を得るの確信です、されど罪惡はむやみに脱却せらるゝものでない、罪惡を脱却するには必ず其道があります、キリスト曰く爾曹もし我道に拠らば真理を識らん、真理は爾曹に自由を得さすべしと、凡そ罪惡を脱却したいものならば、この真理は識得せぬばならぬ、いま其真理の真面目を次に申しましよう「ヨハネ曰く道肉体となりて我儕の間に寄れりと、これは事実中の事実、真理中の真理である、道肉体となりて我儕の間に寄れり、大なる哉この真理、神が人に、なり給ふ、神が人に成り給ふことが出来るならば、なぜ人が神の子と成る事が出来ないか、神の我等に於る同情同感は、実に我等が神に於る同情同感を惹起すに余りあるものです、この聖なる大目的がナザレのイエスに於て全く達せられました、蓋し神人一体といへる真理を玩味して悟り得れば、如何なる艱難我が目前を横切るとも、罪惡蜂起するとも、必ず聖なる神に達し得らるゝ希望堅固に立ます、この希望は実に神殿の幔の内に入りて立つ靈魂の錨です、神は我等の父であります、兄弟姉妹よ、我等は実に地下より生れたものでない、実に天上より来たりしものである、神の懷より生れ出でしものである、この難有真理を深く玩味し給へ、この真理に基く信仰と希望とは真に我等を罪惡の中より救ふに足ります。

されど、この地に属する罪惡てふ衣を脱ぎ棄るばかりでは足りませぬ、之を脱ぎ棄ると同時に、天に属する聖、義、識、てふ衣を着なければならぬ、いまキリスト信者の有様を察するに、罪惡の旧套を脱ぎ棄ん

ことをのみ勉て、聖、義、識の新衣を着ることを忘れ情る者少からざるを見ます、一例を挙げれば喜、怒、愛、樂、哀、惡、欲の七情に蕩たごけて屢、人間の理法を眩くらますのみならず、品行を傷やぶふことあるを恐れ、之を制しつゝ終には之を撲滅して、丸で赤裸とならんとする者があります、故に冷ひやなる下界の濕風に触れて風をひき、氣管支カタルや、肺炎や、何や彼やの病を惹起して永生をも失はんとする者が多い、実に氣の毒なものであります、蓋し基督教は何も彼も捨る道でない、清めるの道である、汚よごれに染そみたる心の万端の作用を撲滅するでなく、之を清淨にして活発ならしむるのであります、例へば怒は悪なりとてサツパリ怒を取去て仕舞のは人間を生ずるの法にあらずして、却て人間を殺すのです、憎は悪なりと云ふて之を丸で抑制するのは、人間を殺すのです、故にキリスト教は喜、怒、哀、等の如きものを清める道である、世の中には憎むべく、怒るべく、悲むべく、欲すべく、愛すべき事が沢山ある、之を憎み、之を怒り、之を愛し、之を悲しみ、之を欲するが聖靈に依れる者の動作である、見給へ考給へ、イエス、キリストを考へて見給へ、キリストは天国を建て人間を救ふ大欲がありました、キリストは偽善を見て怒り給ふた、エルサレム城滅亡の兆あるを見て泣き給ふた、実に人性の発動を抑ゆるでない、清むるがキリストの本旨であります、かく社会の秩序を破壊するでなく、之をして秩序正しく各其所を得て満足ならしむるのが、キリストが天国を建給ふ目的であります、人間を宝玉の如く、水晶の如く、朝日に輝く露の玉の如く清淨ならしむるは実に大切なることである、然し是れだけでキリストの本意が達しられたと思ふはまだ大なる間違であります。

外国宣教師の中、多は人を玉にせんとばかり務るは、日本人の優美なる性質を知らざる為か、又は粗暴にして荒々しきアングロ、サキソン人に施したる仕方を以て、知らず識らず又之を本邦に應用せんとの偏癖

が存するかも知れません、果して然らば主キリストの本旨を心得ざる者の如し、日本人には鋭き嶮しき大倭魂がある、此の大倭魂を有せることを知らずして、妄りに其角や牙をもぎとりて之を切り、之を磨きて奇麗なる小器を造らんと試み、終には日本人を柔弱にし馬鹿にせんと試ました、否之を馬鹿にし、之を柔弱にし、之を懶惰にしました、尤も邪念邪情は去らなければならぬ、人の性情は浄めなければならぬ、されど既に浄められたる性情は、之を盛大になさねばなりません、神は限なく怒り、限なく喜び、或は知り、或は働き給ふではありませんか、我等はキリストを信じた以来、怒ることも、喜ぶことも、知ることも、働くことも益烈しくなりましたが、世には怒るべき事柄が充ち満ちてある、非常に烈しく怒らねばならぬ、世には悪むべきことが沢山ある、一層厳しく悪まねばならぬ、キリストは是等を見て真に怒り、真に悪み、真に泣き給ふた、キリストを信ぜぬ以前は温厚にして柔和人善し仏様と称せられた人にも、一朝信者とならば世の罪惡を見ては青筋を張りて憤り、赤角をはやして腹を立る筈である、閻魔大王となる筈である、キリストを信ぜぬ以前は冷淡不感なりし人も、困苦慘憺たる人民を見れば臟腑を絞り血涙を流す筈である、是れがキリストに做ふのである、未信者の時は我身さへ愛することが出来なかつたものも、信者となりては僅に我身を愛するのみならず進みて他人をも愛し得る、もとは一國の愛國者たりしが、今は隣國の友となり、もとは隣國の事のみを思ひ遣つたが、今は見ず知らずの遠國をも思ひ遣り得る、もとは東半球の鼻負をしたが、今は全世界の開明を謀り得る、もとは現世のみを愛したが、今は目に見ぬ宇宙の幸福を折り得る、斯く上達すること、キリストの弟子の本色なれ、是れが真に人間の通らねばならぬ發達の道路です、之を通り得ざるものは、途中で滅びて仕舞ます、されば外國人を賤め、退け、遠ざける如きは、実に区々たる事ではありませんか、我等の思想も、感情も、意思も、天地を貫く神と一体に成らんとすること

が、キリスト信者の生涯の希望です、パウロの如き人を見給へ、キリストを信じてどうなりましたか、柔弱になりましたか、枯木になりましたか、否々パウロは幹もふとり、枝も栄へ、葉も茂りて終にはローマ帝国を蔽ふ勢を顕しました、彼れがガマリエルの足下に在て神学を研究せし氣象と、ナザレのイエスの足下に來りて神学を学びし氣象と、其大小狭博、天地も死生も畜ならず、ガマリエルの足下に在りては一箇の博士たるを希望したり、其眼界は僅に小ユダヤ国のみでありましたが、キリストの足下に坐するや、其眼界は宇内、其大欲は万民を救ひ、キリストと偕に天地の間に王たらんとするにあり、而して此の如き大志望は永遠の未來界に於て達すべきを悟りました、其言に曰く、我等が顧る所は見ゆる所の者にあらず、見えざる所のものなり、そは見ゆる所の者は暫時にして見えざる所の者は永遠なればなりと。

キリストを仰ぎて見給へ、罪惡を惡み給ふた、非常に惡み給ふた、誰の罪惡をも構はず惡み給ふた、罪惡を責め給ふた、怒りて責め給た、容赦なく責め給ふた、それだから殘刻に殺され給ふた、其終焉を見ては強情輕薄なるユダヤ人も、傲慢無礼なる羅馬人も、仰天讚嘆して、是は義人である、人間ではない、神の子であると申した、キリストは鋭く、賢く、烈く、潔く、能く惡み、能く怒り、能く憂へ、能く愛し、能く欲して始終を送り給ふた、凡そキリスト信者たる者は宜しくキリストの如くあるべし、悠々不斷なる人もキリストに従へは勇壮果斷の人となり、柔弱も變じて剛直となり、貧乏も變じて富豪となるなり、然るにキリストを學んでキリストに似ざるは何ぞや、是れキリストに全く其身を任せざるが故であります、キリストに似て神の子たる価値を保つには一大秘訣があります、其は外ではない乃ち献身であります。

献身とは若干の金円、若干の知識、若干の熱心、若干の名譽などを献ずることでない、神は乏しき者にあらざる若干の金を要求し給はんや、神は知らざる所なし何ぞ諸君の智識に依頼し給はんや、神は大能な

り、何ぞ人力をかり給はんや、神は其臣民より租税を徴収する王の如きにあらず、神は封建時代の武士が其主君の為に其身を致す如きを、我等に請求し給ふでない、神は愛なり、無限の愛なり、全智全能の愛なり、故に神は其全智全能の愛を与へんが為に、諸君の智識でない、金銭でない、乃ち諸君を要求し給ふ、天父が諸君の靈魂を請求し給ふは、其限なき愛を盛る聖き器となされたいが故です、諸君が其旧の己れを主の十字架につけて殺して献身の祭をなし給はゞ、キリストは諸君銘々の内心と身上に生き給はん、頭の髪から足の爪先まで、否心の奥の奥底迄神の愛が充滿する様に、何も彼も献け給へ、こゝが肝心であつて君子小人の境です、恩も欲も望も働きも神のものとして仕舞給へ、こゝが血の汗を流さねはならぬところです、腸を練る所です、こゝが悪魔の国を去りて神の国に入るところです、こゝが紅の罪を洗ふて雪の衣を着るところです、我心に非ず聖旨に任せ玉へとの、最も聖なる、最も恭しき、最も奇き主の祈を悟るところです、こゝがペテロ、ヨハネ、パウロ、オーゴスチン、ルーテル、ウエスリ等凡て主の僕等、神の子だちの、経歴したる所の奥義中の奥義、秘訣中の秘訣であります、これから奥が春風諷然たる天国です、限なく照り渡る円満の月を見るパラダイスです。

この上はどれほど金儲けしても心配がない、なぜなれば心の汚れる氣遣がない、却て清き心から金を儲けたくなる、なぜなれば神の物なればなり、実に其通であります、功名を揚るがよい、成るべく頭はすがよい、神のもので神の栄名を頭はすは神の子の持前である、我が名譽と神の栄名は一なり、二でない、何んで我が名譽を慕はずに居られましょう、こゝがかけまくもかしこき主の祈の精神である、爾の子爾の栄を頭さんが為に爾の子の栄を頭はし玉へ、是れ主の最後の祈です、学問も其通り、成るべく勉強して博学多識とならねばならぬ、更に信仰を傷くる恐はない、事々物々の理法を明にし、天下万民の本職を知らする

は即ち神業です、明にならず知らせられずば神業は人間界に知れませぬ、我父は今に至る迄働き給ふ、我もまた働くなり、神と我とは一なり、こゝが眞の永生です、天国です、基督教の秘密です、日本も、支那も、朝鮮も、又全世界も我か所有となさねばならぬ、これぞ神の子の本願です、神の国には境界がない、日本が狭いなど、苦情はいらぬ、心配は無用、慷慨はむだごとです、我等が日本を先づ神の国となしたる上は、支那をも朝鮮をも神はくださる、宇内の公義正道に敵することは出来ない、我等が神と一体とならば、支那をも朝鮮をも我所有となして髪の毛ほども恥る所ない、却て此上なき本心の榮譽である、若し支那朝鮮で足なければ印度をも与へ給ふ、それでも足らぬならば埃太利亞をも与へ給ふ、それでも足らぬならば亞弗利加、まだ取りたいならば全世界をも取れ、天上地下ありとあらゆる物は皆我物なりとあるではありませぬか、否永遠無窮の神すら我物となる、勇壮活発なる諸君よ憂る勿れ、神は天国を諸君に授け給ふべし、大欲有為の兄弟よ、神は無窮の幸福を兄弟に賜ふべし、唯身も生も靈も神に献し給へ、是れ為すべきの祭なり、さらば神は喜んで国を諸君に賜ふべし、故に大志を懐き、信仰を以て、望を以て、愛を以て、義を以て日本天下の運命を担ひ給へ、全東洋の運命は実に諸君の頭上にあります、故に主の為に日本の為に全き人、即ちキリストの満足せらるゝまでに至り給へ、この眞成の人間を陶冶するが即ちキリストの本旨であります、是れが主の諸君を召し給ふた訳です、是れが取も直さず天国を建ること、即ちキリスト教の真面目であります。

「※」ポーロとあるが「ポーロ」あるいは「ポウロ」の間違い」

名声非于立志之標準

嶋田 三郎

過日夏期学校の委員諸君が小生に一日此席に來りて演説せよと申され、小生は夏期学校は甚だ有益なる美拳と存じ居るより都合を見合せ罷り出でんと申せしが、其後丁度衆議院議員の選挙ありて友人の爲め又自身の爲めに至極繁忙にて一日くくと延引し選挙終らば少しは閑暇を得んと思ひしも中々左様に参らず、其中最早明日は閉校せらるゝと承り本日は操り合せて、遽に参ることに相成り升た、

偕此席に於て何を御話し致し升うか、近日社会の出来事に関し感じた事を少々申し升う、人には甲の事に就て笑ふべき者を、乙の場合に當て拵めて立派なる事と思ふ間違が有り升、他人の事を見て評する時は中々よき思案あるも、之を自身の事に引當てると其聡明を暗ますことが有り升、イヤ中々多く有り升、

我国近時の有様を考へると、凡ての時と事とに伴ふが如く、善惡相混じて現はれ來り升が、差引き勘定して見ると、先づ悪い方へは行かず善い方に行く様です、是が世の開ける順序で、文明に赴く段階です、若し悪い方へ赴けば世は段々退歩する訳ですが、善い方へ行くから人間に望が有るのです、近く二十三年間の変化を見るに、此席に居らるゝ方々の中でも、嘗て目に見られし通り、二十四年前には日本は武家天下で、全国は三百余の小国に分れ領分外は別世界の様で、人間にも雲上人と地下人との種類の違ひが有る様で、又土農工商の別は中々超へ難き疆の様で有り、是につれて万事万端究屈で、士以下は学問にも自由が殆んど無き有様でした、然る処二十三年前政治上の一大変状が有てから竹を割く如く節々が刃を向へて解け、石を山の上より落すが如く、百事着々と變り來りて、日本は一君の下に一統の治となり、封建は摧けて郡県となり、今から見れば丸で別世界の様です、勿論小生は幼少の時で有て、旧世界の事は善く知ら

ねども、尚較べて此違ひを見るからには、旧事を能く記憶したる年ばへの方が見たら、丸で別世界に相違なかるふと思ふ、斯く世の有様が変たからには、無形の者も変たかと思ふと中々そふは行かぬ、有形の擅制（せんせい）は消へ有形の封建は廢されたが、無形の封建も擅制（せんせい）も容易には消へぬ、藩閥の弊、情実の害とは無形の封建です、官尊民卑とは擅制（せんせい）の精神が人心を支配する証拠です、左れば世の有志家は藩閥情実の弊を除きたいと叫で、是には誰も異論は無様です、取り別け本年は憲法実行の時で、前には武擅政府（ぶせんせい）が一変して今の政府となり、又一変して真の代議政体となるは今年で、我国人に取りては大切な年で、又悦ばしい年です。

藩閥を打ち、情実も毀（こ）つは正論で、賄賂を嘆き、暴力を斥くるは何人も同意する所ですが、此等の余弊は維新以前の遺物が新政府に伝はりたるなれば、是れを破るには内部の力では行かぬ、新たなる外部力が必要だと云ふことは大に世論を助けて、間接に立憲の時代を早めたと思へば、憲法政治は是等の余毒を駆除するが其ミツシヨンで無ければならぬ、凡そ清潔なる者でなければ汚穢（おわれじ）を洗ふことは六ヶしる、若し汚穢（おわれじ）の物で汚穢（おわれじ）の物を洗へば、洗はざると同様で、差引き五分五分となる、古諺に暴を以て暴に代へると申すは此義です。

左れば封建の遺臭を去るには、純然郡県（じゆんぜんぐんけん）の精神で無ければならず、暴力を去る者は自由で無ければならず、情実を去る者は正義で無ければならず、立憲政治に取りて緊要の機関たる国会は、諸種の遺臭を洗ふべきミスシヨンを有するなら、之を組み立つる要格中には、自由、正義、公平の思想が充て居らなければならぬ、然るに近日目に見、耳に聞く所では、賄賂で投票を買た、脅迫で選挙を得た、地方主義が流行して、人物の鑑定が疎漏（そろう）だとの風評区々にて、其風評も全く無根と思はれぬことが有る、ソシテ是れ等の評を受

くる人が是迄唱へたる所は、自由、正義、公平と云ひていひ続けたるが、是れ等の名器利刃（りしと）を揮ひて藩閥情実、擅制（せんせい）を攻撃したい天晴の勢なりしが、愈々其身を進退する選挙の間に、脅迫、賄賂、地方精神が沸き出たるは如何にも怪むべきことと思ふ、脅迫は自由の敵ならぬ乎、賄賂は情実の悪友ならぬ乎、地方精神は封建の遺物にあらぬ乎、他を攻むるには自由、正義、公平は入用なるも、自ら処するには無用なるにや、若し左様ならば怪しき論法といわねばならぬ。

先づ近日人の耳目に触れたる現象は此の如くなりとせば、有形の改革は有りたれ共、マダ無形の改革は中々に行き届かぬと思ふ、丁度維新の改革にて武擅政府（ぶせんせい）は消へたが、其遺習は情実政府と変じた、明治四年に封建は破れたが、藩閥と変形して今に消へぬと同様に、明治二十三年に擅制政体（せんせいせい）は消へて、立憲政体となりても、擅制の精神は形を変じて国会開設の後にも遺存すと思はねばならぬ、左れば人々が是れこそ百弊（ひやくへい）を洗ふ良薬なりと思ひたる国会も、中々に万能膏とまでには頼まれぬと覚悟せねばならぬ、一般社会の精神が純潔になるを頼まねばならぬ、又之を純潔にすることを力めねばならぬ。

民間の有志と称する人々が他を攻むるには鋭敏にして、自ら処するに過失に陥るは何故ぞや、一ツには自省の感に鈍きによると雖も、榮譽の標準が違ふからです、詳く言へば、虚名を榮譽と間違へるからです、令名榮譽は敢て惡むべき者にあらず、惡むべき者にあらざるのみならず、悦ぶべき者に違いない、しかし名に虚実の別あることを慥（たしか）に知らねば大なる誤りが起る、名は聖賢も之を惡まず、孔子の言に君子は世を終へて名の称せられざるを疾むといひ、令名を揚げて父母を顯すは孝の終なりといひ、孟子は令聞広譽身に施すが故に、人の文繡（ぶんしゅう）を衣るを願はずといへり、何れも名を賞美した語です、左れども名は実の標幟（ひょうし）なれば実行立ちて名に真実あり、若し実に伴はざるの名あらば、君子は自ら愧ぢて任へられぬ筈です、左れ

ば孔子も名誉を称美しながら、又深く名誉を恐れたと見へて、（じょうもん）声聞の実に過ぐるは君子之を愧（けい）ずと言ひたり、其実に過ぐるすら愧（けい）つべきことなるに、其実なきに名あらば益、愧（けい）ぢねばならぬ、左れ共是れは自然に実に過ぐるの名を得たる場合なるが若し其実全くなきに自ら名を得んとて、不正の手段を用ゆるなどは、実に沙汰の限りと申すべし、名は名其物自らに価値あるに非ず名は実の標（ひょう）職たる故に貴るのです、寒暖計は外部の寒暖に伴ふて其度を同くする故に用を為すが若し人造の温氣にて其度を昇ばせては、外部の空氣には毫も關係しない、名も其通り、実に伴はぬ虚名を、人造にて昇せても何の詮もないことです、学校の生徒が試験に高点を得るは、学生に取りて大荣誉です、左りながら高点其物が荣誉なるに非ず、高点を得るだけの学力があるから荣誉なのです、若し学力は無くても高点其物が荣誉ならば、窃（ひそか）に教師に頼み、賄賂を使ひて問題を取り、其答を立派に付けて、コレデ高点を得ても荣誉で無ければならぬ、同列の生徒を脅迫して其答を教へてモライ高点を得ても荣誉で無ければならぬ、若し学校の生徒が斯かる事を為し、たら、再び学友に会はれぬ程の恥辱を得るで有らふ、左れ共同じ事が世に行はれても、世人が深く之を咎めず、之を嘆ぜずとせば、其世は如何、かゝる者が立志の標準たる世なるにや、虚実は問ふに及ばぬ、名さへあれば宜しいといふ世と言はぬばならぬ、此標準にては世は中々に清潔には赴かぬ、有形の擅（せんせい）制は消へても、精神の擅（せんせい）制は消ぬであらふ、実に虚名は人を誘ひて悪道に入る、の魔鬼です、之が為めに自ら過ち、人を過ちたる人、古来幾多なるや、賄賂脅迫は誰れも悪徳だと知りつゝ、之を行ふは、虚名の魔鬼に魅せられたるなり、左れ共其禍（わざ）は此に止まらず、諸君は考へられよ、人に賄賂を遺るの人は、他日賄賂を受くべきの人なることを、人を脅迫するの人は、自由を蹂躪（じゅうりやく）するも顧みざる擅（せんせい）制の朋友なることを、世上の空氣は尚ほ此程度に在り、別に純潔の神水を酌み来りて、此汚穢（おわじ）を洗ふことを力めざれば世は中々に真成の自

由界に交じ難い、徒らに外部の変化を見て、社会上進せりと思ふは皮相の考へです、此一大変化を後來に現はす、誰の任ぞや、小生は諸君が此大任に当られんことを冀望し升（まします）。

説教 聖徒之交

植村 正久

雅各書（ヤコブ） 老章二十四節に云はく

かれ己を照し観て去のち直に其如何なる相貌なりしかを忘る

使徒行伝四章三十二節に云はく

信者はみな心を一にし意を一にして誰一人その所有を己が物と云ことなく凡て之を共に有り（もて）

宇宙と申すものはまことに不思議なものです、それが自分の周囲（まわり）に列んで居る所を見ると何だか奇異の感

じを起します、此の如何にも不思議な宇宙間に五尺の身を有て生れ来て限りなき希望を有つて居る人間は、

抑も何であるか、モトは何んであるか、全体此のモトと云ふこと程不思議なものはない、之を思へば弥（よ）よ

深く弥（よ）よ広い。今日世間は段々と忙がしくなつて参りました、商ひの有様から、道路運搬の事から、学問

其他万事に於きまして、人間が多忙の間にモトと云ふことを忘れ勝ちになりました、人が此の余れと云ふ

ことに就ては段々と感じを鈍ぶらす様になつて参りました、然るに此余れと云ふ思想の感じが充分にない

時、即ち其が強からぬ時には如何してもキリストの教は解からぬ、よし幾分か解つても其信仰の根は甚だ

浅い、^{【やせ】}稍もすれば詰らぬ事情のために信仰を失ふ様な事が起つて参ります。

先づ考へて御覽なさい、キリストの教を信ずるに就ては、第一に己は罪人であると云ふことを知らねばなりません。若し人間の罪其ものが心に明かに解からぬ時は、之を救ふ基督教全体が明かに判からぬ訳で御坐います、若し人が余れを知らぬならば、唯だ上辺の^{【うへへ】}世界の変遷、世間の風潮に連れて歩み、世の中のとこのみ心を傾けて、人の言ふ所や大きな声斗り聞くのである、今日の社会には議論が多くて耳にタコを造^{【つく】}へる位である、真に物を考へ込むことが少ない、それでは何うして余れの有様が解るか、解からぬ。若し人が真の余れを知らふと思ふならば、人間社会の有様を^{【まか】}須らく離れて自分の心中に深く省る所がなければならん、例へば水を取るには地層を掘つて、然る後終に水の在る所に達するのである、人も亦人間の心を穿^{【うが】}つた上で、始めて其の有様が看破し得られるのである、若し或はイエス、キリストに就て疑ふ人がある時に、其感の根本を探ぐつて見ますならば、矢張自分の心に罪と云ふことに就て判からぬ所があるに由ると思ひます、余れなる思想がまだ徹底せぬ所があるからであります、人がどの位研究しましても、宗教の上に於ては何れにか解からぬことのあるに違ひない、併し^{【まが】}乍ら若し真に余れの有様を知るならば其所に如何云ふ邪魔ものがあつても動かない堅固なる信仰の根本が立ちます。

此の世界は実に変遷して流れて居る、此転ずる世界は生きて居るが、亦必ず死にます、盛なるもの必ず衰へます、此の変遷に眼を注^{【つ】}げて自己の事を思ひ回^{【めぐ】}らしますと、流転無常の世界を觀て不思議に思ふ人の目が、凶らずも永遠無窮の事物に達する、天国に迄も達する、斯くて人の生命と云ふものは、五十年を越へて無窮に達することに気が付きます、併しなから骨が折れる、自分の心中に立入て余れと云ふものを確かに充分に視ますならば、余れと云ふ言葉の中には靈魂は滅びないと云ふ信仰があります、此肉体と異なる

所の余れ、天地万物と異なる余、神と異なる余此余れの本心の中には神を愛するの心がある、神に愛される心がある、神は余が神、余れはすなはち神の愛を受くる所のものである、神がアブラハムの神ならば吾等の神である、神と余れと斯様に關係が密であるからには、もう余れと云ふものが永遠無窮に存在して、必ず朽ち果つるものでないと云ふことが明白に信仰されます、昔し彼のアブラハムが自分の子を献げた始末を考へて見ると、其信仰と勇氣は実に驚くべきことであります、今日は是れ十九世紀である、故にアブラハムの様に信仰を試みらるゝことはあるまい、パウロの如く猛獸と闘ふ様なこともあるまい、併し吾々信者たるものは、其れくゝ信仰を練り鍛へねばならない、……………(筆記不可解故に略す)……………之にも矢張り己れを知ることが大切であります、人が自らを以て真に神の子とし、神を以て自らの父とする様になるは、よく己れを知るに由るのです。神は実に我を愛するものであると云ふことを信ずる様になれば、其時始めてアブラハムと全様な勇氣が出る、……………(筆記不可解故に略す)……………

かれ己を照し観て去のち直ちに其如何なる相貌であつたかを忘れたと書いてあるが、此言は深く今日の有様に適して居る。此言葉を考へて常に余れと云ふことに就て信ずるところある様にした、自ら重んずべきを知り、人間の尊ひ所を知りますと、独立や勇氣や希望が起りて来る、視よ世の中は随分八釜しい、昔日の是は今日の非とする所である、近來は宗教に就て随分議論が起り来て、吾々の心を動かすことが多い、是れ余れと云ふ文字の上に深く信仰を建てなければならん時であると思ひます、併し多くは余れを知らないで居ります、世間の波濤の中に自分の身を棄て、仕舞つて居る、是れは大に誤つて居ると思ひます、今日余れと一個人は独立を擴張すべき時でございます、併したゞ己れくゝと斗り言ては行かぬ事がある、また人間は社交的の動物である、付き合ひ交はりと云ふものが需要です、人々相愛することが必要です、愛

がないならば人間は如何も仕方がない、直ちに滅びるのみである、故に此の己れと云ふこと斗り考へて居つても困る、吾々は此愛をも重じなければならん、人類は親み交はると云ふことを主とするものであります、物体に広さ深さ長さと云ふ三つのものがあります通り、此の親み愛すると云ふことにも矢張區別がある、若し私共が交りを広くしたいと思ふならば、天下は広い、貧民救助のことも沢山ある、社会を改良することも出来る、此等は表面の広い愛であります。併し深さが無い、長さが無い。何うも深さも無く、長さもなく、たゞ無闇に広く散布して居る交際の性は、人間の天然亨うけて居るものです、吾々は人を愛する己の如くせよと云ふことの出来る靈魂を貰つて居る、善良なる彼のサマリア人の如く、途中で難儀して居るものを救ひたいと思ふ愛心を貰つて居るのは有り難ひけれども、是れではまだ足らぬ、まだ自分の心に満足が出来ない、そこで人間には室家ホムカがあります、此室家は美はしひものです、併したゞ室家ばかりではまだ満足しない、吾々の世に在つて室家を持つは神の賜ものであるが、それでも飽き足らん様に思ひます、そこで考ふればキリストの教に依て靈の交はり、即ち使徒行伝四章三十二節の、信者は皆心を一にし思を一にして誰れ一人その所有を已が物と云ふことなく凡て之を共に有もり云々、此心を一にし思を一にするはキリスト教会の有様でございます、キリストの教は此世界の住民に眞の行はしむるために出来たものでございます、成る程今の教会には見事で無いこともある、教会には折々争ひごとがあります、色々六ヶ敷ひこともあります、今日の教師伝道者の中に風波がある、争ひ斗りでない、實際の穢けひこともある、世の中に恐ろしひことがあるが如く、教会に於て矢張争がある、風波がある、是は教会がまだ全備しない故で御坐います、ホームは幸福のモトであるが、世間には夫婦喧嘩が沢山あり、また親子相争ふことが沢山ある、をちと甥が議員の選挙を争ひ、兄と弟が選挙を争ひ、相戦あひまひ相闘あひまぎ、愛が少しもないと見

ゆることもあるけれども、其れを以て是等の家と云ふものを非難しては無理でしやう、實際の有様は何でも皆卑い、教会も同じことで中々理想には及ばない、今の世界はまだ完全なるものではない、吾々は決して目の前にある事物を以て満足せぬ、吾々は望によつて生きて居る、吾々は此の不十分なる中を経過して、真に愛を以て充たされて居る境遇に段々と進歩して往きます、終には完全なる有様に達すると云ふことが、是れ吾々の信ずる所であります、……………（筆記不可解故に略す）……………

吾々は天の使ひのことに就て疑つて居りました所が、詩篇のうちに天の万民が神をあがめる、其あがめる声を人が聴取つてまた神を愛してあがめる云々といふことを読んで、膝を拍て感じた、決して世の中のことと云ふものは、目で以て観て居る様な小さいものではない、人間が罪を悔ゆると靈界なる天使中に喜悅が溢れます、宛かも電氣の伝はるが如く、同感同情の電線は天国にヒッパツである、地球上に於て神を愛する心があれば、確に神に通ずる、実に靈の交りは廣大無辺なる奥深ひものである、宇宙に在る万物の靈なる人類が、靈妙なる眼光まなこを發つて宇宙に散布せるものを眺める時は、矢張宇宙に無数の道德的存在者あることが解かる、靈界にも声を發つて神を讚美ほめて居るものを見る、唯物論者無神論者は冷めたい、淋しいものであるが、キリスト教徒は神を信じ神の十字架の前に出て、一旦失ひし所の靈を獲、また神を愛し人を愛し、愛心のつなぎによつて同く結合し居る所の世界が建られると思ひ信じます、斯く考へて見ると天地が一変して見へます、飲食衣服から一切の物が皆春めきて参ります、此愛があれば秋もなく冬もない、四時じ皆な和氣あひ藹々たる春であります、私共がキリスト教を互に信じました日が浅ひ、其れ故党派心あり、不品行あり、種々悪ひ癖を以て教会に入り、分離、争、嫉、怒などを毎日教会に導びき来て居るものがある、矢張日本の政治家商家法等が議員選挙を争ひ、互に分立して居るが如く、教会にも其風がある、世間

の事斗りでない、日本の教会は信者の数もまだ少く、日も浅いのには色々の悪ひ気風がありまして、嘆息に堪へない、此夏期学校は多くの衆が、西から東から南から北から参られまして、思想も精神も異なる所がありませう、此際智識上の利益を得ずとも唯た靈の交りを厚うするの裨益だにあつたなら、其れのみでも夏期学校の利益は大変です………（筆記不可解故に略す）………

耶穌基督之意識

海老名 彈正

私は只今三一の奥義を説く積でない、ナザレのイエスの心底に何ものが存在するか尋ね探つて見たいのです、彼は如何なる意識をもつて居られたか穿鑿せんさくしてみたいのです、そうするには先づ彼れの門を叩き、彼れの堂に昇り、彼れの室に入り、また彼れの懐にまで耳をつけて、彼れの意識の発動を窺うかがふたる、彼れの門弟子の書た伝に依らなければなりませぬ、この伝は門弟子らがイエスの意識を診察したものでない、其発動を見聞した見まる少しく自己の意見を添へて書たものでありますがこの伝を調べて見れば、

第一 ナザレのイエスの心底には罪惡の感じなきを見ます、彼は栄光の神の前、聖なる大使の前、越度ワチドを探す人の前に立て、又自己の意識に訟うとへて、我を罪するものは誰ぞや、我れ自ら罪なしと認むるこの意識を罪するものは誰ぞやと、其心の奥の奥底より発言し給ふた、彼は天父を仰ぎ見て、秋毫の末程も恐れ恥ぢ給ふ様なことがなかつた、イエスと神の間には一片の雲だも遮ぎらない、否薄き霞さへ懸つて居なかつ

た。故に神を識り給ふことが明白でありました、この知識の不足を毫も感じ給ふたことがない、イエス曰く父の外に子を識る者なく、子の外に父を識るものなし、この様な智識は父子の間にも夫婦の間にも、朋友の間にも見出すことが出来ませぬ、未だ神を見し人あらず、唯其生み給へる独子即ち父の懷に在る者のみ之を彰せりと。使徒ヨハネはよくも申しました。

かく神の恩愛はイエスの心中に充ち溢れて、天を仰げば薄き霞さへ懸つて居なかつた、神は上天に輝き給ふてイエスは之を仰き給ふに少しもまぼしき所あらざりければ、骨折なく心遣なく自然に満腔の熱情より、至聖の靈泉より沸きてアハ父よと神を呼び給ふた、是は長き研究の結果でもなく、久しき觀念の末でもなく、生れながら自然に呼び出し給ふた真理であります。

故にイエスの思は神の思であります、神が左と云ひ給へばイエスも左と云ひ給ひ、イエスが右と云ひ給へば神も右と云ひし給ふ、故に神の喜はイエスの喜にして、イエスの嫌は神の嫌なり、かく思想の表裏、情感の細大ありと雖も、一として神の作用に一致和合せざるはありませぬ、実に神とイエスは一体である、曰く我と父とは一なりと。

故にイエスは神の様なもの、神はイエスの様なものである、少しも違ひはない、イエス曰く吾を視るものは我が父を見るなり、我れかく久しく爾曹（なんじら）と偕（とも）に居りしに、未だ我を識ざるか、我を見し者は我父を見しなり、何ぞ父を我儕（われら）に示せと言ふやと。パウロ曰く彼は人の見ることを得ざる神の状なりと。ヘブルの書に曰く彼は神の光輝（かがやき）、その質の真像（かた）なりと、宜（むべ）なる哉、かくイエスと神と二ならざる訳は、神はイエスに居り、イエスは神に居り給ふ訳である、故にイエスの物は神の物、神の物はイエスの物である我が魂は爾の魂、爾の魂は我が魂なりと金石の親友も、神とイエスの交には比較することは出来ませぬ。

之に加ふるにイエスには至て異様な意識があります、彼れの生命はベツレヘムに於て始りたりとは考へられませぬ、彼れの生命の本源は永遠無窮にあることを見出します、イエス曰く我はアブラハムの有ざりし先より在る者なりと、其祈禱に曰く、父よ今我をして爾と偕に榮を得させ給へ、即ち創世より先に爾と偕に有し所の榮を得させ給へと。前段に申述べたる如く、ナザレのイエスは我等に優りて神聖なる、高大なる、深遠なる、尊榮なる意識を持給ふなれども、自己と天父との區別は明白に立て給ふた、その語に我を見る者は我を遣せし者を見るなりと云給ひたれども、是れは天父とイエスは同一との意義にあらざして、へブル書に説明してあるが如し、曰く、彼は神の榮の光輝、その質の眞像なりと、又我と父とは一なりとあるも同一の意義にあらざるは、イエスの他の語に照らし合せて明かに知べし、曰く聖き父よ、爾の我に賜し者を爾の名に居らしめ、之を守て我儕の如く彼等をも一になし給へと、又曰く、こは皆一にならん為なり、父よ爾我に居り我亦爾に居る、かくの如く、彼等も我儕に居て一にならん為なりと、又曰くこは我儕の一なるが如く、彼等も互に一にならん為なりと、是等の語を玩味すれば、神とイエスとは其徳性に於て、心に於て目的に於て、略言すれば其品質に於て一なると明々白々であります、されと其ペルソンに於て、大小本末に於ては、父と全く別なり、そは左に掲る語に依て明白ならん。

イエスは父より小なることを知り給ふた、曰く、我が父は我れより大なりと、又曰く、使者は之を遣す者より大ならずと、イエスは神の使者たることを承知し給ふ故に、其語は一々父の命に基く、曰く、我れ已より言ふにあらざ、我を遣し、父我が言べきこと我がかたるべきことを命じ給へるなりと、故に其職分終れば父に復命せんとて世より行き給ふた、又イエスは其生命も何も彼も父の賜なることを認識し、且謝し且祈り給ふた、曰く、父は自ら生を保てり、其如く子にも賜ひて自ら生を保たせたりと、又曰く、爾曹人

の子を挙げ後、我れの彼なるを知り、また我が自ら何事をも行はず、唯我が父の教へに従ひて此等の事を
言るを知るべしと、又曰く、父は我に万物を予へ給へりと、是等の語によれば、イエスは其聖なる生命を
も、奇跡をも、教をも、一として自分一己より出でしにあらざり、全く父の賜なることを承知し給ふたので
ある。

前段に陳べたる二様の意識は互に矛盾するものでない、実に尊きかしこき意識であつて、イエスが自ら活
る神の子キリストなりと認識し給ふた所であります、是れがまた、我等がイエスを活る神の子キリストな
りと仰ぎ尊まざるを得ざる難有意識であります、この意識は至て不思議なる様なれども、我等理性に訟へ
て深く玩味して見れば、此ぞ活ける神の子キリストの意識たるべきと承知せられます、この意識は古往
今來の聖哲が僅に理想上より幾分か想像し得たれども、ナザレのイエスに於て實在の意識とはなりました、
イエスのこの意識は、千辛万苦を貫き始終一であります、この意識はナザレのイエスをして、実に当るべ
からざる誘惑の間をも首尾よく通過せしめました、今この意識の眞実にして妄信ならざるを知らんが爲に、
この意識を傷けんと致したる最大の誘惑を枚挙して見ましよふ。

イエスは四十日四十夜食ふことをせず、悪魔と戦ふて飢へて死なんとし給ふに際し、非常なる誘惑に遭遇
し給ふた、神の愛子キリストがかく飢へて死なんとする筈であるふか、キリストならば箇様な場合に立到
る筈はあるまい、キリストにニヤハシからぬことならずや、神の子と思ふは爾の妄信ではないか、思ひ違
つてはゐないか、訝しきことではないか、実に非常の場合で、九死一生の場合です、神の子にして餓死せ
んとは極て不審なり、今がよき験しどきにはあらざるか、この石を變じてパンとなすべき時にはあらざる
か、此際疑惑の愁雲イエスの意識の天に現れいでんとしましたか、然らず、彼は却て炯々たる意識の眼光

を以て、この誘惑を拒絶し給ふた、

キリストの出現せし始は旭日の勢で、エスツライロンの草花よりレバノンの柏香樹まで靡かぬものはなき風情にて、神の預言者バプテスマのヨハネも我が喜び満ることを得たりと云いましたが、間もなく預言者は捕はれ、人民の熱情は漸くさめて、イエスの事業花々しく進歩せず、義不義を制せず、善不善を庄せず、公義の旗翻る色なく、悪人跋扈して義人空しくマキロスの獄屋に呻吟す、故に神の尊き預言者は、其曾てバプテスマを施せしナザレのイエスが慥に神の子キリストであることを訝しく思ひ始めました、この預言者は神の使者、確乎不拔なるエリヤ、女の生みたる者の中にて最も大なる預言者でありますが、其弟子を遣はしてイエスの意識を試みました、来るべき者は爾なるか、汝果してキリストに相違ないか、我等また他に待つべきかと言はしめました、実に危急の時です、イエスは神の預言者に疑はれ給ふた、確乎不拔なるエリヤは大なる烈しき惑の電気をイエスに伝へまして、実に危急の時です、イエスはこの電気に感染せずして居られましたるふか、其意識は少しも震はれませぬでしたるふか、然り真にイエスの内心は風なく波なく明鏡の如くありました、曰く、爾曹が聞く所見る所の事をヨハネに往て告よ、瞽者は見、跛者は歩み、癩病人は潔まり、聾者はきき、死たる者は復活され、貧者は福音を聞せらる、凡そ我が為に躓かざる者は福なりと、蓋しイエスと預言者とは其任命を認識するの道同からざればなり、預言者は異象により、聖霊の非常なる感動に由て其任命を認識す、イエスは然らず、異象にも由らず、聖霊の非常なる感動にもよらず、其生来の意識に由て之を認識し給ふが故に、其心情は常にして変ずることがありませぬ。

かくイエスの真面目漸々世間に明なるに従て、バプテスマのヨハネすら疑惑の雲をユダヤの天の一方に起しました、イエスは大將軍となつて神の選びし民の獨立をも囹り給はず、赫々たるユダヤの王位にも昇り

給はざれば、ユダヤ人は極て失望をなし、イエスの門徒すら多くは離散して、彼と偕ひととにせざる場合に立至りました、この時イエスは窃ぬすに十二の弟子に向ひ爾曹なんぢらは我を言ひて誰とする乎と問ひ給ひければ、シモン、ペテロ答て爾はキリスト活る神の子なりと申ました、イエスは之を聞きてなんと言給ふたか、嗚呼天下我を棄すつ、我を知る者はそれ爾なるかなと、言ひて自ら己れの意識の微かすかなるを慰め給ふたのであるか、然らず、ヨナの子シモン、爾は福なり理は天父の賜なりといふてペテロの識見を賞し、ペテロの幸福を喜び給ふた、ペテロの答言はイエスに於て更に関はる所がありません。

尚一例を拏ますイエスは其死生の分るゝとき、取分け其キリストたる意識の光明をはなち給ふた、彼れがユダヤの国会に於て、羅馬の知事の目前に立て、天地の間に懸かけれて神と人とに審判せられ給ひし際、其意識実に空前絶後の光明を發しました、祭司の長イエスに問ふて曰く、爾キリストなるかと、彼に答て曰く、爾が言る如し、且われ爾に告つぐ、此後人の子大権の右に坐し、天の雲に乗りて来るを爾曹見るべしと、羅馬の知事イエスに問ふて曰く、爾は王なるかと、イエス答て曰く、爾の言ふ所の如く我は王なり、我れ之が為に生れ、之が為に世に来れり、そは真理について証を為んためなり、凡で真理に属まはる者は我声を聞くと、イエス其終焉の期に際し、事竟ぬ父よ我靈を爾の手にあづくといひて、胸中磊々磊々一物なく、氣絶へ給ふた、彼れが三年がほど、万難千嶮の間を通過して始終一なりしは全く内心に此明々の意識あるに由ります、実にイエスは此明々の意識に照らして凡ての誘惑を退け、凡ての問題を解し、凡ての患難を嘗め給ふて更に余念がありませんでした。

是よりイエスの此意識が彼を欺かざりしことを証したいと思ひます、それキリストは神の愛子で、世の生民を救ふて之に幸福を与ふることを神に命ぜられ給ひたれば、凡て生民の災害を去りて之に幸福を与ふる

力あることを識り給ふは、恰も我等が立居振舞をなし得ることを識るが如し、故にイエスの意識の真か妄かを慥かめんと欲せば、事々物々其意識の假に何事でも実行せられたかを見るに如くはありませぬ、若し左様であるならばイエスの意識は真実であつて妄信ではありませぬ、されば何事でもイエスの意識通り実行せられましたか、視給へ、イエスが其意識に照らして癩病人に我旨に適へり潔くなれと曰ければ、癩病人に潔まり、百夫の長に往け爾が信仰の如く爾に成るべしと曰ければ、其時に長の僕は愈たり、瞽者を憫みて其目に手を按ければ直に見ることを得たり、五のパンを取り天を仰で謝し給へは五千人食ひて飽きたり、ラザロよ出よと曰ければ、死者蘇りて出で来れり、キリストは陰府に遺しおかれず亦その肉体は朽果すと承知して十字架に死し給ひければ、果して第三日に復活し給へり、凡てイエスの奇跡は真に其神たることを証する能はずとするも、明に其意識の真なるを証するに足まず、

イエスは神の子キリストなるが故に、もし地より拵られなば万民を引きて我に來らするとの意識を持ち給ふた、果して此意識の如くなりましたか、一千九百年間の歴史は明に此意識の真実なるを証します、彼れ三十三歳にして中途にして斃れ給ふたと雖ども、其国は益盛大を極めて限りありませぬ、イエス曰く一粒の麦もし地に落て死ば多の実を結ぶべしと、視給へ、世界で最も広大なる王国は何でありますか、何国が最も強き兵隊を出しますか、何国が最も多く英雄豪傑を起しますか、多数の学者を生ずる国は何処にありませぬ、大英国ですか、北米合衆国ですか、日耳曼帝国ですか、將た魯士亜帝国ですか、否々然らず、ナザレのイエスの王国ほど多く英雄豪傑を起し、多数の学者を生じ、最も強き兵隊を出したるものは有りませぬ、英雄にはコンスタンチン大帝、シャールマン大帝、クロムウエル、ナポレオン、ワシントンあり、学者にはゴエテ、ミルトン、ニュートン、カント、ダンテあり神学者にはオーゴスチン、ルーテル、カ

ルヴキン、ウエスレーあり、帝王にはウキクトリヤ女皇、ウキリヤム帝王、アレキサンドル帝あり皆ナザレの小民イエスの意識を承認して其足下に降服しました、この意識は哲人の理想でない、学者の発見でない、詩文家の文飾でない、実に事実中の事実であります、この意識が我等の信仰の基礎です、奇跡でない、預言でない、真理と聖書の符合でない、インスピレーションでない、永遠の苦刑でない、実にこの意識がこの明光ある、確乎たる真実なる尊榮ある意識が、即ち我等の信仰の土台となすべきものである、この意識の上はこの意識の中に信仰の土台を深く、堅く据置くときは、イエスがこの意識に由て于難万嶮の間を通過して始終一なりしが如く、雨ふり大水いで風ふきて其家を撞とも倒るゝことがありませぬ、是れ磐を基礎となしたればなりであります、

贖罪論

ドクトル、ジー、ダブルユー、ノックス

誰か罪を赦すことを得ん

馬可伝第二章七節

サー、エドキン、アーノードの新作の詩「世界の光り」にポンテラ、ピラトがマグダラのマリヤに主イエスが十字架に懸つた后ち三年目に邂逅せしと云ふことがある、此烈婦が己れの救ひ主を残酷なる十字架の死にあはせたる人に出会つた時に、一時は旧情劇く現はれきて知らずく、もと剣を帯びて居たこと故に、手で帯の圍りを探りました、処が之れは只一時の感情であつて、キリストに對する愛の為に全く思ひ直し

ました、此の婦人はキリストを愛した故に、キリストが赦した如く己れも赦さねばならぬ、キリストが己れを十字架に打ち付けた者を赦した如く、己れも亦此の不正なる裁判官を赦さねばならぬと、全く思ひ返しました処がピラトは驚て、誰か旧の悪事を赦すことが出来ましようかと問ひました。

誰か罪を赦す事を得んとは、人間誰でも問ふべき処の間である、然るに羅馬のストイック派の人には此の間に対して答がありません、何故なれば哲学には赦すと云ふことがないからです、ギリシヤ人も亦、人間の一生涯をも諸ろの神をも、運命と云ふものが容赦なく支配して居ると云ふ事を知つて居つたきりで、何んなに人々が涙を流して後悔しても、決して旧の悪事は赦るさるゝものではないと思つて居つた、仏法も亦同じ様に無慈悲なものである、何様な悪事でも罰せずには置かない容赦なく罰すると申すからである、今日の科学と申しても機械上の理を講じて居るのみで、自然の法則を破れば何様なあつても夫れ相應な自然の罰があると云ふよりは他かに解つて居りません。

だに依て此の問題は中々解し易きなきものでない、事物の表面を見て解るものでない、少し斗りの骨折りで其答が解るふとは夢さら思へないことである、乍去キリスト教の方から申せば、此の答はキリストの真理の中の骨髓たるべき者である、罪を赦すと云ふことは信仰箇条の中心であり、又信者生涯の中心である、実に此の事は貴重な問題であり、教会の讚美の問題であり、又聖書中の一大問題であります。然らば神は実に罪を赦しますか、此の問に対して教会は心を一にし声を合して答へて申す、キリストの為に神は罪を赦し、吾儕は是に依て神と平和を得ると、乍併何様して神がキリストの為に吾儕の罪を赦しますか、此の問に対する答は即ち神学上贖罪の説であります。神が罪を赦したと云ふことは經驗上の事実であるし、之れを証明するには、何様な低ひ信者でも出来る事である、既に事実で有る以上は、其方法に就て吾儕か

述べる所の説の是非如何に關係するものでない、丁度光りの有ると云ふことは事實であつて、学校で先生の教へ方の善いにも悪いにも毫も關係して居らんと同じ事である、罪を赦すと云ふことは如何なる神の子にも示されて居る、簡單で、自明で、大切な事實である、何様して罪を赦すかと云ふ方法の如何に立至つては、何様に深く哲学を知り何様に博く學問に涉つて居る學者とても、充分に解き明かせるものでない、今朝は夫れ故に、聖書に教へてある内から、是れに關係した大切な原理を短かく御話し申そふと思ふ。

贖罪に依て罪の赦しある事

第一 赦の公準 (一) 人類のペルソナなる事○凡ての眞の宗教は人類を貴むものである。人類を以て單に器械的の者となすことなく。自由なるペルソナであると確認して、之れに反対する教は皆擯斥するものである、人類は決して過ぎ去つた原因の結果のみではない、或は又原因結果の定まつた線の内にある節こぶのみではない、外部物資の世界のみに属して居る者とは全く異なつて居る、彼れに徳あれば是れ彼れの徳にして、吾等の讚を受くるに足り、彼れに悪あれば是れ彼れの惡にして、吾等の辱めを負ふべし、運命とか、不得止の必用とかは、彼れを全く支配するに非ずして、彼れは己れの行為に對して責任を有する所の靈性の人間である。(二) 神のペルソナなる事○人類と相對する所の宇宙も亦其内部の性質は玄妙なる道理を備へ、決して只一個の器械でない、人類に於ては器械より更に高尚なる性質の存するが如く、宇宙に於ても亦器械學を以て終局の哲學とは云はれない、宇宙には唯器械的の力あるのみにして、毫も柱る事が出来ず、容赦なき処の自然の法則のみが、宇宙を全く支配するのであるならば、罪の赦しなぞと云ふことは、宇宙の内に入り得ざる事である、乍去宇宙の内には自然と運命と法則のみではない、宇宙の秘訣は吾等人類の父である活きたる神の内存して居る、人の靈魂は云はゞ、總ての事

物に先んじて限りなき所の靈即ち吾等の父なる神の薄く映せし所である、若し神を忘却し或は神なしとする時は、罪の赦なぞと云ふことは一つの空語と異ら^かない、乍去若し神を知り彼を愛するならば、恰も父が己れの子供を慈むが如く、神も亦己れを信じ、己れに任かせるものを愍^{あは}れ給ふことが解るであらう。

(三) 神は総ての物の内に在ます事○乍去神^{ちかみか}の其子供を赦すことは、決して吾等一個人が他の人々に於けるが如きものではない、「若し神を以て凡て其仕事の内部に住み給ふと認むるに於ては、贖罪の説は忽ち其全体に於て能く整ひ、又其意義に於て深奥なるものとなる。昔時宗教改革者は大に此の問題を研究し、神は宇宙の道德の大能として吾等を支配し給ふと云ふ真理を主張したが、吾等は大に之れを謝して宜しむる、力や法則の世界は神と離れたものに非ず、又唯に神に隷属して居るものでない、力や法則は在まざるなき神を吾等に示すものである、されば神は罪人のみを取扱ふのでなく、或は必要や法則の世界を、別にして支配するのではない、宇宙の法則は神の法則である、彼れは又人類を死より免れしめて、己れの子の位置と其位置に対し相当したる特権をも与ふるものである、夫れだに依て神は宇宙全体を残す処なく支配するものである、即ち道德界の大権も物質界の大権も共に握て居るものである、アンセルムやブシネルは二人ながら同じ様に此の大切なる事実を忘れて居る、アンセルムは罪人の神に対するは負債者の債主に対する様なものであると云つて居る、ブシネルは又神の罪を赦すことを認めて居るが、其の關係は其の人丈で終つて仕舞ひ、矢張罪の結果は何様^どしても負はなければならぬと云つて居る。乍去罪を赦すことは罪を犯す程のものである、罪が世の道德上の秩序を乱し、こゝに苦みと死とをば持ち来たすが如く、罪を赦すことは罪のなした事を全く転ずるものである、若し神がゼウスの如くあつて、諸^{あま}の神人よりも高き処に居て、權威も又優りながら、一個人の如きを免れないならば、何様^どして唯一個

の心意が世界の秩序を変化し得るかと云ふことに驚き且つ惑はざることを得ない、乍去世界（まゝりかろ）と神は一つに結び付て居るだに依て神は世界の上に立て雷に依て之れを支配する所のゼウスの如きものではない、神は凡ての物の内に有り、総ての物は又神の内に有る、自然は決して神に越へたものでなく、法則も力も神の外にあるものでない、自然も法則も力も皆神のものである、されば神が赦す時は靈魂は平安を得、罪の総ての結果は、道德上の事にせよ物質上の事にせよ、皆共に免れるものである。

以上申たことは罪の赦に於ける公準である、即ち人類のペルソナなる事又彼れに自由の意志と道德上靈魂上の責任ある事、次に神のペルソナなる事、之れに比ぶれば凡て人類のペルソナなる性は其不完全なる薄き反影なる事、次に又神が凡て彼れの作りし物の内に在ます事、是れに由て世界に秩序を与へ、彼れの造りし宇宙に生活力を与ふることである、

第二 赦の性質（一） 赦は靈性であるペルソナである。赦と申すことは唯一つの語（ことば）ではなる、口より発する音でもない、凡そ神の語（ことば）は吾等が日々話す処のものとは全く違ふて居る、神の一語は世界を造り得しのみならず、其語（ことば）は世の初より神と共にあつて、神であつた、即ち父と相合して一なる所の神の子であつた、神の語（ことば）が三位の内の第二番目のペルソナである、彼れは即ち赦と云語（ことば）にして赦と云ふこと其ものは実にペルソナである、罪人の繩を解くが為には冷たき書いた文字で足りる筈はない、赦すと云ふことを知らず為には、温和なる容貌を示めさなければならん、旧の恩寵を恢復（かいはく）したことを知らせる為には愛憐の声を要する、世間の父が道に背きたる子供を赦すのには、必ず其子を己れの室家に誘ひ、己れの中に誘ふのである、此の様な赦しのみが其目的を達せしむる完全なるものである、況してや神の赦に人の赦よりも劣て居る筈はない、罪を見通すと云ふ宣告をする斗りでなく、罪より贖（あがな）ふ所の愛を充分に示

すものである、此示はイエス、キリストの贖罪に於て完全なるものと云ふべきである、教長や、聖なる歌人や、預言者はエホバの赦しを人に示したが、其の書た語は神の靈に充たされて、神の恩寵を記したものである、故に古往今来之れ等に勝りてよく書たものはない、乍去これでも世の人が信じ受けて神に帰る為には足りない、そこでキリストが此世を救はんが為に父の御坐より降り、充分に罪人を赦すと云ふ愛を示されたのである。(二) 赦は倫理的である罪の赦は吾等の主が全く倫理に合したる犠牲に依てなされたのである凡そ罪は法則を犯したることである、故に罪の赦は人の崩たことを建て直すものである、罪は永遠の神に對する「反逆」であつて、罪の赦は新たに心の奥より神の意に従ふことに依て初めて受るのである、罪は人間の性を頑に押し通すこと、又神に逆つたる人間の意志である、罪の赦は死ぬ時までも眞実に神の意に服することに依て、受けらるゝものである。イエス、キリストの贖罪は宇宙開闢以來聖なる神に對し最も完全なる犠牲であつて、則ち生涯の従順を最も高く示されたのである、此様に死する迄も己れの身を犠牲にすることは、父なる神の最も嘉することであつた、神は実に心の従順なるを求め給ふので、牛羊の犠牲を求め給ふのではない、勿論苦と痛みと死丈では罪を贖ふに足らんものである、神は決して暴君でもなければ、残酷な圧制者でもない、決して好んで己れの子供を苦ませ、罪人を罰して歎び給ふのではない、神の歎で受給ふ所の犠牲は倫理に合たる従順と、靈を以て彼の意を受ることと、人類の救の為に自ら犠牲となることである、キリストの犠牲となつたのは、実に此様なものであつて、神の愛と信仰に充ち、自由で完全に靈に依つた所のものである。(三) 赦は同情的である凡そ罪の赦とは最も高く之を見れば、愛と同情から来るものであると云ふは、我等の既に知たことである、丁度父が其子供を憐む様なものである、此の事は不思議な遠い世界のみにあることでなくて、人々互に同情を感じる内

にあるものである、即ち吾等の罪を難じながらも、吾等と一つにならせる愛の内にある、神がキリストの中保なかたもちに依て吾等の罪を赦すのは実に此の様なものである、神は吾等の心の弱きを見てひどく思ひやる、高僧の如きものである。神の子が人となつたのは吾等の兄とならん為である、彼はまた人間の悲みの深きを味ひ、嘆くものと共になげき、曾て己れの父と共たりし栄光を捨て吾等の性を身に負ひ吾等と一つになつて、奇跡怪事に依らず、吾等の低き位置を取り死の苦きを味ふことに依て吾等を救ふたのである。(四) 赦は代理的である斯く最も高尚なる又最も真の意味を以て、キリストは吾儕わなみの代に苦しめられた、彼れは実に吾儕わなみの為に苦まんとして吾儕わなみと共に苦んだのである。凡そ代理と云ふことは世間一般にあることだが、最も明かに道德世界に現はされたのである、代理の法則は今日程明かに確しんりと解つたことではない、ダーウインの進化論に云てあるが、総て進歩と云ふことは、数限りない個別や種属が犠牲となるからである、勿論是等の代理は人類を除くの外求てしたことではないに違ひないが、靈の關係に於ては、罪を犯した人の代りに自ら振つて其苦みを受くればこそ、救と云ふことがある。世間の父が子供を赦すにした処が、子供の不従順が自分丈に止るにせよ、中々苦痛を感じるものである、若し又子供の悪が他の人を害した時には、父が自ら其悪事の結果を身に引受て初て其子を赦すことが出来る、さりながら神に対する罪は非常に大なる關係の生ずるもので、世界の道德を破る而已のみならず、其害は延て數世に及び、他国の民にも伝播するものである、之れは天地の主宰に対する謀反であつて、神の怒に触るべきものである、斯様な悪は容易に治することか出来ない、況まして輕卒な文字で現はした文面などが其罪を贖なぐさふとは思も寄らんことである、斯様な罪を淨めんとするのは蒼天に響た語こゝろこゝろでなかつた、吾儕わなみの罪を負はんか為に苦んだ神の汚れなき羊仔であつた、彼の打たれた疵に依て癒され、彼れは木の上に吾儕わなみの罰

を荷ひ、神は又已れの子が吾儕わがらの代りとなり吾儕わがらの持つべき苦みを引受たが故に、吾儕わがらを赦したのである、それだによつて新旧の聖書も預言者も使徒も教会も信者も皆喜んで、已れの血を以て已れの民を救ひ正しき身を以て正しからざるもの、為に苦んだ処のキリストに総ての栄光を帰する訳である。

第三 赦の結果（一）後悔する人に於ける結果。キリストに依て受る赦は後悔する人に平和を与へる、斯に於て罪人は已れの父の家に帰り父の当あたに已れを迎へんとして出で来り給ふを見る、赦は吾儕わがらが価値あるから受くるのではない、神に帰てから後永い間罪の感じは実に鋭いものである、ポーロの様には罪の最も大なるものと叫ぶのは却て恩寵の与へられたのである、既にキリストと共に居るからして、自ら吾儕わがらの罪あることを以て彼の汚れなき神聖と照り合すに違ひなひ、既に彼と共に居るならば、段々と深く信じて来る、凡そ吾儕わがらが信仰に依て救はれたのは神の恩寵にして、吾儕わがら自身の及ぶ処でない、全く神の賜であると思ふ様になる、キリスト教徒が贖罪の教理をあれ程に尊む訳は、十字架の赦に是程の意味が有からである、吾儕わがらは神と和らき謙遜である、吾儕わがらは既に十字架に依て救はれた者であるからして、已れを正しいと誇る事はない筈である、吾儕わがらの心には一つもよきものはない、総ての良き事は、吾儕わがらを愛し吾儕わがらの為に已れを犠牲にした神の子の恩寵によるものである、十字架の下に常に住む時は、吾儕わがらの為に十字架に懸て死する迄も已れを空ふしたものの、兄弟となるのである、そして段々と吾儕わがらの君なる、吾儕わがらの救主なるイエス、キリストの恩寵に満ち、又彼を知る様になる、常にキリストの恩寵を思ひ常にキリストに眼を注ぎ、聖靈の助に依て彼れの生活と吾儕わがらの生活を一にすれば、吾儕わがらの靈魂は生長して其貌まねは終にキリストの如くなる、キリストに似んとするは信者の望であつて、キリストを真似んとするは信者の生命である、此様に彼我の間に密接の交際のある時は、終に信する処の魂をしてキリストの如

くならしむるものである、若し此等の恩寵のあるならば、此世に於ても彼世に於ても、総て他の恩寵が引き続くる、罪の結果は悉皆なくなり最早一の罰もなく、一の罰もなく、死にすらも勝利と得る、さりながら猶苦みがあると云はうが、是は決して罰でない、著しく恩寵をいや増さんが為に吾儕のすべき仕事である、吾儕の救主が曾て歩んだ所の神に至るべき栄へある道である、死は生に入るの門である、痛も病も総て此世の不幸も皆貴き限りなき命に就て吾儕に示すものである、損耗は何でもない、吾儕が損耗とすることを以て、吾儕の君なるイエス、キリストを知るの優れるに比ぶれば丸で汚穢の如きものである、赦されたるものには尚聖書に於ける喜びと平和がある、吾儕はキリストと共に此世を継ぐことと、彼世の生命を得ることを妨げる教を熱心に斥けねばならぬ。勿論吾儕は彼世に於て如何なるべきやを知らず、唯知る彼の再び来る時に吾儕は彼を有の俣に見るに依て彼の如くなるべしと、彼の義は吾儕のものとなり、彼と共に吾儕は神の世継となる、キリストに依て受る赦はアダムが失つたよりも尚大なる恩寵を与へるものである。(二) 宇宙に於ける結果○キリストの贖罪は、其力の及ぶ所全世界に涉てをる、総ての悪を治め、凡ての不調子を繕ひ、総ての悪を反へし、神の御国の建てらるゝ時に前駆となるは即ち是である、神の仕事は徐にして万世に涉り神の目的は事を急激にせぬことである、千年の永きは彼に於て一日の如し、さりながら確に神は終に其意を完からしむるであるふ、彼はキリストに依り吾儕を赦した如く、吾儕人間全体をも漸次高尚ならしむるであらふ、過去数千年の間如何に彼が働き給ふたかを見、又物質の世界に於ても智識の世界に於ても靈魂の世界に於ても、如何斗りの進歩を神の真理がなされたかを考へねばならぬ、全き人類は其贖れんことを待つ、されど其贖は遠き時にあらずしてキリストの栄ある贖が、水の海を蓋ふが如く全地に弘がる時である。(三) 神自らに於ける結果○神が恩寵を以て

吾儕わがらの罪を赦すと伝ふことを研究してみれば、キリストはどうあつても苦まなければならずと云ふことの深い意味が解る、此は秘密中の秘密であつて、誰れも其意味の深きを測ることは出来まい、神の無限の義か無限の愛として吾等に現われたのであるが、誰れが其深き底を示すことが出来よふか、聖書に依つても哲学に依つても贖罪の必要は、人へのみ存して居ると見られない、限りある事の下には限らない事がある、時と云ふことに対して常に永遠と云ふことがある、五感の世界は其原因を不変の物の内に有て居る、この物は凡てのもの、裡うちにある、同じ様に靈の世界に於ても罪を赦すと云ふことは、吾等の後悔する為のみではない、贖罪の道を経ねばならぬ者である、又贖罪は単に人類の上に而已ひる結果を生ぜんとする政府の告示の様な物ではない、真の意味を尋れば、神は義あつて凡て己れを信するものを正しくするものでなければならぬ、故にキリストの贖罪の最後の点は、終に神其もの、性に達せねばならぬこととなる。結論此大問題に就て僅か一時間の講マ廷マにては誠に不完全ならん、一体此問題は神を論ずる程深く、天国の栄光程高いものである、これは生命と光りの根元であるし、ツマリキリスト自分マであつて吾儕わがらにとれば栄光の望である、此事を理解できんと云ふのは、其限りなき秘奥と価値とを悟らないからである、だに依てよくこれを学びこれを念ふて其尽くることなき富を味うがよろしい、尚これを吾儕わがらの父の貴と賜として受けキリストに依て神に來り、神より贖あなはれ赦された小供等として、大なる世継を受くることが大切なことである。

科学与有神論

ドクトル、オフ、フヒロソフー^マ

中島 力造

現今西洋に名高き哲学者カント氏曰く、左の三問題は哲学の基礎なる大問題なりと。

第一 吾人は何物を知り得るや

Was Kann ich wissen?

第二 吾人は何事を為すべきや

Was soec ich thun?

第三 吾人は何事を望むべきや

Was darf ich hoffen?

第一問題、即ち吾人は何物を知り得るやと云ふ質問の、吾人の心中に起る由縁は他にあらず、人性に智力具はるを以てなり。第二の問題、即ち吾人は何事を為すべきやと云ふ質問の、生ずる所以は外ならず、人性に意志具はるを以てなり。第三問題、即ち吾人は何事を望むべきやと云ふ質問の発する原因は外ならず、人性に感情具はるを以てなり

然れば是れ等の三問題は人性の組織より生じ来るものにして、人為を以て造り出したるにあらず、故に時の古今を問はず、地の東西を云はず、吾人智力の発達とともに此三問題を起さざるの国民なし、而して其の斯の如く古今万国に亘て普通なるの理由は他にあらず、只其の已むを得ざるに出づるなり、人為を以て之れを消滅し得ざるに由るものなり。

然れども三問題の間に自ら秩序あり、第一問題即ち吾人は何物を知り得るやと云ふ疑問は、吾人の第一に研究すべきものなり。如何となれば第一問題の解ることなくんば、第二第三の問題の解を得る事能はさればなり、吾人の智識を弘め、智力を研く目的他にあらず、只吾人の義務を尽し、吾人の希望を制せんが為めなり。

今茲（三）に科学と有神論の關係を論するに當り、論究すへき第一点は科学とは如何なるものなるやと云ふ事是れなり。

偕（三）此科学と云ふ語の一定普通の意義を發見する事は容易に非ず、蓋し（四）大學者先生中此語の意義一定せざればなり。彼有名なる哲學者「ロツエ氏曰く、科学と真理とは全一にあらず、真理は万世不變なり、科学の如く人為に因て生したるものにあらず、故に科学とは「吾人の見出したる真理」と云ふに過ぎず、又科学的智識は通常の智と其種類を異にするものにあらず、科学的智識とは一定普通の法則によりて、精密に調べたる規律ある智識なり、而して此一定普通の方法を科学的方法と稱し之に形而上形而下の區別あり、凡そ科学と名くるものは皆此二の方法によりて研究したる學問なり。將來諸科学の發見する真理は益々明瞭になり、精密になり、又其数も増加する事なるべし、然れども此科学的研究の方法に於ては敢て大なる變革を生ずる事なかるへしと斷言するも、敢て大過なきものなり。

然らば、科学研究の方法とは如何なるものなるや、又其順序は如何、

(甲) 科学の内何れの分科を問はず、先づ第一に注意すべき事は、其科学の研究する事實を広く集め、之を精密に調ぶる事なり。若し其事實に誤あれば、何程論理は能く適合するとも、真正の科学にあらず、而して事實を広く集め、精密に調ふることは、數年間一の科学を専門として、研究したる者にあざれば容易に為し能はざる處なり、故に生物學家でなきものには、中々生物学的の事實は精密に訊かる理由なく、神學者が生物学を評する扱（五）は、世に随分あることなれども、実に不適當なる所業と云ふべし。

(乙) 第二に注意すべき事は前上に述べたる如く、事實を精密に調査したる上にて、一個の臆説を立つる事なり、臆説とは専門の學者か各自專攻する所の科学に付て考へたる意見にして、無識者の妄想にあらざるな

り、化学的の臆説は、中々化学専門の人にはあらざれば無暗に立て得るものにはあらざるが如し。

(丙) 科学研究法の第三は、前上の臆説を種々千万の事実^マに照し、一個の科学的理論を造り出す事はなり、故に自己の臆説若し事実^マに反する時は、其臆説を全く棄るか、或は之を改良せざるを得ず。ゼボン氏曰く臆説と事実との符合は、其臆説の正しきを証するものなりと。

右に述べたる三条は、科学研究の三要件なり、故に其一を欠くものは真正の科学的真理たるの価なし、今日吾人の貴重する科学的の真理は、皆右の方法に従つて得たる成果なり。故に此研究法の発見は、近世文明の一大功業と云ふも敢て過言にあらざるべし、如何となれば、此方法なきときは科学的真理を発見し能はず、古グリシヤ国ローマ国の学問に、吾人が今日用ゆる所の意義に於て、科学の名を下し能はざる理由は、只彼等は此研究法に従ひ、研究したるにあらざるを以てなり。

右に述べたる科学研究法に付て熟考し、之を解剖すれば、右の方法は若干の仮説原理^{フクサンブツリ}を以て組織せらる、事を知るに難からず、若干の仮説原理とは則ち左の三条なり。

第一 吾人自己の存在、及び吾人に智力具り、事物を知り得る事

第二 宇内^{ウチ}万づの物^{モノ}万づの出来事には一般普通の秩序ある事

第三 右秩序と知力活動の秩序とは同一にして、両者相接し相通ずるを以て、吾人の智力は外物の秩序、即ち天地の法則を発見し得る事

右の三条は、科学研究法の仮説する所の哲学的原理なり、故に此原理に付て疑を抱くものは、科学研究法の真理に疑を容るゝものなり、而して科学研究法の確実を疑ふ時は、科学的の真理をも疑はざるを得ざるなり、故に曰く科学的真理を確信せば、科学研究法を確信せざるを得ず、科学研究法を確信せば、其原理

なる前きの二条をも確信せざるを得ざるなり。

諸右の三条に付ては、哲学者中種々の議論ありといへども、吾人自己の存在、及び万有の存在を信ずる以上は吾人及び万有は有限有変の存在なることを信せざるを得ず、而して吾人万物は有限有変の存在なりと信ずる以上は、之に対する無限無変の存在をも信せざるを得ず、有限有変の存在あつて、之に対する無限無変の存在なしと云ふは考へ難き事なり。

然らば則ち、其無限無変の存在は如何なる性質を具ふるものなるや、是れ即ち有神論無神論の差別を生ずる難問なり、概するに此疑問に対し、只二個の返答あり即ち左の如し。

第一 無限無変の存在は、自覚力なき、意識なき存在なりと云ふ説。(無神論)

第二 無限無変の存在は、意識あり、自覚力ある存在なりと云ふ説。(有神論)

今茲に吾等の論究せんとする所は此二説の中何れか最も事實に適合したる説なるやと云ふ事なり、此両説何れも弱点あり、何れも強点あり、一を偶論とし、他を明論と一声に云ふべからず、而して完全無欠の説なき以上は、其中にて最も事實に適合したる説を取るこそ至当なれ、此の如きことは吾人が科学上常に用ゆる所なり、吾人の聞く所によれば、ニウトン氏の重力説には、今日の科学上より故障なきにあらざれ共、世にニウトン氏の重力説より完全善良なる説未だなし、故に之を以て真理と見做すなり、此に做ひ、有神説にも亦難点なきにはあらざれ共、余は其無神説よりも難点少きが如く感ずれば、之を以て真理と見做して可ならんと思考するなり、吾人各自其性質を異にすれば、或人は吾には唯物説か何よりも満足なりと云はるゝ、かも知れず、又或人は万有即神説を好むと云はるゝ、かも知れず、然れども余は決して此等の学者を以て智力の足らぬものとするが如き高慢なる者にはあらず、余は只左に余か何故に無神説は、科学研究法

の原理を説明するに不満足なるかと云ふ点を述べん。

(第一) 無限無変の存在、即ち絶対には、意識なし、自覚力なしと云ふ説は、愚考によれば、吾人の有限有変の自覚力を具へたる存在の解釈するに苦むもの、如し、吾人の意識は意識なきものより生じ、吾人の自覚力は自覚力なき存在より生ずと信ずるは、理屈の釣合を失へるものならず乎、是れ小を以て大を解くに似たり、略言すれば無神説を以て吾人の意識の起原吾人の自覚力の大源を十分に解明すること、甚た難きがごとし。

(第二) 無神説を以て科学研究法の仮説する所の第二原理を説明する事難し。第二原理とは、万有は人智を以て理解し得べし秩序ある世界なりと云ふ事なり。天地万物に秩序あり、之を了解し得へしと仮り定むるは、宇宙万有は思想なりと仮定すると全一なり、然れども宇宙万有皆思想なりと仮定せば、之れか主観なかるべからず、主観なき思想とは甚だ考へ難き事なり、之に反し天地万有は理解し得べきものなり、故に宇宙は思想なり、思想なれば其主観あり、其主観は意識を具へたるものなりと信ずるは易し。ハートマン氏の無限無変の存在、即ち絶対は、思想あれ共意識なきものと云ふ説は、思想と意識とは離るへからざる親密なる関係ありと云ふ心理学的の事実を忘るゝより起るもの、如し、思想の意識なくして存せず、又意識の思想なくして存せざる事は、心理学の発見したる事実にして、ハートマン氏の説の非なることを証明するものなり。

無神説、即ち絶対は意識なく自覚力なしと云ふ説は、科学研究法の仮説する第三原理、即ち天地万物の秩序は吾人智力の秩序と全一なり、故に吾人の智力と天地万有の間に緻密なる交接あり、而して吾人は天地万有の道理を了解し得るなりと云へる原理の説明に甚た苦むものなり。今若し外物か(仮令其実は何に

せよ) 吾人の智力と其組織を異にし、相互の關係なしとせば、如何にして吾人は智力を以て天地万有の法則を知ることを得るや。天地は思想なりとするも、意識自覚力なき思想なりとせば如何にして吾人の意識ある自覚力ある思想は之と交通して吾人の智識を生し得るや。之に反し、万づの物万づの事秩序あり、其秩序は吾人の智力の秩序と全じく、故に相接し相通し、吾人は天地万物の理合を知り得るなり、天地万物は思想なり、其思想は吾人の思想の如く主観具りたる思想なり、其主観には意識具りたるものなり、語を變して曰へば、天地は天帝の思想なりと云ふ説は、無神論よりも信し易く、且満足なるが如し、故に有神説は無神説より、科学の仮説する原理に満足なる説明を与ふるものと見做して可なり。

日本之青年与実業

伴 直之助

諸君、私は初め「詩を作らん乎田を作らん乎」と云ふ題で御話をする積りでしたが、余り奇まかしなようですから斯う云ふ風に変へたのである、ツマリ主意は同じです、今朝御出でになつた御方は御承知で御坐います。我が第二席目金森氏の御演説が余程私の考へて居ることと暗合して居た、御承知の通り四五年前迄は基督教社会に於て金の話をすれば穢らはしひと云はれて、一も二もなく斥けられたが、全体そう云ふ訳のものでなからうと思ひます、人間は有情であるから強あがち理屈斗りを以て云ふことは出来ない、さらばと云ふて情斗りで往くことも出来ない、理屈マコトと人情とニッ相並で往かなければならん、社会には社会の理がある、

動物にも動物の理がある、人間は最も高等なる動物であるから、此動物の中にも矢張發達の理がなければならん、シテ見れば此動物は一として此の理の支配の下に立たねば發達することが出来ない訳でありましよう、そんなことはどうでも宜しひと云へば、之と同時に此人は己れの生存する社会に社会学の理がないと云ふて自然法を蔑視するものと云はねばならんです、若し社会は自然の法に従つて發達するものとせば、吾々は金（即ち経済学上の学語にて云へば有価物件）の事を研究せずに居られましよふ乎、私は東京経済雑誌（経済雑誌数冊を示しつゝ）五百二十一号に（五月十七日發兌）「キリスト教と御金」と云ふことを掲げて置きました、之れは高等商業学校青年会の諸君が是非俱樂部に来て何か演説をして呉れると御頼みになりました節演説した筆記であります、是によつて私の説の一斑を御承知下さらば幸ひである。

今夕は之に類する事をアチコチ取り交せてお話ししたいと思いますと思ふ、私は一体演説は好ぬ方で（微笑）長く斯様な所に立て演べることは好まないので御坐います、今夕はホンの話である、一体演説と云ふものは聴者に理解したか、ドーダか知れないもので、応対問答よりも効力が薄ひと思ひます、況してや無学なるものが長く演説することは恐れ多いですから簡単に演べます、

サテ今日私は力めて変則に出掛けて、実業と云ふことに就き至極平々凡々なる説を吐かふと思（大笑）と云ふ訳は茲に御出席の御方は西は九州四国へ掛け、北は奥羽より北海道に亘り、近くは近所近在より御集りになりし有識の諸君である、殊に欧米から近頃御帰朝になりし御方々もあり、此等の先生か蘊蓄されたる御議論を最早、充分御話しになつて、結構な考が諸君の御胸中に吹き込まれたと思ひます、其中に信仰強き精神を諸君の前に吐かれた方もあらふ或は深奥なる学理を述べられた方もあろふし、諸君は既に明論卓説に御飽きになつて入らつしやらうから、私は違つた方角より、毛色の變つた事をお話しましよう、是

れが諸君の教導となることは御坐るまいが、併し私にも有つて生れた靈魂もあり、肉体もあるから……コウして茲（二三）に立て居るから、活動いさて居るのよしよふ、……（大笑）其活動いさて居る間に腹はらも空へつたり、飯めしも食つたり、寝ねもしたり、起おきもしたり、走はしり、歩あるくやら、飛とび跳はなるやら、何いっれ動うごて今日迄こんにちに來たに相違ちがない、（大笑）其活動いさいた間の經驗けんでしやう乎、道行みちゆきでしやう乎、ナンダカ少々考へて居ることを述べたなら、……ハ、成程なるほどど爾（二三）うであつたかなど、万一の御参考ごさん考になるものありましよふ、例へば馬術、水練すゐの如き小技せうぎにても、人がコウ云ふ時に徳利とくの似声にほを遣やつて危いひ生命いのちを拾ひろつたとか、コウ云ふ油断あぶで葭簣よし張はりを蹶ひ破やぶりて甘酒屋あまの老婆お婆せん（二三）に叱のたまられたとか、老爺おやぢさんホドヤされたとか、（大笑大拍手大喝采）云ふことを聞くのは下くだらん様さまでも往々むじむじ為めになるものです、凡そ馬上ばじやうに在あては馬の性質せいしやうより、市中いちぢゆうと田舎いんが、遠道とほみちと近路ちかみち、峻はしと、坦たんと、夫々それぞれの心得こころえがあり、水みづに在あつては海うみと河がはと、沼ぬまと湖うみと、急流はやせと溜ためり水みづと之これに應こたずる色々の方術ほうじゆつがあり並足なみあしの時ときには足をこう踏ふん張はりり、ヒツカケられた時には体をコウするとか、或はズツと高尚こうかうにかまへて「遠山の月を眺め寒夜に霜を聴く」ナント出でかくる乎、（大笑）兎うさぎに角実地かくじつちの話はなしは無駄むだでないと思ふから、無位無官むゐむくわんの一措いちそ大だい、御稱荷ごせうが様の申し子こでもなき私わたしが、少し述のぶるを聴きき玉たまへ、（大笑）私は実業じつぎやうが好きであつたが、……初めからそんなものであつたか如何いかであつたか（大笑）兎うさぎに角普通かくふつの英学科えいがくは順席じゆんせき通り学まなびました、私が学校がくを退でたは明治十二年で御坐まじいました、学校がくは小石川こいしがわの同人社どうじんでありました、此の時分このときは書生の善く用もちひられた時で、卒業そつぎやくの翌日あつちは高いのが七等出仕しちとうしと安いのが三四拾円しよしやうじゆんと相場あひらか極たぎまつて居ゐましたから学校がくを出でさへすれば鬼おにの首くびでも取とれた様に思おもはれました、（微笑）私も其時分官このときに就つて居ゐたら善よかつたかも知れんが、官くわんと云ふ海うみか嫌きらいで、民たみと云ふ所に植民ちくみんして、サテ論文ろんぶんに取とかゝると、ドツコイ、ミルヤペリーミルヤペリーの經濟書けいぎしよ、バックルバックルの文明史ぶんめいしを嚙かじつた位くらいでは往むかはんの（二三）に驚おどいた、私は明治十二年の三月二十八

日經濟雜誌社に這入りました、這入るは這入たが實際問題の解釈が出来ないのに驚いた（微笑）其時經濟雜誌の始まりたてであつて奮発して働いた、働いたがなか／＼旨く行かん（微笑）それからどうか実業「ブラクチカル、ビジネス」に従事したいと思つてもナカ／＼ダメで、本拠を東京に定め或は新聞或は演説、或は相談の爲め招かれて地方に往來し、出たり、引込んだり、三五年の間は丁度吹矢の化物の様でしたが（大笑）、十九年に至て漸く金融がゆるみ少しく実業興起の端緒を窺ひ探しました、此時私は京都に居りましたが、田中、濱岡の二君か、「クレジー、ユニオン」に倣ふて一の銀行を拵える仕組を仕て呉れないか、ドーカ之を日本に適する様な者にして呉れないかと云ふことで、早速調査に取かゝりました其頃金融に非常の緩みがあつて金利は四歩とか四歩五厘とか云ふ様なことで京都商工銀行の資本は一夕の集會に殆んど纏りました、丁度其頃友人田口卯吉、小松彰、足利の木村半兵衛氏等、私等即ち上野下野両毛に鐵道布設の事（其時分には線路も名もまだ極りませんでした）を謀り、評議一決して創立の事務を私に托しました之れは十九年で御座いましたが、兎に角純乎たる私設の鐵道政府の保護を受けたいと云ふことが年来の志願で御座りましたが少しも政府の保護を受けない鐵道は四角でも三角でも兎に角、両毛鐵道が宇治川先登と思ひます、故に此鐵道は随分困難であつて、困難の間にも世の有様が助けたのと、富豪の賛成か有たので株券は非常に騰貴して、遂にドウカ、カウカ、起りました、けれども私が是丈の間に感じた考へは、何にかと云へば実業は困難だと云ふ一事です、私は考へるに如何しても実業は困難である、なか／＼坐て喋べつたり、机の上で筆を捻ねくる様な者でない、ドローモ実業は怖い、まかり間違へばソラと云ふ間に千仞の深みへ落込まなければならん、なか／＼大變です（大笑）、間違つた其の曉きには、再び出ることが出来ん、又と再び浮かむことが出来んです、実業はタトへは植木屋が植木を取扱ふ様な者であ

る、一寸過つたならば大切なる植木を枯らして仕舞う、若し此植木が世界に又と無ひと云ふ品である場合に、此植木屋が過て植木を枯らした時は元の通りにすることは出来ん、中々農学士が机上の議論が間違つたとて、笑はれる位の事で済みません、実業は間違たときには是れは違たから、ワイ一寸と待て呉れないかとは云はれません、(微笑) 間違へば実に困る、議論が間違たときは恥をかく、恥をかくのみで済むが実業はなか／＼恥をかけた位で済まん、断つても済まず、取り返しもつかん、(微笑) 商人が物を買つたり売つたりするに、買ひ損ない、売り損なふときは、忽ちに損をする、ワイシマッタ、損じや俵つて呉れと云ふてもモ一駄目です、(微笑) 是は実に真劍勝負で、チョンと刀で撃たれ、ば死んで仕舞ふ(大笑大拍手大喝采) 抜刀の仕合である、九死一生の場合である(大笑大拍手大喝采) 是が実業の困難なる訳である、今朝金森氏も御演べになつたが、実業を起すのは宣教師が基督教に就て身を献け犠牲に供して居る様な者でありまじやう、実業に対して真成の困難は説教をなさると差して軽重優劣はないと考へる、宣教師が神の道を述べるに一ツ道理を過つたならば神に対して罪は非常に御座いませう、併し乍ら神は慈愛を以て赦さるゝに違ひない、ソーシテ教会員も赦します、少々位グヅ／＼云はれても拾つて用ひて呉れるものがあるからして(微笑) そんなに困まらん、人の噂も七十五日で或は其過ちは一晚二晩を経れば済むかも知れん(微笑) 併し実業社会の人は別段で御座います、それ故に諸君の中、若し実業に従事なさる、御思召の御方があれば、御注意なさらねばならんと考へる、聖書の中に在る或点を考へれば如何も金錢は穢がらはしひものとしてあるが、私は或点に於ては之を大切としてないか、私共は此辺に付て誤りをしないかと思ふ、若し金錢が悪ひと云ふものとしてあつて見れば、神は金を造らんに違ひない、富が極く社会にいけなものであれば、神は富を造らんに違ひない、富があり、財と云ふのがあはそれ／＼入用に依て則ち便

利上起つたものと考へる、實際に就て金銭財貨は大切である、諸君が集るも、散するも、往かふとしても帰らふとしても、金円がなければ動くことが出来ず、諸君が一寸亜米利加へ参つて説教を聴かふと思ても金円がなければ聴に往くことが出来ん、それ故万事万端金銭と云ふものが需要である、良く儲けて良く用ふことが需要である、よく用ひよく儲けなければならん、シテ見れば金銭が何時も罪を衣せられ金銭は禍なるものである穢らはしひものであるとして斥けられて居つたが、是は用ひ方の悪いのである金銭自からが悪いのではなく、唯々金銭の爲め己の身をも名譽をも捨ると云ふことは困る、誰でも事業を起すに金銭を要し、信用を要するが若し金銭があつても信用があつても、人を欺したり、高利貸が金円をムヤミに取立つる様に卑くしてはいかんと思ふ、金円がなくなつても確なものとして資本家に信用されるならば、一度に数百万円の金があつまると思ひます、金銭の奴隷となるは固より人間たるものゝなすべきことでない、夫故に私は「人は金銭の奴隷となるべし」と云ふのではない、それだけは注意しなければならん、金銭の爲めに奴隷となり、己の身体を捨ると云ふ様な、爾ふ云ふ先生では困る、或る吝嗇家が金を死後に残すことをひどく残念に思ひ、重き枕を擡げて、腰巻より、ゾロくト金貨をとり出し、ドウするかと見てあれば、臆て之を大根ヲロシに混和練つて、一杯イー、二杯イー、三杯イーと、トウく一卷の小判をウソウと云て鵜呑にして、食べてシマイ、ア、と云ふ間に死んだソーデス（大笑）斯んな人には困る、満堂諸君の中には無論爾ふ云ふ人はないですが、唯だ戒むべきは其処である、世の中に金を貪り心を惑はして金の奴隷となり、金の爲めに終に身を捨る者があるが戒むべきことである、全体金銭は大切であるから良く用ひなければならん、人各職業が異なるから一概に言へんが、例へば諸君の中に已れ自らが実業に適して居るか。適して居ると御思召す御方は其職業に従事なされて金をシコタマ取るが宜い、私は世の中の

或一部の人々が非難をするために、それを捨て、他の事に従事するのは日本のために基督教の為に悪ひと思ふ、色々人の嗜み好みは違ふもので、赤鬼もあれば青鬼もある黄鬼もあるふし、濃茶鬼もありましよう（大笑）一方から見て宜いことも他方から非と云ふでしょう、去り乍ら何んでも善ひと思ふたことは断行が（大笑）一方から見て宜いことも他方から非と云ふでしょう、去り乍ら何んでも善ひと思ふたことは断行が宜い、是の心か大切である、決心してやるが宜しい、或書生の御方が度々此様な事で相談に御出でになり、私の先生や友達が宣教師になれと云ふが、私は他の事をやりたい、決着に困つて居るが如何したもののであるかと問はれます、其時私は友達が何んと云はふとも子がなんと云はふとも……書生には大抵子はないが……（大笑）爾なことは構まはん、身分に適して居ることをやつて、それで宜ひ、ナンダ、カンダ、と爾んな八釜しひことは、ホッテ構はず、ドン／＼やるが宜しひと云ひました（大笑）、「一生の心事人若し問はゞ笑て答へん富山千古の雪」、ナンダカ只英雄を気取る様ですが、子を知るは親に若かず、已を知るは已に如かず、私共斯様な御相談を受くるは屢々で、其都度に今の様な説を吐いて其人の方針を迷よはせない様に謀りたいと思ふのです、人には各々長所がある、特能がある、巧みに小説を綴る先生もあれば、算術に達したる人もある、各々其卓能、長所に應じて一生を終るが必要ではありません乎（大拍手大喝采）これから私は日本の国状に就てお話したい、今の日本の有様は或は富んで居るとおつしやる御方があるかも知らんが日本位貧乏の国は無ひと思ひます、日本では成程海防費献金に百万円の金円が集まつたとか、「ノルマントン」号の変災救助に何万円出来たとか申しますが、タッタ五十円の金が或る町或る市で出来なかつたことがある、それは足利町です、……足利町は……下野の国に在り（ナンダカ地理書を読む様ですが）（微笑）下野に在る足利は彼の六十銀行が営業停止の為に一時ヒドク金が詰り、殊更ら天下一般に金融逼迫の大危機の時で、殆んど無商売同様で、五十円の金が何うしても活動かなかつたと申すことです、天下

商業の大都大阪は如何ですか、東京は如何ですか、少し位有て居る人はあれども出さず、借りて居る先生は返すことが出来ん、日本の経済と云ふ大廈は真成にガタ／＼して居る（大笑）幾分か智あり金ある人が七転八倒、随て貧民は死んで仕舞ふより外に仕方がない（大笑）、尤も貧民と云ふと失敬知らんが何にして世と関係の薄く、責任の軽き人は稍々気楽です、（微笑）彼等は生きて居る以上は食べなければならんが、若し食へることが出来なければ死ぬる計り、死ねば則ち吾が事終れり（大笑大拍手大喝采）で、ソレデ済んで居る、けれども大金を借りたり、事業を企て居る先生等は爾う云ふ手軽い訳に往かん、今ま或る仕掛けた事業の爲めに是非共何拾万円を払はねばならんとき、出来ぬと云ふて事業を止められない、退かん乎年来の大金と経営一朝にして去る、進まん乎世は不景氣にして貸手なし此時企業者は実に苦しむ（大笑）貧民の苦しむと云ふ位の苦しむでない本統に苦しむ（大笑）其辺は如何か実際に御這入にならうと云ふ御方が覚悟すべき点で御坐います、日本は米国とは違ひ実に斯様の苦しむか余計ひどいです、何時も斯く貧乏である、貧乏は誰れしも好のまぬことですから、此貧乏国を如何すれば宜しひか、彼の軍艦を造るがよいと云ふて軍艦を造る、如何んな軍艦を造るか、成程八重山艦と申す立派なる軍艦を造つて御召艦にもなりました、其代価は一枚百万円か、つた、其百万円は土地を売たり質に置たり扱つてさらへてヤットのことで造らへた（大笑大拍手大喝采）其軍艦は如何様な用をなすか、八重山は世界に二箇しかないと云はれるが、一時間「二十八」ノット」走ると云ふが若し之か奪られ、は、後の掛換がない、日本国は如何するか、実にツマラない、又鉄道を軍用に適する様にせよとの注文がある、「レール」の幅が狭い、一車へ馬を十二頭入れることか出来ない、一小隊の兵隊を載せることが出来ない、ソレ今の鉄道は単線だから歩行の方が増しだなど云ふて、曾我中將三好中將より彼是言はれ、論が起りますが、そんなら曾我氏が金円を出して

下さるか云へば、曾我氏も金円があるか知らんが千哩以上の鉄道を敷設することは出来ん、誰れが設けるか、口に言ふ人は在つても実地布て呉れる人はない、其通り陸軍の方からなんとか彼とか云つても、其根本となる金円がなければやる事が出来ん、何を注文されても二進も三進も動けない（大笑大拍手大喝采）鉄道は目下勉めて発達させなければならん、延長しなければならん、併し乍ら何処でも布くと云ふ訳に往かない、例へば亜弗利加の砂漠に鉄道を布くと云つたならば、人が笑ひましよう、又た版図の狭ひ小さひ所に往つて大軌道の鉄道を布くと云つたならば笑ひましよう、海の舟、陸の鉄道は商業と俱に発達するが順当です、スエズの運河は船の運搬が劇しひから出来ました、鉄道を広くし船舶を沢山にするには先づ商業の発達を計つて後ちのこととしなければならん（大拍手大喝采）日本では欧米文明の道具はまだ充分に、行はれて居りません、何も出来て居るのは玩具物の離形である（大笑）鉄道が地の下を這て居る、伝話機が頭の上にヒツパツテある、電信は空中に蜘蛛の巣を画き、幾分か文明の飾が出来ては居るが小さい、箱庭の少し大きひもの、中に出来て居る様なものである（大笑）会社が起つても小さい、なか／＼西洋と比較は出来ん、それ故に日本の国を富し、立派にしよう云ふことに御注意あらんことを諸君に希望するのです、金円を儲けて貯め込み、鉄道を布き、筑紫は愚か支那、噁咀〔※一〕を貫きウラル山を越え、スエズからして日耳曼〔※二〕、仏蘭西を突抜て、亜米利加迄開いて宜からうと考へる（大拍手大喝采）、此次入用なのは企業的人物です、支配人に適当な宜い人物をよこして呉れないか、受合のもの、保険附の人（微笑）をよこしてくれいと云はれます、トコロが無ひ兎角長し短しで適した人がないです少しはあつても釣り合はん、一方に就て一の事を托すものが沢山ないので、此場合に臨み私共青年は奮て此任に当たらなければならんではありません乎、斯様な任は随分困難もありませう難義でも

ありましよう、種々奇妙な人間と交際はなければならん、理屈のみでも行けず、勉強斗でも行けず、頭を下たのみでは通らず、威張りては猶ほダメです、去れども信徒として此等の困難を忌避ては到底基督教の勢力の加はる時がない、私は彼福澤氏に最も感服して居る一事があります、ソレハ先生の弟子が営利会社にも居れば名譽職にも居る、商業社会にも居れば政治社会にも居る、何にても社会の要部には弟子が必ず頭をツツコンで居る、依て先生が「ボン」と手を打てばボンと云ふ間に方々から出て来る、(大笑)宛ら常も引綱を下してある様です、福澤氏が獵師になつて綱をひけば余計の魚が皆な一所に集つて来る、(大笑大拍手大喝采) 実に爾う事の纏まるのが宜しひ、望ましひ基督教に於ても信者の中に製造に従事するものもあれば、商業に従事する者もあり、会社にも居れば銀行にも居り、官吏にも居れば議員にも居ると云ふ様に、何にも彼にも皆な散乱し居つて一ツボンと手を拍げは皆一所に集つて運動する様にしたい(大笑大拍手大喝采) 而して此世は競争のますく劇しくなる世であるからして、身体が丈夫で脳が確で、頭がウントシツカリして、何んでも構はずやるが宜しひ、実に日本の今日は大切なる時である、新旧乱れ頑固柔軟入交りの時である、今我国の有様を「國民の友」〔※3〕をして言はしたならば「今や旧日本去つて新日本將に來たらんとす」と云ふ所である(大笑大拍手大喝采)、一方には旭將軍、若葉の公達や、血氣盛りの青年あるに、一方には古ひ人が居り随分矢釜しひ小理屈を云ふ、彼等は實際左程役に立たんかも知れない(大笑)、役に立たんでも先づ長者を敬すると云ふ様にして、若き御方は学校の卒業生でも文学士法学士だと威張らずに(大笑)、自分が実業に従事する初めであるから私はまだ青二歳の駆出し者、至て未熟で不束者(大笑)で御坐りますから、どうか宜しく御願ひ申します(大笑大拍手大喝采)と云ふ方が宜しひ、爾うならば先方でもハイ宜しふ御坐います(大笑大拍手大喝采)と云ふ訳で事が円滑く治つて往く、私は

爾（ま）う云ふ様なことを望む、爾（ま）ふ云ふ風になることを願ふ、姑（な）と嫁さんと交（ま）が宜くなることを願ふ（大笑大拍手大喝采）実業家中老人と青年は嫁と姑の様なものですから、嫁がやさしくなければ到底世の中か治らない（大笑大拍手大喝采）一寸の布（ま）猶ほ縫ふべしで箱庭中の立廻りをやめて喧嘩をしない様にしなければならん（大笑大拍手大喝采）、今の青年は老人に（お）対ひ天保老爺（大笑）など、悪口を言はず、姑には逆らはん様にして老人も併（ま）に力を協（あ）せ、一刻も早く日本国が金持になり、実業と云ふ楯（ま）を取て日本と云ふ船を太平洋に漕ぎ出すことが出来る様にしたと思ひます（大笑大拍手大喝采）如何（ど）か爾（ま）う云ふことを望みます、それ故若し実業に思召がある御方は躊躇（ち）せずに、余りクヨク考へ過ぎずに、ドンク活発にしなければならん勿論学問も多少入るが、学問は精（ま）しく入らぬ、学問が深くなり過ぎるとツイ高ひ所斗り見て、材木やの鳶（た）の様で（微笑）却て実業に従事するのを妨げらるゝ人もあります、婦人が学問が出来過ぎてソレがナンダカ鼻の上に引かゝつて、是男も馬鹿に見え、彼の男も鼻（は）ッタラシに見え、ソーカと云つて自分で全く独立は出来ず、学問活用することも知らず、人のアラを批評する位が御役目となり、結局学問か身を殺すことがあるソーデす（茲（こ）には斯様の御婦人はあるまいが）（大笑大拍手大喝采）今の日本は結構の時である、諸君よ諸君は今芽を開く時である、機失ふべからずです（大拍手大喝采）「世の中は三日見ぬ間に桜哉」とは昔の事、今は「一寸と見ぬ間に桜かな」（大笑）で、此の社会に在つて三日も寝ていようものならばガラリと換はる、三日どころか一夜の中に變はつて仕舞ふ（大笑大拍手大喝采）、それだから首（ひ）を捻（ひ）つたり、頭（あ）を擦（す）つたりイツマデも思案に時を移さずに、早く我国を富さなければならん、私は何処までも或人の言の如く実業に従事することを悪ひと思はねば、又た実業と云ふものが神の光栄を顕はすことが出来ぬものと思ひません、日本国民として日本国の富を殖やし、我人民の元気を起すことをしよふと思へば実業でな

ければ出来ない、是れは最も大切なることと考へる「倉廩^{そうりん}みちて礼節を知り、衣食足て榮辱を知る」とあるが、貧乏で飯を食はず、食べることをせんでほすも廉恥も礼讓も徳義も、ヘチマも何も出来ないと思ひます、(微笑大拍手大喝采) 徳義の根本は独立心です、或人が書生に転がり込まれ己を得ず学僕に置いた、朝学僕が起きぬものだから主人が火を起し飯を焚く、飯の出来た時分に漸く学僕がアアと目を覚まし、一緒に食べる(微笑) 主人は役所に出て仕舞ふ、帰て視れば火もなく湯もない、また火を起して飯を食ふ、朝から寝るまで主人の世話になつて、自分はゴロ／＼寝たり起きたり、丁度養はれる学僕が御主人で、養ふ御主人は権助同様です、金を出して養て権助とは無情^{なさけ}ない(大笑大拍手大喝采) 実に世の中に自から養ふことの出来ない人程仕様のないものはない(大笑)、一概にも言はれないが貧民^{マヤ}に近き人は働いても少し得れば飲んだり食つたり眠たりして居る、(大笑拍手大喝采) 御負に自分は儲ける苦しみを知らないで無闇に人を羨みます、実に「小人窮すれば濫^{らん}す」で窮して来れば耐まらん、人民を窮させない様にするには則ち実業を盛んにするより外に仕方がないと思ひます、是れから新日本、此新日本を将来各国の右に起し立派にしよふと云ふ目的の青年諸君には随分苦しひでよう、然し有志者の生涯は背水の陣です、ドツチに往つても苦しひです、富を造り、旧日本を切り開ひて新日本を迎へ、巨万の富を造り日本国を為るには、富貴天に在り牡丹餅は棚に在りと云ふて澄ましては居られない(大笑手大喝采)、諸君もし天下の為めに大慈善を行なふと思ふならば、実業を軽んせられては間違です、私の知つて居る人が或る製造場を有つて居る三十万円で引き^{マユ}ぎ受けた、トコロが余程思はしからず、ソコデ一杯食つたな、三十万円出して食はされたな、イツソ止めよふかしらんと思ひ、其場所に往つて視れば、其製造の為に大勢^{マヤ}が一の部落^{マヤ}をなし、一の社会を為して居る、若し私が此の利の薄ひことを視てやめたならば、此多くの人が何処に散乱するか、それ

を思ふて薄利ではあるが維持して居た所、追々快復したが、まだ中々困ると謂つて話された、実業には斯う云ふ場合が多い様です、此金円を他へ繰換へれば一割五歩とか二割とかの利益を得ることは容易いことです、人々を散乱させ苦しみを受けさせるのが可憐さに維持して居るのです、是れは實際の貧民救助です、今ありふれたる貧民救助は殆んど害あるも功はなさない一時助けはしても忽ち消へ失せて往く、ソーシテ汝は貧民なるか故に無代無報酬にて米穀金錢を給すと即ち人類を卑しめたる代りに物を恵む、恰も「カメ」がチン／＼して養はれると同じことです（大笑大拍手大喝采）、何にもならん無益である、実に自分で自分が食へない人程仕方がないものはない（大笑）神より賜つた身体を働かせることが出来ない、自分を尽すことが出来ない、それで平気で居られては日本は堪らない、それ故何んでも人民各箇に独立心を起させる工風をするが大切であると考へる、夫れには実業の盛んになることが大切です、是れより青年諸君に對つて述懐をしよふと思ひます、（ヒヤ／＼）述懐と云ふは今吾々は御互に社会に在て社会の爲めに働くが、頭がつかへる岩がある、コツチに向けばヒヨツト頭がつかへる（大笑大拍手大喝采）、ソツチに向ひてもヒヨツト頭がつかへる（大笑大拍手大喝采）、それ故今の日本人は五尺位になつたかも知らん（大笑大拍手大喝采）、僕等の様小さいさき身体の者も出来た（大笑大拍手大喝采）、若し頭がつかへるものがないならば僕の如きも八尺位の大男になるかも知れなかつた（大笑大拍手大喝采）、併し之れは仕方がない、彼源三位頼政が歌に「昇るべきたよりなければ木の下に権を拾ひて世を渡るかな」彼は実に平氏の爲めに圧され、位は四位に止まつて殿上に上ることを許されん、世間には随分頼政と同感の青年も沢山あるでしよふ、此事は実に嘆かほしひことである（大笑手大喝采）、実業に熱心なる御方は実業に従事して色々の失敗困難を受け玉ひ、実業に従事すれば胆力が出る、勇氣が起る、戊辰の戦ひには長州は強かつた、薩州も強

かつた、然し薩長が先に外国船と碇まで取つた位に戦つてよき人を失つた代りに、戊辰の時には強いので、高崎正風氏が曾て話をされたことがあるが、薩が初め英国の軍艦と戦つた時分に英国の軍艦に鉄砲を射撃ばピンと云つてはねかへされて仕舞ふ、オヤと云つて居る間に外国船からは大きな弾丸がピューと来てドサンと中る、(大笑) 皆驚て舌を捲き、外国の兵器の立派なことが分り、到底是等を相手に戦つて勝利を得様と云ふことは駄目で御坐いますと京都へ申し上げ其丸を觀せた、其時の伝奏が云ふに斯んな弾丸が空中を飛んで来るものと云ふた高崎氏は現に戦つて此弾丸が来たに違ひないと云つた、ソコデ到底かなはんからと云ふので攘夷の議論も薄らぎました、薩長が爾ふ云ふ様な辛苦艱難を嘗めて居るから徳川幕府と戦つた時、幕府方は一揉に揉まれ、落されて仕舞つた、徳川の方に随分忠臣が在つたがトウノ、やられたのは、薩の兵はこれ迄数度の苦戦に艱難を嘗め、智識を増し、勇氣を増し、胆力を練つて居つたからである、実業社会も其処です、困難して辛苦を嘗め鍛錬しぬいたならば何んでも出来る、何にでも打勝つことが出来ると思ひます、(大拍手喝采) 実業社会には勇氣も要する、胆力も要する、此精神は最も要する所である、此等の事は勇敢なる日本人のなすべき所であらふと思ひます (大拍手喝采)、一度や二度失敗しても七度転んで八度び起きると云ふことがある (大笑)、ツマリ吾々は八度目に起きれば宜しひのである (大笑大拍手大喝采)、勿論実業社会は恐ろしひものであるから強ひては御勧め申さない、中には大失敗して後悔臍を嘔むの虞れがあるから敢て勧めんが、世の青年が寝て居て果報を待つ様では日本国は到底長続きは出来ません、少々計り奇麗な文章を作って我は日本の文学家なりと誇り、客観的主観的の論文を以て哲学者なりと自負し、田舎演説の前座が早くも政治家と自称し、ソシテ世の青年が之を無上の名譽とする様では将来の日本寔に憂に堪へません余は世の青年諸君に望む、諸君の中勇氣ある人、胆力ある人、事務の才あ

る人「ミッシヨン」なりと確信する者は進んで激浪大波を蹴けつて実業の危難を冒されんことを、日本の実業は大手を開ひて諸君を迎へて居るのです、(大拍手大喝采)

【※1 「嘘吐」とあるが「フタタシ」が正しい】

【※2 「日耳曼」とはドイツの古称

【※3 「國民の友」とあるが「國民之友」が正しい】

靈之能及其生長

ドクトル、ジエー、デー、デヴヒス

靈の能チカラ、即ち道德力は、宇宙の内にある自然力の最も必用なる者である、今日有名なる理学者も許して居るが、靈の能は総て他の力の後ろにあつて、其基礎となり、又其根元となつて居る、是を云ひ換て見れば、靈の能は物質の力から来るのでなく、却て物質の力が靈の能から来るのである。神は道德の世界を道德の力で支配し居るに依つて、凡て神に忠義なる者は、愛と云ふものに依て支配さるゝものである、愛は即ち靈の世界の引力である。此の世に働いて居る力の内では、道德力は一と云ふて二とは下らぬものである、とはいへ吾儕ワタシは物質の力と云ふて軽々敷見做なすものではない、蒸気力や電気などが、此世界の歴史を絶へず変へて居ると云ふ事を知て居る、吾儕ワタシは又智の能を賤いやしむるものでない、理学の価は莫大である、眞の理学は

神の真理の一部分であると思ふ、さりながら道徳力は理学で取扱ふ力よりも、遙かに大切なものであるし、又理学で取扱ふ力と調和をして、是等を研究するに助となるものである、道徳力なければ国は一日も建て居ることが出来ぬ、又其様な国に開化が永く続くものでない。此の如き靈の能に就き、是を身に受得る事に付き、又是を生長させ、是を用ゆる事に付て、只今暫らく御話をしよふと思ふ。私は今智識を磨くと道徳を磨くと、どちらが勝つて必要であるか、比較を取るまい、プラトニーヤ、アリストートルヤ、カントヤ、ロツツエヤ、スペンサーの様な、哲学者の仕事、或は又ガリレオヤ、ケプレルヤ、コパーニカスヤ、ニュートンヤ、ワットの如き理学者、發明家の仕事を以て、ポーロダの、サボナロラダの、ジョン、ハッスダの、ウィツクリフダの、ルーテルダの、カルヴヒンタの、ウエスレーダの、スパージョンダの、ドラムモンドだの、ムーデーなどの仕事と比べ、どちらが他に勝つて大なる仕事であると云ふ様な比較はしまし、だが此処に安心して云へる事は、他かでもない、靈魂上の大将のした仕事は、他の者に敢て劣るべきものでなく、若し此等の人が居らんければ、今日の哲学も今日の理学も、これ程迄に進んで来なかつたかも知れん、智識を磨くと、道徳を磨くとは、どちらも必要ではあるが、私の確信する所を云はば、道徳を磨くことは、此世の中で益々奨励しなければならん、今日日本に於ては猶更左様である。キリスト降誕の時代には、智識の進歩が欠けて居たと云ふのではないが、キリストの教の中には、理学もなければ、又此の世の哲学もない、キリストは何時でも、又何処に往ても、靈魂の教育に最も力を尽された方である、靈の能はキリストの元より有て居給ひしもので、吾儕に与へんと約束したまいし此の能である。ポーロは当時ユダヤ国の内の最もよき学校で教育を受けたものであつたが、其書きもの、中には、此世の哲学は少しも尊めて居らん、ポーロは此世にて凡そ人間が与へ得るよりも、猶大なる力を尊め又之を求めたものであつた、彼は

エペソの信者が此力を受んが為に、二度祈た事がある以弗一・十八、十九に曰く、また爾曹の心の目を明かにし、其召を蒙りて有つ所の望と、聖徒に賜ふ所の榮の富と、また信ずる爾曹に対して行ひ給ふ神の能の、極て大なることを知しめ給はんことを願ふ、爾曹の信ずるは神の大なる能の感動によるなり、またその六・十、に申てある、此他なほ言ん、我兄弟よ主をよび其大なる能によつて剛健なるべしと、今日日本の最も要するものは何であるか、智識を磨くことと道徳を磨くことであるか、是等は勿論必要であるに相違ないが、私の見る処では、もつと必要なものが一つある、日本は智識の点では追々と發達しようし、完く成るふし、充分に成るふと云ふ望は既に明かである、即ち基礎は既に出来て居る、総体人民は目を覺して大なる計画をなし、又仕事をなして、己れの国をして、高等なる智識の国とならしめんと勤めて居る、去りながら私の見る処に従へば、今日日本の最も要する事は他でもない国の民心が道徳を磨くべきことの大なる必要を感じ是にも同じく非常の銳意を費し此国をして兼て高等なる道徳の国にせんと勤むることである。今日の日本の足下には非常なる危難が迫て居るではないか、昔の道徳は廢れてしまい、何か其かわりになければならん、世界の歴史を見れば、如何に智識ある国民と云ふも、其知識に對する丈けの道徳がないならば、永く存在の出来るものでない、と云ふことが解る、明治十七年四月故新嶋先生か散布された、私立大学設立の趣意書に此様なことが書てある

是に於てか当路の有司は復其学風を再変して尋倫道徳の苟も学事に欠く可らずして孝悌忠信は教育の大本たることを教示せられたり、かく当路の有志が其学風を転じて智徳併進の教育に注意せらるゝは吾人の尤も稱賛する所也と雖も其徒らに支那学風の道徳を再興し因て泰西日新の学風に同伴併行せんとせらるゝに至ては我邦文明の爲め教育の爲め窃に稱賛し能はざる所あり、抑も支那古風の道徳の如きは其説

く所懿美ならざるに非ずと雖も到底一般人心を激昂するの勢力に乏く、殊に方今世運激動変詐百出するの時に當り、之を以て人心を振勵し風化を一変し天下の時に當り純全の道義を確定し日新の風潮に随伴せしむるに非ずんば何を以て社会の安全を維持し文明の大成を保有することを得んや、蓋し東洋の不振は自由と基督教の道徳なきに因由するなり、試に看よ彼の欧州諸国の文運を煥發せし所以の者は他なし、要するに自由の擴張と學問の發達と政治の進歩と道義の能力に暇せずんば非ず、而して四者を致す所以は何ぞや、基督教の道徳を主本として日新の學術を攻究するに依るなり、今や我邦専ら泰西の學風を振作し新に自由の天地を開拓せんと欲して独り其智育を摸倣するに止り曾て其根底たる純全の道徳を収用せざるに於ては吾人は決して其得べからざるを信じるなり、抑も泰西の道徳を基本として人文の自由を發育するは、之を譬ふるに猶盤石に立ちたる城壁の如く、劍刃いて當る可らず猛風いて破る可らず激浪以て覆すべきに非ず、而して今日支那古風の道徳を以て泰西日新の學風に併行せんとするは、恐くは彼の沙岸に一字「※」を造り一朝狂驟怒洩に逢て忽ち傾覆せらるゝの類に非ざるなきを得ん乎、是れ吾人が今日純全の道徳を主本として日新の學術を攻究する大学の起らざるを觀て慨歎して已まざる所以なり

私は日本國が失敗するなど、信ずるのではない、却て其未來に就ては大なる望を持って居るものである、去ながら若し日本が失敗する様なことがあるとしたらば、其原因は必ず智識に伴ふて道徳が進まなからである、是れは極めて大切なことであつて、今日は實に日本の為に大切な時である、此大切な時に當て、日本の為にも利害の中心となるものは、帝國內の大中学校である、其内には新日本の設立者並に其先導者となるものが居つて、日本の未來は重に此等の學校の進退に依て定まるものと云て宜かるふ、此等の學校に居る数千の青年が受くる道徳上の教育は如何なるの価であるふか、一人づゝに考へて見ても其価はわか

らん程大きい、キリストも嘗て此様に申された、人若し全世界を得るとも、己れの靈魂を失はば何の益か有んと。其上に此等の青年の受る道徳上の教育が、他日日本が理想の位置に達するや否やの点に殆んど全く關係して居ると云ふことを考へれば、猶更なほさらに其教育の大切なる事が一通りでないと解る、して見れば是等の學校に於ける道徳力の価値は極めて大きい、私か謂ふ道徳力とは誠にして理あり命ある道徳力、其根本を神に発し、其住居すまひはキリストに結びたる心の中、其養はるゝは神の靈みたまと愛とである、他の謂ゆる道徳なるものは、能ちからなくして殆ど屍の如きものである。学校内にある一人の信者の教員でも一群むれの信者の書生でも、若し此等の人が神と共に働く様な、実に活た人であるならば、学校全体に其感化を及ぼし、是に真誠の道徳を得さしむるものである、今日日本にある數多あまたの運動の中で、諸学校内キリスト教青年会の運動ほど大切な者はない、若し其運動が真誠の目的に忠義を尽し、活きたる靈の能であるならば、神を除くの外日本の救ひに就て最も大切なものである、諸学校で実行する靈の働きは、日本に於て最も大切な働きである、青年に取て見ては、學校に書生と成て居る内より他には、キリストの爲め、人類の爲に働くべき、最も宜しむ機會はない。さりながら此大なる責任を尽し、此の何よりも大切な仕事をせんと思ふならば先づ靈の能即ち神の能即ち神の靈が入用である、吾儕わなびは神の靈を以て充たされなければならぬ神と共にあらなければならぬ、神と共に働かんければならぬ、是は即ち神が吾儕わなびを以て働か給ふのである、吾儕わなびは己れの心を絶へず此の能に依て引ひげねばならぬ、絶へず是を以て、いやが上にも充たされなければならぬ、そして絶へず是を人類同胞の上に用ゐねばならぬ。

スコットランドの教授、ドラムモンド氏は実に斯の様な能を以て居る人である、昨年ノースフィールドのムデームデー氏の室家しやまに於て斯の様な事を申された、

神は唯独なりと雖ども、其品質に於て比なきを以て神なり、人は其数多しと雖ども、其品質の劣れるを以て人なり、然しながら今日世の大に要するは、吾儕の多数なるに非ずして、其宜しき品質あるにあり、優等の十人を得るは、尋常の信徒壹万を以て、世界に散布するに勝れり。

実に靈の能は如何なる教員でも、如何なる書生でも、又如何なる説教者でも、如何なる信者でも、持て居らなければならぬものである。

是迄は靈の能に付て理論の上から御話致したが、今より其事に付て實際上から御話致さふと思ふ、御同様に、どふ致したなら此能か得られよふか、又どうゆふ様に此能を使ふべきであるか、此二つの問題、得ることと使ふこととは終始相伴ふて参ることと思ふ。

凡て己れか既に持て居るものを使はぬものは、尚ほ余計に得られぬものである、一たん己れに托された金子を賢く使ふたものが、則ち尚ほ余計の金子を与へらるゝものであつた。

今私は自由あからさまに明地に、又幾分か自分の経歴したことを御話致すに依て、容赦あらんことを願ふ、勿論経歴したと申しても、敢て私わたしが此真似まねをして此事に付て完全なものになつたと申すのではない遙かに劣て居るのである。ピリピ書第三章十三節に斯の様なことがある、兄弟よ我みづから之を取りとれと意いはず、唯この一事を務む、即ち後に在ものを忘れ前に在ものを望み、標準めやすに向ひて進むなりと、されば靈の能とは如何なるものであるか。

第一我等は定りて堅き、確乎たる信仰を持たねばならぬ、否定主義の宗教や、不可思議ふしぎ説の宗教は、決して世を動かすことの出来ぬものである、疑と云ふものは冷たき刃の様で、命もなく、又実の結ばぬものである、勿論疑を起すべき事柄は沢山あるに違ひないが、キリスト教に就て極緊要な、天下の分けめとも

云ふべき処に至つて、あれも疑はしい、是れも疑はしいと云つては居られん疑ふと云ふことは決して悪いことではない誰でも必ず雪の山水の野に似たる疑念の境界を一度は通るべきものであるふ、だが其処に永く留まるべきではない、自分が其処に止まつて居れば、他の人を其処から導き出してやれぬ斗りではなく、永く居れば自分で先づ其処で凍へてしまふであらふ、凡て古来大なる靈の能を以て居つた人々は、強く確かりした信仰の人々であつた。

これより他かに緊要な事柄がないとは云はん、まだある、慥に少なくもまだ五つある、此五の事柄に付て吾等の疑念をはらさねばならん、神の爲め、人類の爲に用ひんとする靈の能を得様と思ふならば、是非共此五を確かりと信じねばならぬ。第一に神の存在である、吾等は只一つの生命あるペルソナの神を信ぜねばならぬ。第二に神の語の眞実なることである、吾等はキリストやポローロが絶へず夫れを使ふた様に、吾等の食物とし、又他の人の爲に働かんが爲め之れを使はねばならぬ。第三にキリストの神性である、昔しペテロルが爾は活ける神の子キリストであると答へたときに、キリストが此の岩の上に吾我教会を立てんと申された、そして千九百年の間、キリストの教会は此の岩の上に置かれ、爾来永遠の、世の終りまでも変らぬであらふ。第四にキリストの贖罪である、即ち罪より吾儕を贖はんが爲め、キリストの苦しまれて死なれたことである。第五は吾儕が生れ代り、靈に依てキリストと結合することである。前きに申した五つの事柄とは是丈であるが、是等の大なる真理に就て、何も彼も皆知り尽せと申すのではない、とても吾等に知り尽せるものでない、各皆無限の意味のあるものである、又、吾等が皆是等の真理に就て、同じ哲学上の説を持たなければならんと云ふのではない、是等は大なる真理、キリスト教の生命となり、其礎となる真理であつて、弱ひ説でも、之に付てしつかりと持て居るのは、良ささふな説をあやふやに持て居る

よりも遙かに勝つたことである。

第二 キリストに於ける吾儕の信仰は、智識や感情の及ぶ所でないと云ふことを、慥かに悟らなければならぬ、此の信仰はキリストを吾儕の救ひ主、吾儕の贖ひ主、又永遠の中保者として居る、大切な活た動かざる信仰である。教会の内には種々の恐るべき事があるが、凡そ会員がキリストの性質と教法の美と誠なるとを見て楽しみ、之に知識上の説明を付て、独りで諾づくぎりて何事も進でやらない程怖ろしい事はない、今日の教会の内には其様な人が沢山に居るふかと思ふ、此の様な人は決して救はれんものである、丁度難船した船人が波の間に漂よひながら、救ひに來た蒸氣船を見て、唯其の大きく立派なのに感服する而已で敢て其甲板にも往かず、自分の運命をも任せないと同じことである。信仰と云ふ文字は、原来托すると云ふ意義を含で居る、ヨハネ伝二章の二十四節にイエスが己を彼等に托せずと有るは、全第三章総て彼れを信ずる者に亡ぶることなくして永生を受けしめんが為めなりとあるのと、同じ意味の字である、又原本を見れば、信ずると云ふ語の後には必ず頼る又は托せると云ふ意味の前置詞がある、イエスに己れを托せることが、即ち救ひを受ける信仰である、だからパウロもテモテ後書第一章の十二節に、我れ彼れに托したる者云々と申して居る、だによつて、吾等は自己をキリストに托せたと確かに信ぜねばならぬ、したならば吾等は彼れのものであり、吾等の体も、霊も、時も、才も、何物も皆彼の為に用ゆべく、又彼が用ゆるのであると悟る事が出来る。

第三 是は前のと親密な関係のあることで、残りの一方から見たのである、即ち吾等は実にキリストに結び付たものであると慥かに信ぜねばならぬ、吾等は己れの心の中に聖霊を受け、聖霊が心の内に住み給ふと云ふことを慥かに信ぜねばならぬ。私が聖書を問題に依て調べる時に、何時も此の事柄程余計にあると

思たことはない、吾等信者の生命も、強きも、生長も、又役に立つ事も、直接に此のキリストと結び合ふと申すことに歸して居る、キリストの御詞にも、ポーロの詞にも、充分に此の事が申てある、吾等をキリストの中に簡（まじ）び（エペソ書一章三より五）とか、キリスト、イエス、の中に造り給へり（エペソ書二章十）とか、爾曹（なんぢら）は既に聖主より膏を沃がれ（ヨハネ第一書二書二十、二十七）とか、又イエス、キリストにある吾等（エペソ書二章六）とか申してある、譬て見れば、キリストは花婿の如く、吾等は花嫁の如きものである、（ヨハネ伝三章二十九節）キリストは基礎にして吾輩は建物の如くである、（エペソ書二章二十より二十二）キリストは体にして吾等は四肢の如くである、（ロマ書十二章四、五）キリストは葡萄の木にして吾等は其枝の如くである、（ヨハネ伝十五章一より十）キリストは羊飼の如くにして、吾等は羊の如くである、（ヨハネ伝十章一より十八）。

吾等はキリストに似たる貌（かたち）をもつ、キリストは限りなき栄光の御座より降り、愛と苦とを以て吾等の罪があがなつたのである、吾等は彼と共に十字架にかゝり、（ガラテヤ書二章二十節）彼れは又己れの権威と位（ほう）の方に、成るべく吾等を引き挙げんと力（つと）められ、罪に死にし時にすら我等を已れと偕（とも）に活（い）し、又イエス、キリストに在る我等を、彼と偕（とも）に甦（よみが）らせ共に天の処に坐せしめ給へり、（エペソ書二章五、六）故に吾等（われら）は神の子であつて、キリストと共に其国を継ぐべきものである、（ロマ書十六章十六、十七）故に又吾等（われら）はキリストと同じ栄光を持ち、又其喜と愛と生命とを同ふするものである、（ヨハネ十五章十一、十七章二十二、二十六）キリストは吾等（われら）の中に住み、吾等（われら）の中に働（い）き、吾等（われら）を手足として働（い）き、又吾等（われら）を己れの如くならしめんとするものである、（コリント後書三章十七、十八）実にキリストは吾等（われら）の靈の生命である、又吾等（われら）の力である、吾等（われら）はキリストにあつて始て完全なるものである。

是等の事柄は、吾儕わなみの生命の理に付き、又靈に依てキリストと結合することの理について、聖書に述べてあることの一二の例である、吾儕わなみの靈の生命と、靈の能と、靈の生長に對しては、是れ程大切な事柄は他かにない、吾等は今日此靈を持て居るであらうか、此の靈に依て活されて居るか、住われて居るか、又此の靈に依て精神を強められて、居るか。吾等に取て最も大切なことは、何時いつ此の靈を受たかと云ふことでない是れを受けたか受ないかと云ふのでもない、五年前で有るるか、一年前であるるか、或は先月であるるか昨日であるるか、其の様なことではない吾等に別に差し廻マワて、實際に大切なことは、次の問である、則ち吾儕わなみは今日只今此の靈を受けて居るか、今日只今キリストと靈に依て結合して居るかと云ふことである、勿論吾等は日々新に是を求めて止むことなく、益々完全になるふと力ちからむべきである、吾儕わなみは毎朝心の室の戸を残らず開ひて、是を其内に招き誘ひ、是をして心の隅から隅まで照さしめ、神の仕事の為に吾等を使はしむべきである。

是迄申した三の点は吾儕わなみの信仰の基礎きそとなる大切なものである、吾儕わなみが若し己れの疑ひを晴らし、己の罪を悔ひ、キリストを聖き贖あがなひ主となし、身も靈も彼れに托せ、キリストの靈をして我儕わなみの中にあつて、我儕わなみの光りとなり我儕わなみの道とならしめんが為にキリストと結合するならば、我儕わなみは此処に至て生長すべきもの、働き得べきものとなつたのである、さりながら生長して働かんが為には、次の第四の事に注意せねばならぬ。

第四 神の語ことばを読んで学び、是に依て己れを養ふことが大切である、靈魂は体の様に養を要するものである、吾儕わなみ若し神の靈に充ちて、其の光と導きとに依て神の語ことばを読む時には、其語ことばの内に、益々尊く益々深き意を見出すであらふ、靈魂は又之に養われて満足するであらふ、之を読むには、初より終に至るまで順序正

しく読もよろしい、又特別の題を選て読むもよろしい、或は又特別に己れの信仰を盛にする処のみを選て読むもよろしい、何にせよ、日、規則立つて読むべきである、吾儕われらの父の語ことばとして恭しく読むべきである、祈禱の精神を以て読むべきである、其眞理を理解せんが為に祈禱し、其眞理を深く感せんが為に祈禱し、兼て又其眞理を実行するが為に祈禱するが必要である

第五 祈禱と黙念に依て神と交わるべし、祈禱は勉て屢、するか大切である、祈禱を好まねばならん、若し祈禱を好まないならば、好む様になる為めに祈るがよい、祈禱は神と交はることであると云ふことを悟るのが必要である、眞の神に祈り、在います神に祈り、規則立つて祈り、常に心より祈り、止むことなく祈るべし、何時にても短き祈により、喜んで勤めずして己れの靈魂を神に向はせ得る様に、神が実に在ますことを確に覚ゆるを勤むべきである、吾儕われらに祈るべき処を教へ、吾儕われらの中にあつて祈る処の聖靈みたまによりて祈るべし、(ロマ書八章二十六、二十七、)一人の時には黙念し、他人と共に居る時には、神につき、キリストに付き、彼の愛と仕事に付き、又吾儕われらの有様に付き、生長に付き、キリストの為めの仕事に付て話す事が大切である、黙念の爲めにはヨハネ伝十三章より十七章まで、ロマ書八章、エペソ書などを讀むが宜しい。

第六 他人の爲にする働き 靈魂は食物を要する様に、運動をも要するものである、運動をしなければ、体がよわく病気になる、靈魂に就ても同じ様なる事実があります、此の事は学校に居る者に取て大に謹むべき事である、教員生徒は日に智識を働かしたり、之を博めたり、又発達させたり、体の運動に付ても多少注意をなせども、心の運動に就ては注意することが少い、其結果は、此等の人が靈魂上に就て弱いことと、人に対して冷淡なることで解る。

われ／＼は毎日靈魂の運動をなさねばならぬ、一人一人に付て働くことが必要である、他人を語ことばに依て助るとか、祈りに依て助るとか、或は又直接間接に頼たのはした愛に依て助る事が必要である、此の一人／＼に付ての働が何よりも大切で、此は働く人に取ても大切なので、其様なことがなければ靈魂は冷たく弱くなる、斯様に人の為に働く時は、心は自から暖かく又生長をして来るものである、且又一人／＼に付ての働きは、他人に取ても何より大切である、世の人がキリストの前に来るのは、をもに此の様な働きに依て居る、キリストは一個人に話をなさることを何日も喜よろこばれ、決して忙いそがして時がないの、或は又勞つかれて居て話が出来ぬなどと申されなかつた、自からをメツシヤだと現はされたのは、サマリヤの井戸の側そばぎで、旅つかに勞つかれ坐まつて居られた時であつた、其時の聴き者は唯一人の婦人であつた、此の様な一個人に対する働は、衆人を集めて説教するよりも、却て立派なる結果の生ずるものである。

此の様な靈魂の運動、則ち働は、吾儕わなびの学問の勉強を妨げざるも出来る、毎日何時いつでも自然まらんと、知らず／＼出来るものである、定つた仕事の間に出来るものである、若し吾儕わなびが神の教へ給へる真理に付き、確としたる信仰を持ち、キリストに全く己れを托せ、キリストの愛と靈たまとに充たされて居るならば、凡人に對して愛を持つ事が出来よふし、其愛は吾儕わなびの一生涯の道を照らすものであらふ、此の愛は吾儕わなびの容貌でも、行ひでも、語ことばでも現はすことが出来る、又此の様なことを互に話し合ふのは容易たやすいことで、共々に散歩する時にでも、喰ふ時にでも、勉強する時にでも、何時でも時機を見出してするが宜しい、此の様に神の充ちたる處、キリストの愛、聖靈の能を以て充ちて居り、兼て又其器械として神の手に己れを委ぬる所の書生は、誰にも計り知られない程の仕事が出来るし、そして其の仕事は時が経るに従つて、段々と立派に頼たのまれてくる。

トルコの帝国に四十年間宣教師となつて居られた、ドクトル、グーデルの伝記に、その学校に書生となつて居た時が書てあるが、其の中に此様な事がある、始め此学校に信者の数が甚だ少なかつたが、此人の第二年級に居た時分、信者の書生が一群となつて、毎土曜の晩に、反対者が妨げない様に、部屋の戸と窓を堅く締り集りをする事になつて居つた、した所が、此の小さな一群が決議をした、即ち銘々が其次の一週の間、活たる神の宗教に付て、少なくとも三人の仲間の書生に話をし、己等の祈禱に同感を持たせよふと云ふことであつた、グーデル氏が云はるゝに依れば、其書生達が決議した事を始めたか始めない内に、天より著しく霊を受け、学校全体に一大変動を起し、多人数の書生はキリストに導かれ、其導かれた中の多数のものは、後に諸学校の校長や、教授や、福音の伝教者となつたさうだ。

私が今迄申した事は、云はゞ理想上の信者の生活である、残念ながら私はまだ今の様な処に、求めては居るが達しない、去りながら働く為には、必ずしも此の理想に達するには及ばない、其の信仰は少なくとも、其愛は又少なく共、又其受けて居る霊は少なくとも、持つて居る丈を使ひさへすれば、尚ほ余計に持つ事が出来る、一タレントと云つても、手拭（うづ）に裹み埋（うづ）つめて置てはならぬ、使はない資本（もと）は無いも同様である、毎日持つて居る丈を使って余計を求めたならば、尚ほ余計に持つことが出来る、飢へ渴ひて義を求むる者は満さるべしと、救ひ主が約束なされたではないか。吾儕（われら）がキリストと結合し、キリストと偕（とも）に働くことに由て、霊の能を得れば得る程、他の人々に対して拔（ぬき）でた能を得ることが出来るし、又凡そ人類が為し得る中の、最も大なる仕事が出来、即ち人類を神に、キリストに、天に、引き上ることが出来る、吾儕各は神聖なる大望を以て、神の大なる策と合して居る処の大なる事を、吾儕生涯（われら）の策とせねばならん、これが為には常に霊の能を以て充たされ、日々神と共に働らくことが必要である。

「※「二字」とあるが「二字」（一軒の家の意味）の間違ひと思われる」

現今之神学

ジーダブルユーノックス

今日神学には二つの反対なる見解があつて、共に広く世に行われて居る。其一つは極端なる保守説で、神学を完全具備したる科学と做して居る、其説によればキリスト教の真理の示されてより、吾等務めて是を研究したるに依り、終に一の科学的の神学説を得た、而して此の説は最早再考することもいらす又進歩させることも、変化させることも出来ない、設たとひ変化をしよふとしても変化は必ず真理から遠ざけるものだとて斥けらる、是に反して他の見解にては神学は定た教理もなく、原理もなく、常に変化して居る、そして、時代に依て変り、国に依て変る、故に詰る所時代の精神から生れ出るもので、其教理も亦自ら時代の精神が反影したのである、だによつて此の見解では、神学に確定したる処がなく、詩に類したものである。私が思ふのにはどちらの見解もわるい、故に私は是から今日の神学を昔時の神学と比較して、此の学問の眞の性質を明かにしよふと思ひます。

第一 世の変遷 今日神学を以て百五十年前の神学、或は五十年前の通俗の神学と比較することは、何よりも厳びしき試験である、此の位大きな変遷は未だ曾て思想の世界に生じなかつた、吾等は日本に於ける過去四十年間に生じた変遷に驚て居る、熱心なる若い日本人は、天然の景色を除きて他かに変遷のな

いものはないとまで申て居る、吾等は又荒蕪野蠻の境界より助けられて、立派な開化の国となりし合衆国に於ける過去五十年間の變遷にも驚て居る、さりながら思想界の變遷に比べて見れば、此等の物質上の變化は至て些々なものである、思想界の變遷こそ、実に此外部物質界の變化を促したものである、新しき星学は宇宙に対する吾等の思想を全く變化せしめ、最も此の世界は蒼空の下にある天の中心ではない、地獄も亦ヴェスヴィヒヤスや箱根に蓋の開て居る足の下より遠からぬ処ではない、此世界は太陽を廻る只一つの小さな衛星である、太陽は又已れに附屬する星と共に、限らない空間の中に数限りなく輝き何処から来りて何処に運行するか解らん処の星の中の唯一つである、世界も亦大さう古ひ物となつた、昔の人は人間の歴史の始りを知て、其跡を尋て往けることと思て居た、地球の歴史も亦神が光り有らしめよと言ひ給し日よりの事が悉く解り切てをると思ひ、唯僅六千年で在て何事も皆判然して居ることと思て居つた、併ながら世界の年代は非常に永くなつた、歴史上の時代や、古物学や、地質学や、星学の論する時代を逆上り太陽も地球も皆塵の如きものであつて、神の靈が其中に漂て居つた時迄の年数は非常に大なるものであると云ふことを悟て来た、進化論も亦神の創世の方法に深く立ち入て論じたものだから、昔の思想を完く覆へして仕舞つた、進化論が全く真理であるか否らざるかは、今日之を論ずるに及ばん、然し是れが吾等の時代を圧倒し、歴史や科学や、其他の各事物に於ける思想を變遷させたことは疑ひないことである、終に吾等の時代は科学的の時代となり、何事にも科学的方法を応用し、科学をして吾等の思想の君たらしめんとして居る、是に由て吾等の先祖の目には自然以上のこと、見しものも、今日では説明されて、彼等を驚かしし事は吾等には普通のこととなつて来た。

此の如き時に當ては神学のみが變化せずに居ると主張するも無益である、何物も變化をしない物はない、

天然の景色すらも変て居る、田舎漢と美術家とに景色が同じく見えるか、子供の時分と大人に成つた時と山が同じに見えるか、太陽を見てアポロが輝ける車を御するのであると思つた昔の人と今日の吾等に太陽が同じ様に見えるであるるか、百姓は太陽を以て十里程先きにある光つた皿と見るし、星学者は其の運動の速度や其軌道を測つたりするが、果して此等の二人が太陽を同じ様に見るであろうか、決して一樣であるまい、吾等の知識は単に外部の現象の反射ではない、内部の思想と結合して出来るものである、故に太陽が変化するのではないが、思想の変遷と共に吾等の智識吾等の見る処が違て来るのである。

第二 演繹法 総て此等の変化の智識上の原因、即ち吾等をもともなひ行く処の今日の變遷の始りは、アリストートル氏の演繹法に代りて帰納法の発見ありし為で、此事が新旧の欧州を異にする區別させたものである、日本の如は、東洋に於て論理法が少しも真理の試験や発見に用ゐられなかつた故に、旧き方法を経ずに直に新き今日の論法を採たのである、此論理上の變遷は至る所大なる結果を生じて、神学の如きも凡て他の学問と共に此の影響を蒙つたのである、則ち問題は今も昔も変らねども証拠法がまるで新くなつた、例を挙て見れば、旧い神学は其初に於て一の大思想、或は一定の原理を置き、其公準は多くは神の全能の意志とか、或は完全なる神の定想であつた、狭く申せば、全智なる神の仕事に適當なることを以て公準とし、聖書のインスピレーションに就て論じて居つた、さりながら何時でも先づ原理と申ものを立て、夫から糸を引出すよふに論じて居つた、先最も高尚なる原理を置いて、夫から論理法に拠て段々と降てまいり、終りに吾等の住つて居る世界上の事実に通ずるのであつた、此方法は沢山環か集つて出来て居る鏈と同じ様で、各の環は全体に關係して必要なものであつたが、鏈は其中の一番弱いものよりも強くない、抜んで強く且賞歎すべく出来たのはカルヴェンの論であつて、今日でも此人の書物を見る者は、其智

識の優れたのに大そう感服して居る、さりながら此仕組は此様に鍵の如く一本道で進むが故に、自から細く狭くして、広く容ることが出来ぬ、又其全論の強弱も公準の可否と環の強さとに關係して居るから、少しでも公準を是認しない説は其内に容れらるゝことが出来ない、見た所で些細の点も、ひどく大切なもので、何様でもよいと云ふことは其内に一つもない、各の事が皆全体に關係して居る、併し其締結する所は科学の論に於ても、哲学の論に於ても、亦神学の論に於ても、まゝ吾等の經驗する事實に抵触することがあつた、其時には此等がどうあつても一致する様に、事實の方を無理なりに解釈したのである、神学に於て聖書は句の集まつたものとして用ゐられ、前後の文勢を顧ずに、一句々引き出しては、銘々の奉じて居る論説の証拠とした、其研窮は又神学説より聖書に遷るので、是に歴史上の証拠も加へず、深い註釈も試ないで、何でも彼でも皆神聖なる語（ゴットワード）から証明されたとした、それだに依て教派分派は益々多く、各皆或る原理に基き、己れの学派から少しでも外れたことは、皆異端であると証明する勢となつた。

第三 現今の方法 現今の方法にては、事實を以て初め、事實が多ひ程を宜として、学者が之を集め、之を学び、之を比較して、確乎たる土台の上に己れの専攻の学問を組上る、此方法に依て造り上げた科学的の神学は、最早一個の鍵でなく、金字塚（グールド）であつて、容易に倒されぬ確乎たる土台の上に坐て居る、是は、解しにくひ議論の行列でなくて、其内一つの決論（マエ）が疑はれても、全体が震へるなどと云ふことなく、批評を受くることも恐れないで、却て審問を幸なりとす、この事實を基礎として組立たる者の頂上より、自信して驚きを以て、神学者がとても穿鑿（せんさく）の出来ない無限なる高処を見詰て居る。此の方法は神学に新しき生命を与へました、一例を挙げて云へば、聖書を以て一部の新しき書物となし、之を学ぶ為にあらゆる歴史と批評の助けを用ゐる真的科学的の注釈を作つた、それだに依て今日にては天啓の段々と現されて来たこと

や、種から出た若ひ芽から立派な木に成長したことや、歴史上外部の有様から影響されたことや、同時代の哲学や宗教と大に異つて居たことを知るのが聖書の教ふる処を充分に悟るに是非共必用になつて来た、従て族長や預言者や使徒等が活た人々となり、其書き物や言語が活動して力あるものとなつた、聖書は昔の様に独断論を証明する文句の集合でなく、却て生命の基本となつた、組織神学も亦大に変化して、科学的の註釈に依て新に聖書を学び、又歴史を學んで教理の發達が如何程まで科学や哲学の發達に影響されたかを知り、又純粹のキリスト教の真理が、ギリシヤの哲学や、羅馬の法律に依て外貌の色を変せしことを知り、又中世の形而上哲学の發達の跡を尋ね、宗教思想に於ける憶説の結果を尋ね、カルヴェンや、ルーテルや其他英吉利イギリスの改革者の人となりを学び、其境遇の如何を研究し、又十七世紀の新煩瑣スコラック理学に至る迄も神学の進歩を尋ね、又自然神教や、十八世紀の懷疑論や靈のリバイバルの結果を学び、十九世紀の哲学、科学、物質上の進歩に依て如何に影響されたかを尋ねて居れり、かく宗教思想の歴史を研究して時世の変遷より生ずる偶然の事柄と永久不変の神の真理とを比らべ選り分つ事をつとめと致して居る、故に其採て己れの助けに供せしものは独り歴史のみならず科学と哲学である、心理学や地質学や星学や人類学や社会学の如き、凡そ宇宙と人類とに關して之れか説明を与ふるものは、皆容れて宗教の同盟となし、以て真理を求むるが故に、事實に相違なければ、一見矛盾せるが如き觀を呈するも、之を容るに躊躇することなし、如何にといふに今日矛盾せるが如き事も、后世に至らば必ず相和するならんと信じ、猶予なく自由の意志と予定とを教へて居る、如何なる人にも、凡百の真理を悉くトータルとすることは出来ない、真理も見様に依て異なる外見を現はすが故に、此の種の神学は甚だ広く異説を容れて之を拒むことなければ、教派上の過激と仇念とは忽ち消へ失せ、靈の一致と平和とある、

第四 結果 現今の方法は既に大なる結果を顕して居る、他の學問に於けると同じ様に、神學に於ても旧の方法は既に其為すへきことを為尽して仕舞、尚ほ進歩する見込がなくなつたのである、されど歸納法は他の學問に於けるか如く、神學に於ても大に見込あるものであつて大なる真理が之に依て新しい能を得たのを見て解る、古昔は神を以て遠く離れて、其能に依て万有を支配して居ると考へたが、今日では内の神が己れを総て宇宙に充たして居ると考へる、此の神に在て吾等が生存し、吾等が動く、そこで始めて最も充分な、又最も真正なる意味にて吾等は生きて居る、聖書も亦之に依て新しく限りなき味を見出され、最早如何なる懷疑論者の攻撃があろふとも、決して倒されん様な新き位置を占めた、倫理學も亦適當なる地位をさずかつて、古來に知られぬ熱心を以て研窮される、昔の神學は學說のみを重じたが、新しむ神學は生命の上に益々貴き味はいを見いだして居る、聖書は倫理の書物であつて、其新む研究は大に倫理學を刺激した、さりながら斯く聖書の倫理說に重みを置たと申ても、少しも教理を輕ずるのではなくて、却て今日迄生ける人と關係のないものだと思ふて居た教理にも、新しい生命のある光を与へたのである、なぜと申すに、倫理學は舊（た）に規則や法律や箇条書ではなく、活きた道理なるが故である、倫理の根元は在さなき死ぬることなき神である、生命や天国や贖（あがな）ひのことは倫理の教が総て此等を統へ括て居ることを知るときは尚一層貴くなり、時がないから唯一つの例より申されんが、此れは非常に大切なことであつて、今日の神學の得たる處が解る、即ちイエス、キリストの性質と生涯が今日の考へある人の心を動かしたことである、至る處彼の非凡の人性が此位に認められたことは古來ない、限りなき神の榮光として彼れが今日程受けられて居ることは古來ない、キリストあつて初て吾等は人間を知り神に往（おもむ）くことができる、數世の問題は彼の光りに依て初て解け、古來神學の内に是程キリストを充分に扱として居る時代はない。

第五 結論 然らば初に申た二つの説にどの位な影響ありや、勿論至る處進歩はあつた、此事実を斥ける保守派は盲目であるから致しかたがない、乍去事実を充分に学で見れば、旧説にも大なる真理が存して居ることが解る、吾等はこの急進派と分れねばならぬ、宗教思想は決してユニテリアン教にも、不可思議論にも、不信仰にも傾ふとしては居らん、勿論是等の疑ふ人々は、神学の弱点を指摘し、之をして進歩せしめた故に、真理の研窮に与て力あつたには違ひないが、神学は進歩して疑うよふになつたのでなく、益々確かなる地位を得たのである、今日程神の性と、キリストの神性とか、聖書のインスピレーションなどの明かな時はない、吾等は戦つて全勝を占たのである、今日キリスト教の真理の為にする辨護に對して充分な答をするものはない、夫ならば何故今日まだ疑ふ人があるのであるか、之は一部の人が臆病にも昔の辨護論にかじり付、議論に負けるからして自ら信仰が弱ひのである、去ながら其重なる原因は、新しい位置の強さと安全とを唯僅の人が認め得たのみであるに因る、併し疑の時代は最早過ぎた、是から全体の信者の軍勢が其勇を集めて世界全体をなびかせる時である。

吾等は宜く神に謝して勇むべきである、過去の歴史は未来に新き望を与へて居る、之からは、とても過去百年間にあつた程大きな思想の変革はなかるふと思ふ、去りながらキリスト教は此変遷を過ぎて尚ほ依然として居る、后世も亦かくの如であるふ、如何に文明の進歩があるも、思想の変遷があるも、決して信仰の城郭を震はせることは出来ん、躊躇し懷疑する時代は既に過ぎ、吾等は堅固なる地に拠て居る、是からは吾等相擁^{【抱擁】}て働くべきである、キリストの為に此世に勝べきである、伝道に於ても、社会に於ても、商売に於ても、政治に於ても何処^{【いずこ】}に於ても、常にキリストを示さねばならぬ、吾等の大に願ふ處は吾等の靈がキリストを以て充たされ、同じく神の子として同朋人類を生命の道に導かんことである。

希臘道德移于基督教道德之顛末

講演第一回

文学士 大西 祝

諺に「所かはれば品かはる」と申す通り、国を異にすれば風俗習慣から、又其風俗習慣をして然あらしむる人の内部の感情思想に至る迄も、多少其趣を異にして居る、夫故道德の有様に於ても国によつて固有特殊の所があり、又時によつて其趣に大小の変遷がある、偕其道德の変遷には、時と所に種々の理由原因のあるに違ないが、先づ総じて云へば二様に分つことが出来る、一は其道德思想内部の發達、即ち其思想自身に変遷の理由と原因とを持つて居るのと、又一は外部の影響、即ち外の道德思想と触れあつて変化を起すのと、此二ツである、兎に角総じて道德の変遷は、人間の思想の歴史に於て、最も注意して見るべき事の一ツである上に、取りわけ希臘の道德思想が基督教の道德思想に移り行く所は、世界の文明史にあつては一大段落を為して居る処であるから、人間の思想の変遷を知らうと思ふ者は是非とも此処は深く注意して攷究ねばならぬ、此の希臘の道德が基督教の道德に移りゆく次第は、之を攷究べるに夫自身の価値があるばかりではなく、是で幾分か我日本現在の道德思想の有様を照すことは出来まい乎、其思想のこの後の変遷を察することは出来まい乎、我日本今日の時代は何様其歴史に一大段落を為して居て、其道德思想の変遷と云ふものは実に荒じい程である、其変遷は遂には如何成り行くであらう乎、現今基督教の道德思想は追々我国に入り込まんとして居る有様であるが、其道德思想が我国の人心に占める将来の位地は如何なるものであらう、乎此等は心ある人々が皆多少念頭に浮べて居る問題に相違ない、今私は此講演で夫等の問題に充分の答を致さうとは思はぬが、然し其問題を解く為めに幾分の光を添へることの出来ぬでもなか

らうと思ふ。

猶又私が講演致す目的は、或一種の教義。神学、信仰の個条様のものを辨護致すのではない、夫故或一種の教義若しくは信仰の個条を持つて居てソレを辨護して貰らひ度いと思つて茲に集つてお出の方々に取つては、私の講演は不満足に思はれるに違ひない、夫等の方々に御満足を与へるにはまたソレに適當なる人達のあることと思ふ、兎に角私の講演致す目的は其辺にはなくて、只た純粹に淡白に事実と道理との研究である、別に一ツの仮定を立て、事実と道理とをソレに引き寄せて、ソレを証拠致す積りは毛頭も御坐らぬ。故に或ひは事実又物の道理の有りの俣を陳述致したばかりで、其事実又道理から引くべき結論の見えて居る場合にも、ソレを引かずに置く事もあるであらう、私は強ち或一の結論に達し度いと思つて講演致すのではない、只今此講演では或一の結論に達する事が出来ぬでも、若し事実と明白なる道理とを基として、自身独立に其結論を引くの思想と精神とを、諸君の中に少々にても惹き起すことの出来たならば、ソレで私は満足に思ふ。何様辨護的の議論でなくて、淡白なる事実の攻究に耳を傾け度いと思召す諸君は、暫く私と共に希臘の道德思想が變遷して基督教の道德思想に移り行く途すがらを辿られんことを願がふ。

希臘道德の説明に立ち入る前に、少々講述の仕方に就いて申して置かねばならぬ、如何に講述致したならば此問題を成るべく手短かに、又成る可く明かに説くことが出来きえう乎。一種の道德思想が他の思想に移り行く次第を知らうと思ふのであるから、先づ是非とも双方の如何なるものであるかを知らねばならぬ夫故充分なることを申せば、一方では希臘通俗の道德思想を始として、諸派の学理的倫理説をも一々説明致し、又一方では基督教道德の要領をも説明致さねばならぬ、又之に加へ希臘社会の状態又羅馬帝國時代の歴史をも一応知つて居なければならぬ、先づ此丈の用意か入用である、然し一々之を説明した日には莫

大の時間を費さねばならぬ、然し又右の用意は既に備つて居るものと仮り定める訳にもゆかぬ、然らば如何に致したら宜しからう乎、是が私が此問題を講述致さうと思ふて第一に感じた困難である、外に致し方がないから先づ希臘道德思想の極く特殊の点を掲げて之を明にする為に、希臘倫理學說の中にて最も肝要なるものを成る可く手短に説明致して本題を解釈するの注意と致すべし、基督教道德の方は諸君の中多くは既に其大概を御承知のことと思ふにより、之に格段の説明を附する事は致さざるべし、只だ希臘の道德思想が変遷して基督教の道德思想に移るの次第から考へて見て、基督教の道德に通常の説とはドウシテモ違つた解釈を下さねばならぬ様に思はれる所があるならば、其辺の点に就いては少々申し陳べることもあらう、ソシテ又希臘の道德思想を充分に知らうと思ふならば、学理的倫理説ばかりでなく、通俗の道德思想をも説き明さねばならぬ、然し前申す通りドノ道充分と云ふ訳に行き兼ねる故、重もに学説の方に注意することと致すべし。

之に就いて今一ッ申さねばならぬ事は学説と通俗思想との關係である、学説は通俗の思想とは自ら別のものと見えるけれども、亦矢張り当時の人心を写し出したものに違ない、学説には通俗の説に云つてない所までも往々云つてあるが、要するに其通俗の説をその趣く所の極端まで持て行いて其遠い結果迄も引いてあるに外ならぬ、又学説では通常人のただ暗に、冥々の裡に求めて居ることをば明に云つてあつて、其求に兎角の答をしてある故、通常の説よりも一步も二歩も前に進んで居る所があり、又夫故学説は通俗の思想の有り、の、仮、を、写、し、出、した、も、の、で、は、な、く、固、より、多、少、別、な、る、所、が、あ、る、が、然、し、其、大、体、の、趣、は、矢、張、り、通、常、の、思、想、と、一、致、し、て、居、る、加、之、通、常、の、思、想、の、趣、を、(今云つた通り)其到底る所に持つて行いて、ソレを一方に傾けて云つてあるから、其思想の趣を知るには極く便利な所がある、此等の理由からして希臘道德思想の特

点を御話し致すにも、重もに学説によつて陳べる事と致さう。

希臘人の考では、道德の学は真正の善福（ユーデモニア）即ち一時ばかりではない永続する幸福を求めるの道である、道德の学ばかりではない、哲学全体が之に達するの道に外ならぬ、希臘人は何を真正の善福と考へて居た乎、如何なる人を最も多福の人と思つて居た乎、次に陳べる名高き話で略ぼ其通俗の考を描く事が出来ると思ふ。

希臘の歴史家ヘロドトスが記し置きたる話に、希臘七賢人の一人なるソロンが当時富有を以て天下に聞こえ、威權赫々全盛を極めたるリデヤの王クレイソスの朝廷を訪ひし時、クレイソスはソロンを導いて其宝库を見せしめたる後之に問ふて云ひしには、

オ、亞典より来し異邦の客よ、爾の智慧と遍歴に就いては世の評判いと高かり、爾が哲人の觀察を下しつ、四方の国々を歴めぐりし由は我屢、之を聞きぬ、今我爾に問はんと欲す、爾が今に至る迄見し人々の中之ぞ最も多福の人と思はる、者ある乎。王は我こそは其人ならめと思ひてシカ問へるなり、然るにソロンは王の悦を買はんが為めに語るを好まず、只だ思ふが俛を陳べて曰く、王よ亞典人テロスならんかなと。王は此答の思ひがけなさに驚き問ふて云へる様、爾何すればテロスをば最も多福の人と云ふ乎。ソロン對へて云ひけらくテロスは其都府の榮えし日に住み、美はしく善き子をまうけ、孫の顔をも見ることを得又其子孫の皆無病息災なるを喜びてき、彼は吾人の位地にありては善き場合に其生を享け、又其終に臨んでは花々しき死を遂げたる者なりき、蓋し彼は亞典人が隣国の者とエロイジスに戦ひし時、敵を切り靡けて涼しく戦場に討死しぬ、亞典人公の費用を以て彼を其斃れし地に葬りて彼が嘗てたへたり。

と、斯くソロンは多福の人を描いたが、今試に之を基督の山上の教訓に描いてある「福なる」人に較べて見る時には、一目にして其趣の違がふ所がわかる、「心の貧しき者は福なり天国は即ち其人のものなればなり、哀む者は福なり其人は安慰を得べければなり、心の清き者は福なり其人は神を見ることを得べければなり、我爲めに人汝等を罵り又責め偽りて各様の悪言を云はん、其時は爾曹福なり喜び樂しめ、天に於て爾曹の報多ければなり」と、斯う云つてある、其言の精神と云ふものは、ソロンの云ふ所とは全く相ひ異つて居る然し斯くも相ひ異なる思想が希臘羅馬の社会に於ては、遂に其一ツから他の方に移り變る事となつたを思へば、人の思想の変遷と云ふものは実に奇妙なるもの、然し又其變遷の順序次第を考ふれば嚴然たる理由あり原因あつて、ゆめ縁由なくして出で、縁由なくして去り縁由なくして變るものではない。

右ソロンの話を善く考へて見ると、其中に希臘道德の特殊の点を見つけることが出来る、希臘倫理の学説も亦夫等の点が本となつて出て来たのである、倍ソロンの語に描いてある幸福を見るに、是れ皆自然界に属して居るもので、都会の繁昌と云ひ、子孫の繁栄と云ひ、衣食住に不自由なきと云ひ、敵を討つて高名を挙げると云ひ、皆人間の自然に求めるもの、又自然の世界から得らるゝものである、之を彼の山上の教訓に心の貧しきものは福なりとか、哀しむ者は福なりとか、神を見る事が出来るとか、天に於て報が多いとか云つてあるに比ふれば殆と表裏の差別がある、現世では苦艱を嘗めても、其果報として来世の極樂を享ける人が真に多福の人であるなどは、希臘古代の人の心には乗らなかつた思想と思はれる、希臘人は此美はしき、此吾人の目の前に広がつて居る自然界の外に、現世の外に、安心立命の地を求めるの必要を感じなかつたと思はれる、其道德思想は皆現世に於て、自然の世界に於て実行され得べきもの、其求むる幸福は全く人間自然の性情から起るものであつた、然し其幸福を求め、天性の需要を充たすと云ふ所に一

ッ、所謂る希臘風なる所がある。

右陳べたソロンの話を見れば、テロスはクレーソスの様に莫大なる金銀財宝を蓄へて居たではない、又威權赫々飛鳥を落すと云ふ大国の王でもない、去ればとてまた日常入用のものに乏しいと云ふでもない、即ち其有つて居るものは度を過ぎて居ない、皆釣合を保つて居る、一言に云へば皆中庸を保つて居る、此適度、此中庸と云ふことを、希臘人は何につけても貴重して、度に過ぎ、凶放れて居ることのよろしくないと云ふ意を、其通俗の説では神が過ぎたるを嫉むと申してある、彼のソロンがクレーソスに對へた時にも、神の嫉妬と云ふものがあるから、王の生涯の終まで見届けねばドウシテモ王を多福の人と云ふことは出来ぬと申した、去れば希臘人の考では、人間の生涯全体に目を着けて之を優美に暮して行く（譬へば一の調子よい音曲の様に暮して行く）のが最も善い生涯である、偕此調子よい所は何処から見出して来るかと云へば、人間の生れつき、自然の性から見出して来る、人間の生れつきに具へ居る諸の性能を、それ／＼の度に從て過不及なく発達さして、丁度彫刻師が四肢五体を釣合よく刻む様に、釣合よく吾人の性徳を働かして行くのが、吾人人性の理想である、此理想を実行に描くのは一種の術である、此修徳術の精神は取りも直さず美術的である、此の如く美術的に過不及なく釣合よく、我諸能の調和を保つと云ふ所が即ち所謂る、希臘風なる所である。

偕又右の様に人間諸能の調和を保つてゆくには、何の指図に從つたら善からう乎、何が諸の性能にそれ／＼の適度の所を指示するものであるかと云ふに、吾人の道徳心より外に此職務に当るものはない、前申す通り希臘人の思想は總して自然的であり、又從つて其道徳思想も自然的であつて吾人の天燃自然の性と云ふことを土台の考として居るからは、吾人が自然に具へて居る性能の中にて最も高尚なるもの、最も貴重

なるものを所依たよりとするより外に仕方がない何故なぜなれば神様の御意ごい、其御力又天啓と云ふ様のものに頼たれば兎も角も之に頼たよらぬ以上は皆吾人銘々が自然そなに具へ居る道理心即ち理性を導者みちびきとして、銘々自ら徳を修めて行くより外に仕方がない、吾人の理性は吾人が下等動物と異なる所以、吾人に特別固有なるもの、人間の人間たる所、即ち我性能の最も貴い所であるから、善く之を働かしてゆくのが我最上の職務である、此点からして総べて希臘人の道德思想は著しく理り性せ的て知ち力り的てである、吾理性を働かして静に天地万物の規律秩序のあつて美はしき様さまを觀するのが吾人最上の職務でもあり、又最上の快樂でもあると（希臘人は）考へて居た、夫故希臘古代の哲學者アナクサゴラスに或人が問ふて、茲こゝに一人の人が世に生るゝとして見て、何の為に其人は生れることを願つたらよからう乎と云つた時にアナクサゴラスは答へて、天を觀察し全法界に貫通して居る秩序を觀察する為めに生れる事を願へ、と申したと云ふ話がある。

今迄申した所を取り摘んで希臘道德の理想を描いて見れば、吾人の理性の指図に従つて、吾人銘々自分の自然の性を過不及なく、釣合よく、発達さして、何の点にも善く調和を保つて居る、美はしき人間となるのが是れ人生の理想である、ソシテ其如く理性に従つて適度を守る所に真正の幸福が存して居る、是が即ち希臘人の所謂る善と美の相結んで一ひととなつた人性の模範である、（希臘語に所謂るカロンカガトン）、ソコデ彼の音に名高きデルフイの宮には「自を知れ」「過すこと勿れ」と云ふ語を刻んであつた。希臘道德の自然し然じ的て理り性せ的て美び術じゆ的てなる事は今迄申し陳べた所で一通り鮮あかつたと思ふにより、此から希臘学理、倫理説の重なるものを挙げて、猶更なほさらに希臘道德の特殊の点を説明し度いと思ふ。

希臘で道德の理を学理的に考へ始めたのは先づソクラテスであらうソクラテスは西洋倫理学の始祖と云つてよい、希臘倫理説の特点若しくは其特点の種子となるべきものは、概ねソクラテスの学説若しくは其行

状マツに含まれてであると云つてよい、孔子を支那人中の支那人と云ふことが出来るならばソクラテスは希臘人中の希臘人、即ち純乎たる希臘人である、ソクラテスの倫理説に最も著しい点は智識を徳行の動力と見做し、徳行を惹き起すに最も（寧ろ唯一の）必要なものと考へた所にある、其考では、人が若し善を善と知らば之を為すに違ない、吾人の善いことと知つて之を為さぬ筈はない、自然に為すに違ない、但だ善を知らぬからわるい、ソコデ先づ善の何たるを知るが第一の事である、此ソクラテスの考には希臘倫理説一般の特点たる理性的知力的なる処がよく見える、ソクラテスは此知力的倫理説の基を置いたものと云つてよい。

ソクラテスは善を知らねばならぬ、知れば随ヒカつて人は之を行ふと云つたが、それならば善とは如何なるものぞと云ふに、此事はソクラテスは只だ個々の例を挙げて説明したばかりで全またく定義を下した事はない、丁度孔子が其説いた仁に於けると善く似て居る。

ソクラテスの説を受け継いで之を広く且つ深くしたのはプラトーンである。プラトーンの学説をわかり易く説くには、先づ個々の物と其個々の物を総括する概念との差別を明にするに若くはない、個々のものは常に変化し生滅し行くもの、概念は常住不変のもの、之を人間に譬へて云へば、個々の人は始終変化生滅してチットモ定まらぬもの、只だ人間と云ふ概念は何程たつても変る事はない、プラトーンは此概念を今通常論理学で云ふ丈のものに止めずして、実際に存在するもの個々のものを離れて、別に実在するもの即ち人間で云へば個々の某々なにがなの人を離れて別に誰彼ときまつた事のない只だ人間と云ふものが、実に存在して居ると考へて之を「アイドス」と名けた「アイドス」は個々のものに対して見れば常住不変の模範てはの様なもので、個々のものは常に変化生滅する不完全なる写うつしの様なもの、只だ仮かりに存在して居るばかり、真に存在す

るもの即ち実有のものは只だ「アイドス」ばかり、ソシテ此「アイドス」に又段等があつて、個々のものが一の「アイドス」に総括される様に、また或若干の「アイドス」はその上の「アイドス」に総括されてある、斯くして段々上に昇て行けば遂に最上の「アイドス」に達する、此最上の「アイドス」は完全なる実有のもので、それから下に降る程実有の相を失つて行く、極く下段に降ればソコには五官に触れる物質に属する個々のものがある、之は実を云へば有ではない無と云ふべきもの、只だ有る様に見えるばかりのものである。

倍プラトーは右云ふ最上のアイドスを名けて至善と云つたが、至善とは委しく云へば如何なるものかと云ふに別に之を形容すべき言はない、然し強ひて何とか言へと云はゞ、先づ稠和秩序など云ふ語を以て形容するの外はない、然し実を云へば此至善は稠和秩序ではない、只だ調和秩序として働き現はるゝばかり、然しプラトーが此の如く何よりも先づ調和秩序なる語を以て至善を形容せんとしたのを見れば、其考が美術的（即ち希臘思想に固有なる美術的）の特質を具へて居ることがわかる、右の如くプラトーは矢張りソクラテスと同様、至善と云ふ事に十分なる説明を附し得なかつたけれども、兎に角之に純理哲学的の基礎を与へたことは、ソクラテスの説に比ふれば一大進歩と云はねばならぬ。至善は最上の「アイドス」である故、吾人の徳は純粹なる理性の働を以て此常住不変実有の「アイドス」を靜に觀するにある、五官に属する流れ去る快樂などは吾人生活の目的とすべきものではない、吾人の理性は此「アイドス」から来たもので、其「アイドス」を觀る事の出来る筈のもの、然し吾人には又此「アイドス」に最も遠い物質に属する肉体があるから、吾人の見る所が眩み易くてならぬ、それ故吾人に取つて最も善き事は、此肉体に属するものを去つてしまつて、純乎たる理性となつて「アイドス」を觀し「アイドス」を体するにある、此

の所は是れプラトローの倫理説の片側かたがはで此所こばかりを見れば其説は幾分マデが希臘固有の自然的の思想から遠ざかつて居るものと云はねばならぬ、然し又他の側かはから見れば其説は矢張り純乎たる希臘思想の趣おもを表はして居る、何故なぜなれば一方から見れば成程下等のものを全く振り棄て、「アйдス」に溯らねばならぬ様に思はれるけれども、又他の方から見れば成るべく「アйдス」の働を下等のものに推し及ぼさねばならぬ（即ち下したのものを丸きり棄てるよりも寧ろ上うへからそれを化して行かねばならぬ）とも云ふことが出来る、此の点から考へると強まがち下等の肉体に属するものをば去つてしまふにも及ばぬ、之を「アйдス」に従がへる様にして、上なる理性で下なる肉体の働を制して行けばよい、此こからしてプラトローは人間の諸もろの性能を以て各其所を得さしめ、其鈎合マユ、其調和を保たしめると云ふ希臘固有の思想に立戻つて来る。

吾人には靈魂がある、之は「アйдス」に属する上等のもので、其働は即ち理り性せいである、然し又肉体を以て居る故之に属する情慾の働がある、又肉体と靈魂と結び合つて居る所からして、茲こゝにモ一つ中様の働が生して来る、之は志氣しきと名くべきもので胆力気奮発を要する働は皆之に属して居る、此三種の働には皆それくゝの徳があつて、理性の徳は智ち、志氣の徳は勇ゆう、情欲が其処を守つて適度を過さぬを節制せつせいの徳と云ふ、勇は節制の徳の上に立ち、智は勇の徳の上に立つ、智は下の二つの徳を指揮して行く務を有もて居る何故なれば凡べてのものを指揮するは理性の職務である、ソシテ此三種の徳の善く調和して行くを公義こうぎの徳と名ける、プラトロー以後希臘の学者が徳の種類を分別するには、多くは皆今陳べたプラトローの分類法を基として居る、是は丁度儒教で智仁勇又は仁義礼智と云ふのと善く似て居る、此プラトローの道德論を見る時は、其理り性せい的てき又美み術じゆつ的てきなることは一見して明であると思ふ。

循じゆん又理性的の道德説は自然と貴族的となる、何故なぜなれば智力を研ぎ、十分に理性を働し得る者はドウシテ

モ生活の余裕あり少数の者に止まる、夫故徳は貴賤上下の差別なく誰も彼も同じ様に修められるものではないとなつて来る、ソコデプラトールは最上等なる智の徳は政を執る賢者即ち哲学者の徳、勇は兵士の徳、節制は最下等に位する平民の徳と申した、プラトールばかりじやない、希臘の倫理説は総して此貴族的の臭味を帯びて居る、今之を上下貴賤賢愚貧富の差別を打毀して万人平等を基として居る基督教の道德思想と比較する時には其違は一目瞭然である。

プラトールは至善と云ふことを純理哲学の上から説き出したが、其弟子アリストートルの説は大に其趣を異にして居る、アリストートルの倫理説が其師説と最も違がふ所は、純理哲学的の趣を去つて著しく心理的なる処にある、アリストートルが云ふには一物を善と名けるは其物が其物固有の目的を全うするからじや、善てふことは物それ々の職務を全うする働にある、吾人が吾人の職分を全うする時は吾人は善を為したるものである、最上の善即ち至善は最上の目的職務を尽すにある、吾人に固有なる、特殊なる、最上なる職務は吾人の理性を働かすにある、夫故純粹にたゞ道理心を以て天地の秩序法則を觀察するのが最上の徳であるけれども、吾人は只だ理性ばかり具へて居るものじやない、又感情を具へて居る動物であるから、天地万物に通貫する道をば只だ静に観念して得る快樂は人間には高尚過ぎる、是はたゞ神に適する快樂である、此考からしてアリストートルにあつてはプラトールよりも猶ほ明に徳が二段に分れる、純粹の理性上の徳と感情情慾を制御して宜しきを保つ上の徳とに分れる、アリストートルが實際攻究する徳は此第二段の徳であつて、之が即ち人間に相応の徳である、此徳を論するに当てアリストートルに固有の所、又希臘全般の道德思想に固有の所は、徳は中庸を保つの働にあると云ふの点にある、中と云ふは支那の学者も云つた通り定期的の中、所謂の子莫の中ではない、性にかなふ働が即ち中に処る働である。

又一つアリストートルの倫理説に特殊なる所は行為の鍛錬、即ち意志の働を重ずるの点にある、之はアリストートルがソクラテス又プラトリーの説の欠点を補はうと思ふの意から出たのである、アリストートルが思ふには中々實際は然はゆかぬ、徳道上の知見は寧ろ行つて始めて十分に得らるゝもの即ち道德の旨を行はゞ其徳の何処より来りしかを知らんとでも云ふべき考からして、行為の練習、意志の熟練を殊に重した、ソコデアリストートルが、徳とは何かと云ふに答へた有名なる定義がある、「徳とは吾人の性に相応したる中を保つ意志の状態を云ふ、而して其中の何処にあるかは明知見を有する者が道良心の与ふる判定によりて定むる所なり」と申した。

此に由て見ればアリストートルの倫理説は、意志の働を特に重ずるの点にては成程ソクラテス又プラトリーの説とは多少異つて居て、其欠点を補はうとしたものであるけれども、全体から見れば矢張り希臘一般の倫理説に固有なる理性的の所、又過不及なく釣合のよきを貴ぶ美術的の所、又吾人が現在具へて居る天然の性を基として其性の自然の発達を計る自然的の処、此等の希臘道德に固有特殊なる所をアリストートルの倫理説に具へて居る事は実に明かである。

又一つアリストートルに於て希臘倫理説に特殊なる点を見ることの出来るは其個人的なる所にある、アリストートルが掲げた徳の定義は、是れ一個人が銘々の品格を作り、天性の発達を計るをば云ひたるにて、其重する処は銘々一個人の有様にある、銘々自己の品性を高うする処にある、人を利益する働をも自己の価値ある品性から自然に流れ出つる働として見るのである、之を基督教で己を棄て、他人の爲めを計る愛の徳を最上とするに比ぶれば其違は實に見認め易い。アリストートルは勇敢節制の徳を始めとして、種々の徳を列挙して之を見事に分析説明致したが、奇な事には其中基督教に云ふ愛の徳或は之に接近する徳を

見ない、又仏教で云ふ慈悲。又儒教で云ふ仁に相応する徳をも見ない、只だ其中仁愛慈悲に最も近いと思はれるは吝嗇ならず惜なく物を施すと云ふ徳である。

諸右に希臘の三哲と呼ばれ、古今の大哲学者と云はるゝソクラテス、プラトーン、アリストートルの倫理説を、その極くあらましの点に就いて陳述致したが、今此等の学説に固有なる処を取揃へて再び希臘人の道徳上の理想を描くならば次の通りに申してよからうと思ふ。

希臘人の考では吾人は天然に種々の性能を具へて居て、其性能の中で最も貴き所は理性である、去るが故に其理性の指図に従つて現在具へて居る天性を過不及なく鈞合よく優美に働かして行くのが是れ吾人の職務である其職を全うするが吾人の徳である此徳を修めたる人が即ち善美なる人性を完うしたと云ふものである、ソシテ此徳は此世で完うすることの出来き、又吾人銘々の力で全うすることの出来るものである、幽冥の世界、自然以上の界に吾人が徳を完うするの地を求め、又之を完うするの力を偲るには及ばぬ、此現在吾人の前に広がつて居る万有は実に美はしき秩序と法則とを具へて居るもので、之を靜に觀察する時は吾性の求を満足さするに足る、我等人間は此美はしき法界に生れ出でたる美しき花の如きもので、花の如くに生し、花の如くに美を享け、花の如くに過ぎて逝く、何の恨みる所のあらうかと云ふが是れ希臘人固有の思想である、希臘人に取つては此世は来世に行く支度をする所、後生に入る学校、即ち只だくゝ未來に行く為めに存してあるなどとは殆ど解する事の出来なかつた思想であらう、其思想は著しく現世的又自信的であつて、人間は生れつき腐れた癖んだ罪人で、若し天の神様が力を添へて引き上げて下さらぬならば全い人になることは出来ぬ、全いはサテ措いて天然自然の生れつきの俣では毛頭も本統に善き事は出来ぬ、上からの力によつて生れ更へり新しき性を得、新しき人間とならなくば一寸の善も一点の義も為す

事は出来ぬと云ふ如き思想は、希臘人の考には乗らなかつたに相違ない、然しアリストートル後三百年の頃からは此思想が現に当時の人心を靡かし出し、遂には希臘羅馬の思想界を圧倒するに至つたのである、如何にして右云ふ如き最も自然的なる希臘の道德思想が、最も超自然的なる基督教の道德思想に所を譲る様になつたか、其変遷の次第は次の二回に陳べる所で御聞を願ひ度い、

講演第二回

前回に希臘三大家の倫理説を略述致して、それによつて希臘道德思想の特殊の点を指摘致したが、今一ツ是非とも陳べて置かねばならぬ学説がある。アリストートル以後は、希臘の哲学は四分五裂して幾つかの学派を生ずる事となつたが、若し希臘の倫理学史を講ずる積りならば、此等の学派、即ちエピクロスは勿論懷疑派の倫理説をも必ず一応陳べずばならぬ、然し茲では倫理学史を講義致すのでは御座らぬ故、先づ他の学派は措いて希臘倫理思想の正統の流を汲んで居る一の学派を挙ぐればそれで足りると思ふ、且つ此学派の初期から末期に至る間の變遷には頗る注目すべき処があつて、其變遷し行くに連れて漸々基督教道徳の思想に近づいて来る趣が見ゆる、此派は即ち「ストア」学派である。

ストア学派の説に従へば、徳は自然に従がふ生活にある、其学説に云ふ所では万有を貫いて居る道があり、理性があつて之を神と名ける、抑も万有に整然たる規律秩序のあるは此道、此理性、即ち神があるからのごとく我等人間の理性は此万有の理性から来たものである、其一部分とも云つてよいものである、夫故自然に従ふと云ふ事は一方から見れば万有の理性に従ひ、其理性から出で、天地万物に現はれる自然の秩序と運行に従ふと云ふ事になり、又一方から見れば吾人の自然の性（委しく云へば万有の理性から来て吾人

に宿て吾人の性となつて居る道理心即ち理性に從ふと云ふ事になる、局る処「ストア」学派の説でも、徳は吾人の自然の性に相応する働にあるので、此点に於ては「ストア」学派も矢張り希臘一般の倫理説に固有なる理性的、自然的の所を具へて居ることは明である。

然し「ストア」派では殊に甚しく快樂を卑しめて、人は情慾を適度に節すると云ふよりも寧ろ之を抑圧せねばならぬと云ふ、吾人に取つて貴いものはたゞ理性ばかり、夫故理性にのみ従つて外物に動かされぬ様にせねばならぬ、外物に対しては全く無頓着、快樂苦痛財産など欲くも何ともない、唯だ理性が自らの性に従つて働く処に吾人の貴い処がある、そこに真正の自由がある、理性さへ大丈夫なれば為る事なす事少しの過もない、若し此理性が微弱であつたならば為る事為す事間違ばかり、善惡の所業は全く中心から出で、来るもの、外界には少しも拘らないものである。此考からして「ストア」学派では人の行為又為人は全く善か將た全く悪かの二つであつて其中位と云ふ所はない、一つの事に善くば皆に善し、一つの事に悪くば皆に悪ろしと説いてある、「人律法を悉く守るとも若しその一に躓かば是れ全を犯すなり」と聖書に云つて有るのと、「ストア」学派で云ふ処とは其意によく似て居る所がある。

右申す通り「ストア」学派では情慾を適度に節すると云ふよりも寧ろ之を抑圧せねばならぬと教へる所などは、純乎たる希臘風の思想から多少離れかゝつたものと云つてよい、且又道德上の行為に就ては、其行為の出づる中心根本の処に目を附けて、何も彼も其根本の所から値直を定めて行かうとする所は多少後の基督教的の考に近よつたものと云つてよからう。

倍又「ストア」派では前に云つた通り、万有を支配し万有に通貫する道即ち理性があつて之を神と名ける、固より其神と云ふは凡神教的の意味で、意識を具へて居る有神教の神とは違がふ、併し道德を万有の法則

の本たる理性から出たるものと見做し、又其道德を人間の守らねばならぬ法律即ち万有の神から授かつた命令、上から出でて權威を以て居る命令の様に思ふ趣が明に「ストア」学派の説には見える之は、猶ユウ太サイ基督教で云ふ神学的の道德説、即ち徳は神様の御意に従ひ其示された律法に従ふにあると云ふ考にはまだ余程隔りがあるが、然し支那シナの学者が道は天に出づるなど只だ漠然と云ふ意とは多少基督教的の考に近かい様に思はれる、兎に角此等の点は純乎たる希臘の道德思想が漸々シヅカ移り變つて行き居る徴候と見て差支なからうと思ふ。

又「ストア」学派では人間銘々の理性は皆万有の理性から来たもので、同じ一つの理性が万人に通して居ると云ふ考からして、多少人種国民の隔をわかれ排いて、彼の所謂「ストア」派の世界主義即ちコスモポリタン主義の思想を起す様になつて来た、此思想を起す様になつたのには大に羅馬社会の政治上の影響もあつたに相違ない、固より此主義はまだ純全たる四海兄弟万人平等の主義とは云へぬ、然し同じく理性に従つて行ふ者、即ち聖人賢者は何の国、何の民たるを問はず皆一の社会をなし、此世の政治上の区域に拘らぬ一の聖賢の国を形づくるものじやと云ふ如き考は、希臘がまだ全盛を極めて居た時分の考では更々ない、プラトプラトーが道德を説いたも是れ皆希臘人の徳として説いたので、奴隷にも（又希臘人が卑めて野蠻人と名ける）他国の人にも等しく守るべき責任の有る徳を説いたのではない、此のプラトプラトーの考に比べて見れば「ストア」学派で見る所は其の眼界が大に広まつたと云つてよい。

前申す通り「ストア」学者が謂ふ所の神は固より基督教的有神論に云ふ神とは同一ではない、然し上は天体の運行から下は人間の万事に至る迄皆此神の働によつて出来る。人間は何事につけても此神の布ツける道に従はねばならぬと云ふ考を本として、「ストア」学者の思想は或点に於ては著しく宗教的になつて居る処

がある、此学派で大家の名あるクレアンテスが「ゼウス」（神）を讚美したる有名なる歌に、

『朽果てざる者の中最も光榮ある者よ、多くの名を有てる「ゼウス」よ、凡べての物を法則に従つて司り全能にして無窮に在す宇宙の王よ、朽果つべき人間は皆汝を呼ぶべきなり、……主よ地の上にあるもの一として汝を離れて成るはなし、上なるエーテルの球に於ても然り、下なる海に於ても亦然り、たゞ悪人が其気候に為す事のみ汝の業にあらざ、否汝は粗なる者を滑にし、秩序なき者の中より秩序を来たす道をさへ知り給ふ、和なきものも汝の目の前には和あり、……人を其悪しき愚痴より救ひ出し給へ、父よ世の人の心より其愚痴を放ち給へ、人をして知恵を知る事を得させ給へ、知恵是れ汝が公義を以て凡へての者を司る所以なり』と。

斯く申してある、此等の語を読む時は其語氣の著しく宗教的なるに気付かでは居られぬ、又クレアンテスが、神を最もよく拝しえうと思ふならば、吾人の胸の中にて彼を知り彼に従ひ度いと思ふ心で拝するに若くはないと申した語などを読む時は基督が、サマリヤの女に申された語を思ひ出さすには置かれぬ、此の如く「ストア」学派の説く所に著しく宗教的の趣あるは、亦そのマジナヒ、占の術などを以て神と人との交通の手段と考へた所でもわかる。

右等の点によつて見ればストア学派に於ては希臘の道德思想が幾分か移り變つて行き居る事がわかる、又其移り変りは如何なる方向に向いて行き居る乎も幾分かわかる、「ストア」学派の倫理説の基礎は失張り希臘固有の理性的自然的の思想にあつて、其倫理説の組立は理性に従ひ人間自然の性を全うするが徳であると云ふ考から打建てたものであるが、此希臘固有の土台の上に打建てた建築の処々の部分は既に幾分か希臘思想の固有なる処を失はんとして居る事がわかる、「ストア」の道德思想には希臘が全盛を極めて居た時

分とは頗る異なる處が有つて、多少基督教的の思想の方角に向ひて居る事がわかる、只だひとり希臘全盛の時代にありながら後世の思想を予期して居る様に見えるはプラトーン、プラトーンが人間の体は靈魂の獄屋である、靈魂は此獄屋を出て、其もと住みし天の故郷に帰らねばならぬと云ふ處、又その思想の往々自然界を超越して幽妙の界に入り、其活氣ある言語の往々著しく宗教的、敬神的となる處などは実に希臘全盛時代の思想には珍しいと云はねばならぬ、之がプラトーンの希臘人でありながら希臘人を超越して居ると謂はれる所以である、然しながらプラトーン思想も亦其全体から見るとは矢張り純乎たる希臘風に違ない。

右陳述致した「ストア」の思想は其学派初期の思想、即ち其学説の建物の成りあがつた迄の思想であつて、其後、中頃から末期の時代にかけては幾多かの變遷を経過する、其變遷の矩合を見る時には希臘の道德思想が猶ほも移り行く様、其の將に一大歩を転せんとして居る様が猶ほ分明にわかる。

「ストア」学派の中葉に當つて最も我等が注意を曳くべき事は、此派の学者が修徳の模範とする聖人てふ觀念に就いて思想の変遷したことである、「ストア」学者はもと此模範を描いて銘々之に達する事の出来るものと考へ、又現に自ら之に達したと信じて聖人てふ名を受けて少しも辞しなかつたものさへある、是れ即ち希臘思想に固有なる理性が自を信するの心に厚かつたのである、然し之は此学派初期の事で、中頃になると、此聖人てふ理想と實際の人間の有様との懸隔が漸々著しく見えて来て、遂に人間は到底此理想に達する事の出来ぬもの、「ストア」学者でも之に達する事は出来ぬ、古來聖人と云へば必ず其中に数へられたソクラテスでさへも、未だ之に達した者ではないと云ふ事に成つて来た、此思想の変遷には深く注意すべきである、是れ即ち人間の理性が其自を信するの厚きを失いかつたのである、此趣は「ストア」学派の末期即ち羅馬学者の時代になると猶よくわかる「ストア」の学が羅馬に移つて来たのは其学に著しき變化

を起すの源となつた、之は羅馬人が其固有特殊の氣質によつて（成程学理の違では総して希臘人の跡を踏むに過ぎなかつたが）道德的感覚の上に変化を持ち來したからの事である、羅馬の「ストア」学者中錚々（ていとう）の名あるはセネカ、エピクテートス、並マルコスオーレリオスである。

セネカの考へるに、「マ」は此世には、義人で不幸なる者、悪人で幸なる者がある、然し何故斯くある乎、若し宇宙に道があり神があるならば何故斯くあるか、此問は後世の基督教神学に謂ふ神の摂理に関する問題と其精神は同じ事である、然し双方の答の仕様は大いに違がふ、基督教の神学では世には善人で苦しむ者があり、悪人で幸なる者がある、それ故此世では何も結句（つまみ）がつかぬ未来がなくなばならぬ、未来に至つて始めて賞罰が明になると云ふ、セネカの考へるには善人で苦しみ、悪人で幸なるものがあるから、苦楽、幸不幸は全く何でも無い、全く価値のないもの、道を知る人即ち聖賢に取つてはあるものも同じこと、聖賢は外物から離れ退いて我内にある理性の自性を全うするに全力を用ゐる、理性の自性をさへ全うすれば外物の絆（はだし）を脱して内心の自由自在を得る事が出来る、之を得れば何を他に求むる事のあらうか、夫れ吾人の中にある理性は即ち是れ唯我独尊者なり、是れ吾人の中に宿れる神なり、此の如くセネカは希臘固有の理性の自信を保存して居るかと思へば、又一方に於ては人間の孱弱（かよわ）き事、世に在りて悪と戦つて勝つことの覺束なき事、人性には悪に傾く癖（ひがみ）がある事などを繰り返し、申し居る、又そればかりでなく此肉（セネカは吾人の体の事を肉と申した）は心の獄屋であることも云つて居る。

エピクテートスの思想も右陳へたセネカの思想によく似て居る、エピクテートスが道德を論ずるには何の点から始めるかと云へば、先づ人間の孱弱（かよわ）くして神の助（いりよう）なる事から始める、人若し善人とならうと思（まも）らば先づ自分の悪しき事を篤（あつ）と知らねばならぬと申し居る、此様な弱き人間が此世で我意を行は

うとするは大いな間違、万物の往き来るがまに／＼任まかして少しも此方こちらの意を以て逆らはぬがよい、逆らふから種々の煩悩苦勞が起つて来り心の静なる暇ひまがない、来るを迎へ往くを送つて毫も之に執着せねば則ち安心を得、不動心を得ることが出来る、斯く力なげに天命に打任すと云ふ氣味がエビクテートの語には始終見えて居る、其語に、

「汝の身を処するは恰も馳走に招かれたる客の如くせよ、皿は廻まわて汝の許もとに来る、汝手を延ばし礼を正して優美に之を取れ、其去つて他人の許に行く汝之を止めんとする勿れ、其皿未だ汝の許に来らず汝遠くより欲しき目を放つて之をながむる勿れ、その汝に来るを待て、夫れ妻子富貴に対するも亦しかせよ、然らば則ち汝は神々と同じ一の台に就いて食を共にするの品価を得るならん」

と申てある。

「ストア」学派の冠たる、其花たる羅馬帝王マルコス、オーレリオス、アントニノスの学説を前申し陳べたる、セネカ等の学説よりも今少し委しく申上げて「ストア」派末期に属する学者の代表者と致すべし、オーレリオスの考ふるには、哲学は人に安心立命を得させるの道に外ならぬ、哲学は健康すこやかなるもの、為めにあるのではない病めるもの、弱き者の為めにある、哲学を措いては他に安心立命を得るの道はない、オーレリオスが称道する哲学は「ストア」派の学で、其哲学に従へば天地万物は一に帰着し、一の道が天地万物を貫き、吾人人間も矢張り此一なる者に包まれて居る、即ち宋儒の語を仮つて云へば天人一致万物同体、天地人の間に不調和のある筈はない、オーレリオスの語に、

オ、万有よ凡べて汝に宜しきものは我によろし、オ、万有よ汝に取つて時を得たるもの、我に取つて早きに過ぎ又遅きに過くるあるなし、オ、天然たねんよ爾あなたの豊あふなる庫くらより出だすものは我に取つて果を結ばざる

はなし、凡べてのもの汝より来り、汝の中にあり、又汝に帰るなり、と申して有る。

万有には二面あつて理性と物質から成つて居る、丁度吾人に靈魂と身体のある様なもの、万有は理性を靈魂として居る一の活物で、人間は此大活物の一部分、人間の道理心は万有の理性から受けたる朽ち果てざるもの、朽ち果つるは吾人の肉の体、凡べて物質に属するもの、凡べて肉身に属するもの、凡べて此浮世に属するもの此等は一として常住なるはない、皆常に流転する其様は恰も流るゝ水、消えてゆく影に似て皆過ぎ去りゆくあじきなく、あさましきものである、「此身は水の巻く渦に等しく、靈魂は夢や烟の如く生のち命は他郷に宿るに似たり、死後の誉は忘れ果つるに異ならず」と申してある。

夫れ世の中は右申す通りのものじやによつて、凡べて世の事には聖賢は心を置かぬ、全く無頓着、生きるも死ぬるも無頓着である、此世のあさましく、あじきなきを思ひ、又死すてふ事の生あるものに取つて必ず有るべき事、毫も道理に背いた事でなく、死するとても少しも恥る理由のない事を思へば、死も亦我心を動かすには足らず、此オーレリオスが死を何とも思はぬと云ふ感情は、基督教で云ふ喜んで死ぬる、雀躍おどりまでもして天に行くなど云ふ感情とは大に違がつて居る、却つて其如き感情をオーレリオスは非難して、それは只だシブトイからじや、気の狂つて居るからじやと申して居る、基督教で云ふ聖者が歌を謡ひつゝ、喜び勇んで天に昇ると云ふのと、「ストア」派の学者が死生の理を觀して泰然として、従容として死して行くのとは其間に著しき差別がある。

此世の形に属する事は全くつまらぬものであるによつて、聖賢の独り貴ふ所は理性である、此理性を全うするならば万事足れりて他に何も求むる事はない、安心立命の地は此にある、吾人の理性は万有に通貫し

万有を司る、万有の理性の片割吾人の中に宿れる神である、オーレリオスが理性を貴ぶことの至れるは、恰も我と我が中にある神の前に敬しく跪くが如きの感情を有て居た様に思はれる。

倂又オーレリオスが屢々申して居るには、何事を為すにも神を念し、人間の全体と其福祉を念じて為す様にすべしと申して居る、初代の「ストア」学者は凡夫愚人と云へば之を見さげて有るに甲斐なきもの、様に思つて居たが、後の「ストア」学者殊にオーレリオスに至つては大に之と異つて彼等凡夫愚人を見下げはよろしからぬ、憫然に思はねばならぬと云ふ考に成つて居る、次の語を読む時は誰しも基督の語を思ひ出さずには置かぬであらう。

「人己を害ふ者をも愛するは是れ其人の勝れたる処なり、汝しか行はんとならば宜しく次の事を思ふべし、即ち彼等は爾と同類の縁者なる事、彼が罪を作りしは知らず思はずして作りし事、且つ何よりも彼は爾を傷けしにあらざりし事を思ひ出でよ、蓋し彼の為せし事によりて、爾の中の主権者（即ち理性）はそか為めに少しの損害をだも受けざればなり」。

此オーレリオスの語を見れば、其思想のぬきんで、高尚なる事は否まれぬ、其高尚なる事は殆ど基督の教に達して居る処もあると思はれる、然し茲に一つ注意せねばならぬ事は、オーレリオスが己を害ふ者をも愛するの理由として掲けたる事柄には明に基督教的の思想でない処がある、此点に於てはオーレリオスは矢張り純乎たる「ストア」学者に違ひない、何故己を害ふ者をも愛せねばならぬ乎、曰く其者は真実我を害つて居ないから、我が理性を害つて居ないから其者を愛せねばならぬ、夫れ理性の外は我には皆無頓者。其外のを如何にせられうが、我には善くも悪しくもない、理性は如何なる外物も之を傷ける事は出来ぬと。嗚呼是れ理性が放ち得た最高の声ではない乎、其自ら唯我独尊者たるを信するの声ではない乎、噫何

そ其言の壮快なるぞ、然しながら又右の理由に加へてオーレリオスが曰ひしには「我等暫くせば共に死すべければなり、思へ暫くせば共に死して行くものなるを、などで怒りうらむ事のあるべき」と、嗚呼何ぞ此言の夫れ悲哀なるぞ。

見よ、一方に於ては理性の自を信ずるの厚きを揚言しあるかと思へば、又一方に於ては世の墓なく、あさましく、思の仄（ま）ならぬを嘆き、力なげに天命に打任せ之に、安んずるの外に仕方ないと云つてある、是れ「ストア」倫理説の最期（さい）の声である、是れ理性が其昔し持て居た自らを信ずるの心を猶（な）も維持せんとして、而して維持し能はざるの境界に追つたものではない乎。

陳べて茲（こゝ）に到つて見れば、希臘固有の理性的倫理説が其基をゆるげて特に他の方角に向はんとして居る事がわかる、自然的、理性的、美術的、個人的、現世的、貴族的の希臘道德思想が將（ま）に其処を他の思想に譲らんとして居る事がわかる、此変遷の傾を追ひ、希臘の道德思想が猶（な）ほ一步を進めて著しく宗教的又厭世的となるの一段は次回に譲る事と致し、次回に於て本題の最も肝要なる点に立入らうと思ふ。

講演第三回

是迄諸君を伴ふて希臘の道德思想が其の面目を一変せんとして居る処まで参つたが、今夕で此講演を終りと致さうと思ふ、願くは是から希臘の思想が猶（な）更に一巨歩を転ずる処に諸君の注意を仰ぎたいと思ふ。或一つの道德思想を解しえうと思ふには其思想の起り、又行れた当時の社会の有様を知らねばならぬ、此迄は重もに学説の変遷した順序を追つて御話申したのであるが是から直ぐに前回の続きに移る前に、今我等の前に横つて居る問題たる道德思想の変遷があつた当時の社会の状況に少しく目を放つて置きたいと思ふ。

個々の市々まちくが皆自由たもを有ち、皆独立の政府を立て、活発なる政治上の運動をなし、文学技芸から其他万般の事に至るまで、総べて文明の淵源中心であつた希臘は其独立自由を失つてマセドニアの脚下に踏みつけられ次いで羅馬に併吞せられることとなつたが、此希臘の政治上、社会上の変遷はアリストートル以後の希臘の哲学に取つては少々ならぬ影響のあつた事である其時の哲学が主として道徳の学となり、安心立命を求めるとなつたのは大に其社会の有様に原因して居る、即ち希臘人が最も我力を用ゆべき舞台と考へて居た政治の上 (Public life) に最早誇る所なく、頼む所なく、望む所なき様になつたのに原因して居る。彼の羅馬が地中海の沿岸を一面に打平げて無数の国々を其脚下に集める様になつた所から、種々雑多の風俗、習慣、宗教は入り交り、入り乱れて古今未曾有の状態を呈する事となつた、而して此大邦に冠たる羅馬の都は如何なる市府まちであつたかといへば、殖産工業の地ではなく、たゞ四方から吸ひ取めたるものを消費するの地であつた、羅馬政府は只た其首都みやこを肥すために数多の属国から租みせを取り立てる機関に過ぎなかつた様なものである、或人は当時の羅馬市民を評して羅馬に佳よむ者は食はむ者か食まるゝものかの二種に過ぎない、譬へば鳥と屍とのみある野原のほらに似て居ると申したが、之はよく其当時の有様を写した語である、又其時の道徳の有様を如何にぞと云ふに保羅パウロが羅馬書ロマに記して居る処は其社会の写真と云つてよい、

彼等は神の真まことを易かへて偽りとなし、造物主よりも受造物を崇め奉りて之に事つかふ、此によりて神は彼等が恥つべき慾を為すに任せ給へり、其婦女さへも順性の用を變へて逆性の用となす、此の如く男子はまた婦女の順性の用を棄て、互に嗜慾の心を熾もやして男と男と恥づる事をなして、其悖戾たがひに當るべき報ひを己が身に受けたり、彼等心に神を存たもつる事を願はざれば、神も彼等が邪僻よこしまなる心を懷なきて行まじき事を為すにまかせ給へり、諸まべての不義、惡慝あくそと、貪婪どんらん、暴恨を充たす者、又妬忌ねたみ、凶殺、争鬭、詭譎ぎぎ、刻薄こくはくを盈あた

す者、又讒害マニグワイ、毀謗マニグワをなし神を怨むもの、狎侮マニグワ、傲慢、矜夸マニグワ、譏詐マニグワ、父母に不孝、頑梗マニグワ、背約、不情、不慈なる者云々

と申してある、尤も右等の罪悪は何れの世にも多少ある事には相違ないが、殊更に、当時の羅馬社会には種々雑多の不道德が流行したのである、彼の文明を着飾つた当時の羅馬も今申す如く、外は政治の有様から内は道德の有様に至る迄、実の無い腐れたものとなつて居る時代に當つては、心ある人々が此世を厭いやひ、安心立命の地を自然界の外に求め、其地を得んが爲めに自然以上の助を求め様になつたのも、決して異あやまりむべき事ではない、此の如き（心ある人々の）思想と感情とに充されて居るのが即ち希臘最後の哲学である。

希臘最後の哲学思想の成行なりゆきは、一は其思想自己の変遷の然らしむる処、又一は外部からの影響の然らしむる処である、希臘末期の哲学に新ピタゴラス学派と云ふがあつたが、之は其教義をピタゴラスから伝へ来たと信し、ピタゴラスをば其派の始祖本尊と貴び、其教の特殊の点として居る処は成る可く世の快樂を去り、身に纏ふ絆を断つて心を清うすると云ふにある、此学派は遂には希臘哲学の終局なる新プラトール学派に合せられることとなつた、此新プラトール派哲学の組織の成つたは西曆紀元後三世紀の事であるが、是より先き其哲学の先驅とも謂つてよい一の学説がある、それは猶太人マニグワフイーローの学である、其学の趣は先づ一口に申せば猶太教マニグワを希臘哲学で焼き直したと云ふ様なものであつて、此両の者の混和を目的としたのである、又紀元後二世紀の頃には既に基督教内の学者中に、基督教と希臘哲学とを合あはさんと力つとめた者があるが、此等は先づ謂はゞ基督教若しくは猶太教マニグワの方から希臘哲学に近よらふとしたのである、希臘哲学の方から基督教的の思想に近よらうとしたのは即ち前申す新プラトール派の哲学である、此派の哲学は實際外部から

如何程、猶太教的及基督教的の思想に影響されたか判然とはわからぬが、何様幾分かの影響を受たには相違ない、又少しは印度宗教の影響もあつたと云ふ事が出来る、然し其大体の發達に就いて云へば、希臘思想自己の内部の変遷の然らしめたものに相違ない、即ち希臘の思想が上來陳べた變遷の傾を追つて漸々其固有特殊の処を失つて来て、遂には著しく宗教的となつて自然と基督教的の思想に近よつたのである。是れ當時の人心の需要が然らしめたのである、基督敎其者の起つたも思ふに別ではない、矢張り當時の人心の需要の然らしめたのであらう、新プラト一派の哲学は今申す通り、希臘の思想が基督敎の思想に近よつたのであるが、何を云つても起りが希臘哲学、其出処が違ふ故當時にあつては此派の哲学は基督敎に對する最も烈しい敵であつた。

此新プラト一派の学説を組み立てた哲学者は、希臘の学者中最後の大家と云はれるプロティノスである、プロティノスの説に従へば、万有に大原があつて之を神と名ける、此者を何ぞと云ふに、之は何とも形容の出来ざるもの、言説の上にあるもの、人間の理解力を越へて居るもの。己れ動かずして万物を動かし、己れ變せず減せずして万物を生ずるものである、此万物の大原から最初に生れ出でたるは、純全たる思想即ち「ヌウス」であつて、此「ヌウス」は其出でたる元の大原に似て居り、云はゞ其大原の像に造られた者であるけれども、最早や万有の第一者即ち其大極ではない、第二者である、此「ヌウス」は人間の理解力に乗るもの、中で最も高尚なるものである、云はゞ「ヌウス」は永劫吾人に隠れ居る神を顕はすもの、即ち吾人に現れる神と云つてよい、此「ヌウス」から宇宙之靈を生ずる、此宇宙之靈は万物に宿つて万物の働を起し、吾人人間の個々の靈魂も皆此靈に包まれて居る、此宇宙之靈と云ひ、「ヌウス」と云ひ、万有の大原と云ひ、皆感覺以上のものであるが、此感覺以上の法界に對して五官に屬する法界がある、此法界

を成り立たすものは物質。物質は法界の最下等のものであるけれども、丁度光が発して暗きに終る様に、前申す宇宙之靈が発し出で、最下等の物質に終る、夫れ故性質から云へば雲泥の差別があるが、然し物質の生じ出でたる元を云へば即ち矢張り宇宙之靈である、物質は卑しきもの、然し之に宇宙之靈が働く故、此万有即ち此現象の世界には美しき規律と秩序と調和を存して居る、物質は恰も窓紗の如きもの、自らは闇けれども向ふにある光の明かさに其光を遮ぎり兼ねて居る、即ち感覺以上の法界の光が物質を通して此美はしき現象の世界に光り渡つて居る此のプロテューノスの思想は明白に猶未だ希臘固有の美術的思想を保存して居るものである、之を昔の或る基督教的の学者等が悉皆一攫に自然界を卑下したたのに比ふれば、同じく物界を賤しめるとは云ふもの、其間に大に趣を異にして居る処がある。

然しながら（プロテューノスが思ふには）悪の原因は物質にある、夫故吾人が道徳に進むには、先づ第一全く肉身の情慾を抑圧せねばならぬ、成る可く世の快樂を去る様にして、所謂の修業の身となるのが心を潔うする道で有る、プロテューノスは自身肉体を持つて居るをば恥ぢて、我像を画かせなかつたと申す話がある、然し此の如く肉体に属するものを抑圧するは只だ最上の徳に達するの道で、まだ最上の徳とは云へぬ、最上の徳は静に天地万物の大原を觀するにある。此プロテューノスの所見には矢張り希臘特殊の理性的の道徳思想を保存して居ると云つてよい、然し又大に希臘全盛の時代の思想とは異なる所がある、元來希臘人が理性を貴んだのは之を理解の力として貴んだのである、夫故理性を働かすと云へば分別思慮する事であつた、然しプロテューノスが万有の大原を觀すると云ふは理解力を超越したる働、分別思慮の及ばぬ所である、只だ一旦豁然として直覺するより外に道がない、之は仏法で云ふ仏智を開いて言説思慮の境界を脱して居る真如の理を悟ると云ふ所に當る、其如く一旦豁然として万有の大原を觀し得た瞬間には、

思慮なく、分別なく、意識なく、只だ我を忘れて大原の中に一致するより外に何も無い、ポルフィリオスがプロテューノスに師事して居た間に、其師匠プロテューノスは四度右云ふ如き境界に達したと申して居る、此の如く万有の大原に溯つて之に合一するは、是れ吾人の靈魂が物界の絆を離れて其出で来たつた元へ歸るのである、吾人の靈魂は元と形面上の界にあつて、万有の大原を直覺して究竟樂を得て居たのが、今は墮落して此肉體の獄屋に繋がれて居るのである。

茲に至つて觀れば希臘固有の自然的道德説が一変して超自然的と移り來つた事は明である、右陳べたプロテューノスの倫理思想と希臘全盛の時代に固有なる倫理思想とを比べ見る時は、其違は実に明瞭である、人間は天然に具へ居る諸の性能を過不及なく釣合よく優美に働さねばならぬ、之が働を指図するものは吾人の理性である、此理性即ち理解力は吾人に有徳善美の標準を指示し、又其標準に到達するに足る道を示すものであると云ふ希臘特殊の思想とプロテューノスの組立てたる新プラトロー学派の道德思想とを較べ見る時には其違は一目瞭然で有る、プロテューノス以後其弟子の時代となつては右の違は益々著しく成つて來る。

後の新プラトロー派の學者になると、人間が心を清淨にし万有の大原を觀念して究竟樂に入る事は到底人間自身の力では出来ぬ、上からの扶けが入用である、天啓が入用である、人間と神との中保が入用で有ると考へ始めて來た、斯う思想がますます宗教的に成つて來るに従ひ大古の時代から伝來して居ると信ぜられる処々の宗教又聖人の教なども、皆神が時々処々に其旨を示顯したものと思ふ様になつて來た、其示顯は古い程、奥深い程、奇妙不思議な程費いと思ふ様になつて來た、茲に至つては希臘固有の明晰なる論理的の思想即ち漠然とした、ボンヤリとした、奥妙なる事を嫌つて奇麗に、明に、ハッキリとした事を好んだ、

所謂る希臘魂まじひは其固有の趣を失つたものと云はねばならぬ、深遠漠々まじひ隠秘奥妙の処を貴ぶは希臘の思想にはあらで、寧ろ印度思想の反射を見る心地がする、加之新プラトニー派ニウプラトニアンの学まじひに種々の礼拝式、マジナヒ、占術様のものを持ち込み、又種々の通俗宗教の迷信に色々の牽強附会の説明を附けて之を持ち込む様になり、又遂には此派の学が基督教の敵として多神教の辨護者と迄為り果てたる時に到つては、元と吾人の理性を信じ之を独尊者と尊め、之に基いて組み立てた希臘の哲学は壊れ行いて遂に迷信の甚しきものに陥つたと云はねばならぬ、是を見れば、新プラトニー派の哲学は希臘思想が自分自身を超越したると共に、亦自ら破壊したものと云はねばならぬ、是れ即ち希臘哲学の自滅したと云ふものである。

一の物の性質を知らうと思ふならば、其物一ツばかりを見ずにそれと違つた物を照らし合せ、又殊に其違つたものから其物に移り變つて来た順序次第を調べれば猶一層其物の性質を明にする事が出来る。基督教の道德も亦（右の様に）希臘の道德から移り變つて来た順序次第を調べ又其特殊の点を照らし合せて見れば猶一層其性質を明にする事が出来ると思ふ。

希臘固有の思想は自然的であつて、其道德の思想は人の生れつきを其分限に従つて全うすると云ふにある、生れつきが悪じやの、汚れて居るじやのとは思ひもよらぬ事であつた、之とかはつて基督教の入口は生れ更はると云ふ事にある、「人若し新たに生れずは神の国を見ること能はじ」と云つてある、希臘の道德説は知力的、理性的、基督教の道德思想は信仰的、智識道理ではいかぬ、信仰を以て神に接するにより始めて安心立命の地を得る事が出来ると云ふにある、「智者いづくにある、学者いづくにある、此世の論者いづくにある、神は此世の智慧をして愚かならしむるにあらざや」と保羅は此世の知識を擯斥して申して居る。希臘の道德は自力的、自分銘々修める事の出来るもの、基督教の道德は他力的、人間外の力、自然以上の

助、神と人との中保なかだちがなくならぬ、人間自身の力では義しき人となる事は出来ぬと云ふにある。一言に云へば希臘の道德思想は自然的であつて、又其自然的なる処に付き添ふて美術的、個人的、現世的、貴族的なる処がある、基督教の道德は超自然的であつて、又此に付き添ふ神学的、博愛的、超世的、平民的なる処がある。希臘の道德思想は此自然の法界に美しき秩序規律のあるを嘆美し、人間も此美しき自然界の一部分、而かも理性を享うけ得て居る最も貴き者であつて其理性によつて天地万物の理を究め、又吾性を全うし、吾性の求めを満足させる事が出来ると云ふ事を喜び樂しむの心から（希臘の道德思想は）起つたものである、基督教の道德思想は吾人が斯く々々あらねばならぬと思ふ処と、實際吾人がある処とが相合はぬを感じて、如何にかして吾人を絆だして吾人の理想のある処に達せしめぬ障碍物てまひものを切り離して、高く上に昇りたいといふ心から起つたのである、夫故基督教の道德には罪と云ふ觀念が實に明かである、此罪てふ觀念が鋭く明にあるのは、世に教は多くあれど基督教に越ゆるものはない、即ち基督教の道德思想は我等の心が此自然界に圧束されて居る様に感じて此縛束を脱し度いと思ふ心から起つたものである、希臘の道德は之に反して吾人の生れ付なまに具へて居る分限を守り何事にも無理をせず、優美に吾が性能を働かすと云ふ思想に基いて居る、即ち希臘の道德思想は生れつきに与へられたる分限を守ると云ふにありて、基督教の道德思想は此世で生れついた分限を狭く思ふて、之を超越せんと考へる高尚なる心から起つたのである。

今陳べた通り道德思想の大体の性質が違ひ、其精神が異なるから自然個々の徳を掲げるに就いてもまた、基督教で云ふ所と希臘の考で云ふ所とは大に違がふ所がある、希臘で智慧、勇氣、節制と云ふ所を基督教では愛、信仰、望と云ふ。希臘では智慧を諸もろの徳の頭又源と考へ、物の理合、物の真実の有様を知る所か

らして宜しきに称^{かな}ふ行が出来ると云ふ、基督教では愛を語^{ことば}の徳の頭、諸^{もろ}の徳の帯と考へて此愛即ち他人の爲めに己を与へると云ふ一点の衷情がなかつたならば、他の事はあつても無いと同様じやと云ふてある、「仮^{たと}令^とひわれ諸^{もろ}の人の言^{ことば}および天使の言を語るとも、若し愛なくば鳴る銅^{かね}や響く鉞^{ねうばち}の如し、仮^{たと}令^とひ我預言するの能^{ちから}あり、又凡へての奥義と諸^{もろ}の學術に達し、又山を移す程なる諸^{もろ}の信仰ありと雖も、若し愛なくば数ふるに足らぬものなり」とある此保羅の語には如何なる信仰ありとも若し愛なくば数ふるに足らぬものなりと申してあつて、何よりも先づ愛を貴ぶこととなつてある、然し又信仰をも大切なる一の徳としてあつて、人が神に義とせらるゝは只だ信仰と云ふ心の有様を有つて神に接するに由るとも申してある。何様此等の聖書の教は希臘で智慧を最上の徳と見做すとは大なる差別がある、又希臘では勇氣を一の大切なる徳と考へ、又名譽を重じ、自己を重んずる事をも奨励してある、即ち希臘の道徳では自尊心と云ふものが大切なる位地を占めて居る、ソコデ希臘では人から頬を打れてヲメくと黙つて居るなどは卑窟極まつた話、先方の頬を打ちかへしてこそ真に男らしい人間らしいと云ふものである、基督教では何と教へてある乎、おとなしく謙れと教へてあるソコデ英語では Christian Meekness, Christian Humility と云ふ事は殆ど熟語になつて居る、即ち不義をしてはならぬ、不義を受けるはいくら受けてもよい、却つておとなしく受けるのが其不義に打勝つ道だと云ふ考である、又基督教信者に取つては（本統の事をいへば）人間から受ける名譽名聞などは何んでもない筈のものである、希臘では情慾を程よく節するのが一の徳であつたが、基督教では何と教へてある乎、情慾はナンノわるいものじやない、只だ度を過ごすからわるい、度を過ごさぬ様に優美にさへ充たして行けば、是れは却つて人間の一の美德じやなど、云ふ考へは、私は新約書の教ではないといふ、尤も一二の語を引き出して来て之を押しつけて兎や角云ふ事の出来ぬでもなからうが、然し

それで新約書大体の傾がわかると思ふは間違、私は寧ろ約翰ヨハネが云つた「凡そ世にあるもの即ち肉体の慾、眼目の慾、又勢より起る驕傲（まよごころ）、此等は皆父より出づるにあらず、世より出づるものなり」と申しあるのを新約書大体の傾と思ふ、又私は保羅パウロが肉又凡べて肉に属するものと屢々云つて居る事に、或る註解者の様に手ぬるい可もない不可もない様な解釈を下すは保羅パウロの意を得たものでは無いと思ふ、希臘人に取つては此の吾人の目の前に広がつて居る天地万物の理合を研究し、其美はしき秩序と法則を觀するのが最上の樂であつたが基督教（基督教とばかりパット云つてはわるいかも知れぬ、初代の基督教、即ち初めて世に出た時の基督教）には其様な考を見る事は出来ぬ、彼の英語に云ふScientific interestsなるものは、初代の基督教的思想には、若し反対のものでないならば無頓着のものではあつたに相違ない、又其時の有様から考へて見ると無頓着でありそうな筈と思ふ、又無頓着であつたなら却つて當時の人心を深く動すの力があつたと思ふ。希臘人は此世は善いもの、樂しむべきもの、道徳も何もかも現世の社会で、政治の機關を以て満足させる事の出来るものと考え居た、基督教では此世は悪い腐れたもの、此世と此世に属する事は戦かひ行かねばならぬ、此世のものならぬと云ふ処に基督教徒の基督教徒たる処があると、繰返し云つてある、基督の弟子又極く初代の信者は、此罪に染そんだ、腐れた世中は程なく過ぎ去り行くもの、ほどなく基督が再び此世に現れて此世を判さし給ふから今暫じやと思つて此世にながらへて居た跡が見へる、「兄弟よ我之を言はん今より後の時は逼ちぢまれり、蓋は妻を有もてるものは有たざるが如く、哭く者は哭かざるが如く、喜ぶものは喜ばざるが如く、買ふ者は有たざるが如く、此世を用ゐる者は用ゐざるが如くすべき為めなり、夫れこの世の形状は過ぎ逝ありさまくなり」と保羅パウロは申して居る、此等の語ことばを読む時は私にはドウシテモ保羅パウロ又其他極く初代の基督教徒は、此世は腐れた価値の無いもので程なく亡び去るものと考へて居

たとしか思はれぬ。

右陳べた様に希臘道德と基督教道德との特殊の点を相較べ、又殊に希臘道德から基督教道德に移つた思想の順序次第を考へて見ると、此二ツの道德の著しく違がふ一点は、基督教道德の厭世的、希臘道德の樂世的なる所にあることは否まれぬ事実と思ふ、私の思ふに此第十九世紀の思想、即ち彼の所謂る古学の復興以來希臘思想も大に打混じて居る此第十九世紀の思想から、其思想の眼鏡を懸けて或人々が初代の基督教を見て云ふよりも、初代の基督教は實際猶ほ厭世的であつたと云はねばならぬと思ふ、ナンノ世の人としてソウ別の人間の様に思はなくもよい、世の中としてソウ一口にわるく云はなくもよい、ナンノ度を過ぎなくば世の樂も随分尽して行くがよいなどは、之れ純乎たる基督教の考ではない、肉体の慾としてナンノ強ちわるいものじやない、度を過ぎさない様に節してさへ行けばよい、釣合よく、調和よく、人間の天然生れついて持つて居る心と体の性能を發達さして行くがよい、生れついて持つて居るものに悪いものゝあるべき筈はないなどは、此れ寧ろ希臘の思想で基督教の思想じやない、未來、未來とばかり云つてもツマラヌ、宗教はまた此世の宗教じやから、此世で先づ幸に暮せる様にせにやならぬじやないかなどゝは、是れは寧ろ希臘の思想で基督教の思想じやない、基督は人間を心の罪から救ひに御出になつたばかりでない、又体の苦から救ひに御出になつた、夫故先づ人を一番に其肉体の苦痛から救ふが本統の基督教の精神じや、是が基督の精神じやなどゝ云ふは果して基督の精神であるか、私には甚だ疑しい、随分時によつては其等の事を説く必要もないではなからうが、然し基督教の名を假つて説くのは間違つて居ると思ふ、或独逸の名高い神学者が、基督は道德の教師の中では最も難なく、品よく、此世の樂を全うされた御方じやなどゝ云つたのは、実にトツケモナイ話じやと思ふ。或英吉利の政治文学の上で勢力ある評論雜誌に、今の基督教

会の説教には卑屈な所がある、世俗と真向ムキに戦はずして之と和ごうして居る所が見へる、基督教会の説教が世俗的即ちWorldlyになる程、力がなくなつて来ると云ふ意味の語が有つたが、私は此語をして知言の名を為さしめる事を恐れる。

今茲に論じた事は我等今日に於て正直に、マジメに考ふべき事と思ふ、既に実を棄て置きながら名を以てゴカス事のない様にしたと思ふ、然し此等の論はまづ茲で措いて、猶他に我等に接近したる問題に論じ及ぼし、又此迄陳べて来た希臘道德が基督教道德に移るの次第から考へて、何か我日本現今の道德に就いて学ぶべき事はなからう乎、此等の点にも論じ及ぼし度いと思ふけれども、最早時間も大分たつた故に少しの事を陳べて終る事と致さう。

日本現今の道德思想の有様を見るに、基督教の初めて世に起つた時の道德思想とは其趣が頗る違ふ様にはれる、成程西洋の文明が入り来つてから、昔の道德思想は多く壞れ行いて今はたゞ乱脈の有様、然し今日の日本には、昔し基督教が始めて世に起つた時の様に此世界を満足せず、自然界に失望し、自然外力を求め、世間外に安心立命の地を見付えうなど、云ふ思想が冥々の裡に人心を動かしては居ない様に思ふ、寧ろ第十九世紀の文明場裡に走らうと思ふ一念ばかりで、人の心が多くは外に向ひて居て我心の内に向いて居ない様に思はれる、人の思想が総して現世的又自力的である様に見へる。ソコデ今の日本の基督教は其昔し初めて羅馬の社会に現れた時とは頗る違つた境界に接するものと云はねばならぬ、然し又今日日本に渡つて来て居る基督教は、昔し羅馬の社会に現れた頃の基督教ではなくて、千八百年間の經驗を積んで居る第十九世紀の欧米の基督教だと云ふ事も記憶せねばならぬ。基督教の真面目の道德思想を超世的と見て、即ち自然的に反するものと見て、之が我日本従来の道德思想に対する位地は如何なるもの乎と云ふに、

其性質の上から云へば、支那^マ儒教的の道德思想は希臘固有の道德思想に似て自然的理性的であり、仏教の道德思想は頗る新プラト^ラー派の思想に似て居ると云ふ事が出来る、此儒教、仏教、基督教三ツの道德思想は向後如何なる処に衝突し、如何なる処に調和して行くであらう乎、之は将来の歴史に属する事である、今日迄の諸国の道德思想の歴史を見るに、引きクルメテ云へば自然的の思想と超自然的の思想との争と云つてよい、或時は人間自然の力の足らぬ事に失望して自然外の力を求めて、之によつて徳を修める事が出来る^と信して居るが、又或時は此点に疑を起して来て、自然外の力などと云つて居るがツマル処は矢張自分の力で行つて居るのではないかと云ふ疑念を起して、又ズツト自然的の思想に傾いて来る、ソシテ又其考で行いて見てドウシテモよく行かぬ所から、再び超自然的の思想になつて来る、先づ此様な風に道德思想の大勢と云ふものは揺動して行く様に見へる、日本ばかりじゃない、今の西洋の道德にも非常なる動^{うご}きがあり居るので遂にドノ様に動いて行く乎は、中々今から預言は出来難い、然し兎に角超自然的の道德思想のよい代表者たる基督教の道德が、永く世界の道德界の一の巨大なる力であると思ふ、又我日本に取つては此の超自然的の道德思想は一種の需要であつて、其思想が益々活力を以て働いて行くのは実に願はしい事であると思ふ。(完了)

欧米漫遊之話、其一

押川 方義

昨朝此所で談話をなされた本多君は、日本の北地に生れ、私は南海の産でありますれば、生育の地から申すときは、互に親近したる者ではなき様でありますが、其実は然らず、私が往年不図同氏に横浜に邂逅しましてからは、同窓となり、学友となり、又至て親しき友となりました、又私共兩人が基督教を信じた時代も、殆んど同じかりしのみならず、其後日本に該教を布き、国家の隆盛を企謀し、又其期する所の目的に至つても、敢て異なる所がありません。其后私は専ら身を伝道の方に入れ、本多君は布教にも力を尽しつゝ、長く政治社会に奔走して居りました、併し乍ら一日も我國民の幸福を思はざる時とはなく、外には大に我国を富まし我兵を強くし、内には真正なる宗教を尊び、道徳を重じ、又之に敬服する人となしたいと云ふ、心は同じく十年も一日の如く、昔も今も同じ志を抱ひてをります。さて同氏は凡そ二年ばかり以前に米国へ往きました、私は同氏よりは五ヶ月斗りも遅れて日本を發途致しましたが、昨日本多君が此所で在米の所感を演べられしを聞きて、人の思想や感情は、妙なものだと云ふことを思ひました。前申た如く、互に多く相似たる境遇にをりながら、其感ずる所には大に異なるところがあります。私は一体同氏とは長く同じ空気を呼吸し、同じ所に呻吟し、同じ志を懷抱して、殆んど又同時代に外国漫遊と出掛ながら、其所感を異にするところが少なくありません、素本多君は文字もあり、才学もあるから、私とは自然見識も違ふは当然の事であり、されば先夜ナックス氏が、印度の老母の事を話しましたが、(七日夜ナックス氏現世の神学と云へる題を演ぜらるゝに印度の老母太陽に就きて云々の語あり)恰も該老母の考に似ては居らぬかと、自ら顧みて恐怖の念が起きますが、既に此場に立つた上は最早こゝを降る訳にもま

ありませぬ故に、私の欧米漫遊の所感を聊か申述ます、若し私の所感をして諸君を裨益することあらしめば実に僥倖であります。私は私が敬慕する此邦を発足した時は病氣保養の為とは云へ随分大志望を懐いだひて居りましたが、先づ亜米利加国に向て出発せんとて横浜を解かい纜らんして桑港に往く航海中本多君は茫々たる洋海を視て、其際の限りなきに驚き、身の本土を去りて遠きにあるを念ひ、神の大能と自己の小弱なる事を大に感じたと話しました、私の航海日数は僅十八日ばかりでありまして、発着前後の四日間は海上も可なり静穏でありましたが、中十日は暴風雨に出逢ひました、然し此大洋を航海して桑港に往くに、なんとなく長崎にでも往く様な感をもつて居れば、(微笑) 亜米利加は左程遠い国とは思ひませなんだ、渡航中に度々甲板に上つて、洋海の壮大なるを見たときは、自然神の大能を思ひ、自分の微小なることをも感じましたが、心は志望で充滿して居つたからか、一身上の事には敢あて心配もなく、又余り遠あひ所に往くとも、日本を去るのをたいした事とも思はず、又死する事も、生きる事も余り考へはしなかつた(大笑)。かれこれするうち、遂に桑港へ到着して足を其地に上げた時は、感慨交々胸中に群り来りました、其時私は彼国外部の開化は、予想外の事である、米州は実に想ふに優よさつた国柄である、其進歩は格段なるものであると思ひました、西人は兎角日本の現情を評して、日本は世界に比類なき進歩をなし、世界の歴史に前代未発の驚くべき速力を以て開明に進むなど云ふて、平常我等を賞ほめ嘸はずから、之を聞き慣れてをる私共は、しらず／＼日本は中々強盛なる国柄であると、常に自惚おぼして(大笑)居つたが、併し彼の国に往つて見た所が、事々物々実に驚歎すべき物のみである、(大笑) 其時思考するにアングロサクソン人種は懼おそるべきの人種である、我等は此種族と正に競走場裏に出逢つてをる者だ、今日は実に夢想の世にも空像放言の境にもあらず、又権謀虚欺の世界に似たれとも、其実は実践の世界、真力の世界である、我が彼等に對

抗せんに如何なる手段に因るかとの疑問は、胸間に湧出して禁ずる事が出来ませんでした。吁今日のモンゴリアン人種は、彼のコウカシアン人種には劣りし所が夥くして、優る所が少ない、これを如何せば良きや、吁日本も今日の国情では、兎ても安心してはをられぬと思つた、(大拍手大喝采) 兎に角彼等は広大なる事業をする、其身体も強く、其精神も活発で、其富豪なる事は無尽蔵である、且彼等の職業に熱心なるには一驚を喫しました、之はたゞ壮男子ばかりでない、婦人なども達者なる事は、実に驚くに堪へませんでありました、一例を挙げますれば、彼市街を往来する人を見ても、婦人七人に男子三人と申割合であるように見へます、それは男子は各商店や役所や製造場に行き、婦人は家内の仕度をするため、どんな金満家の妻君でも、手籠のようなものを提げて、諸買物などに掛けるのであります、そこでこの婦人が路を歩むのを見ても、其速きこと飛ぶが如くで、我等が負けずに歩めばいつしか全身汗たらけとなります、早く申せば誰一人も手を束ねて坐食するものがないと云ふ様であります、而して我等は此等の人と商買市場に於て競争を始めねはなりません、よし彼等を凌駕するに至らずとも、責めては併行だけでもいいものだが、どうしたら宜ひかと思案に暮れました、此の大問題が解けないものから、暫くは鬱然として樂まず、美麗眼を突き、壯觀心を奪ふと云ふ様な建物も、立派な会堂も、広き街道も、速きケーブルカールも余り面白くなつたから、唯毎日思案のみして居ました。元来自分が日本を発足する前より、従前の神学に就きて、大に不満なる廉あり、又多少自ら考へし所もあつたから、よく之を檢へ、其他社交の事、教育の事、教会の事などに就きても、充分に觀察し又考究する見込でありました、故に私が今般の洋行は、本氣にて云ば、^{マユ}真劍の立合と申場合である、迎ても恍忽としては居られぬと、奮発して志氣を励まし、我が洋行の目的を達せんものと、それからそろ／＼視察に取掛りました。そこで日曜日が参つたから、先づ

一番大きな会堂に往つた所が、満場立錐の地なしと云ふまでに群集し、一同神を讚美し祈祷をなすなどの儀式が始まつて居つた、私は之を為さず、(大笑)聴衆の有様を自在に見る為めに、一番背後の「「アマ」」座に居ました(大笑)其時私の会堂に参つた目的は彼等が此処に集つて如何なる事を為すかを見る為でありました私は頭を上げて手を面部に当て、其指の隙間から伺見ました(大笑)私がかくするも神を敬畏しないのではなく、聴衆を軽蔑したのでもありませんが、第一米国教会の集会の様子が見たかつたからでありますした、(喝采)ところが暑中のことであつたから、団扇を使かつて居るもの(大笑)もあれば、又若輩の人などの中には頓と祈祷などにはかまはぬと見へ、右や左を眺めて居る人が随分沢山あるを見て、可笑ひ感じを起しました、(大笑)又私は不満足の考が勃然起り来り、米国のクリスチャンは斯んなものなら駄目だと思つた、(大笑大拍手大喝采)それから第二第三と続々祈祷があつたが、「ふんらん」忿濼の心と鬱然の氣とに支配せられて、共にやる氣もなかつた、これが所謂基督教国を以て天下に跨称するアメリカ「クリスチャン」の実況であり、又基督教の眞の結果であるならば、粉骨碎身して此新教を日本に輸入するには及ばぬと思ひましたが、然しかゝる事は容易に判定を下すべきものでない、只だ皮相を見て之れか断定を下すは、通常遊歴者の免れ難きことと思ひ、漸く心を沈めて基督教の一個人若くは社会に及ぼせし所の眞正なる結果を看破せんと一層の勇氣を振り起しました。桑港と日本は最も密なる關係を有する所ありて、日本の青年がおほく此地に寄寓して居るから、其模様をも熟察しましたが、是等青年中には各種のものがあつて、中には有為の人物もあり、志氣豪強なる者もあつて、日本を去りし時の志望を達せんに、其法の宜敷を得て居る人もなきにはあらぬと、夫れは至て小数であつて、多くは学資に困り、「やむを得ず」不得止たゞボーイ奉行に身を寄せて居る者が、随分多くあります。これは「あたら」可惜青年を失ふ事であると思ふて歎息しました。彼等はボーイ

となつて、昼間は色々働き仕事をなし、夜間だけ勉強しよふと云ふ趣向だが、人には力の限がある、況んや日本人は肉体が弱ひので、逆でも昼夜間断なく働き続ける事は出来ぬ、其上西洋人の習として、時間を以て備ひ入れた限りは毫も斟酌はない、然るに彼等に使役せられずには居られぬ、若し之を拒めば食はずに居らねばならぬから、否ながらも役事します。そこで初めの半年や一年間位はこれで続くであらうが、遂には学問も出来なくなる、人が境遇を更へるのは大切なる事であれども、学問と云ふものは位置の移転ばかりでは出来ぬもの故、若し此等の人が矢張り日本に居つて此志をもつて修業をしたなら、其成業は期して待つべきであります。かくすれば国家の爲め、後世の爲め大利益ではありませんまいか、学問は我国に居つても随分出来る、彼国に行かねば出来んと云ふ訳はないから、方向も確定せず、学資の準備もなきものは、我国に留つて学問をさせたい（大拍手大喝采）、已に我国で二通りは学問も卒へ、経験も積んだ上、洋行して今日彼等の為す辛苦を嘗る氣象をたもつたなら、何程利益が得られるか、計られぬほどであります。桑港へは日本青年が数限りもなく、年々出掛ますから、此輩の爲めには、其地に居る領事なども、随分骨折らなければならぬと思ひます（拍手喝采）がよく世話をしてくれぬなど云ふて不平を抱ひてをる人に沢山逢ひました。此の港にて日本人への伝道に力を尽し居る教会は「メソヂスト」と「プレスビテリアン」デアル「メソヂスト」、にて先年日本に派遣され布教に熱心であつた、ハリスと云ふ人が切りに働き居れり、我等も此人の世話に成りし、殊に其夫婦は日本好きの人である故、自然日本人を導くには便利である、伝導の点より云へば此等日本の青年を導き、之れを真理にて養ひ上げる事は、一大問題であれば色々の方法もありましよふが、目下の急務は先づ何れの教派にもせよ、爰に一大学校を起して彼等を教育する事を始めさせ度ものと、私は甚だ熱望致します。同港に止まる僅かに二週間ばかり、夫より東方に発

程する事に決した、桑港から新約克(ニューヨーク)に行く鉄道に三大線路がある、本多氏はサウス、ロウドより行かれた、私はセントラル、ロウドの汽車に乗りて旅立致しましたが、夫より日夜ゴーゴの声と共に進む、速力の早き我日本の比ではありませぬ、車中より窓外を眺め見れば、此国土の広漠なる事、言語に尽されず、一天皆邦土とでも云ひたい程で、砂漠やら何やら見分けの付ぬ程でありました、本多氏は途中この茫茫たる原野を見て、日本国土の美麗なる事、富士山の白雪飄(あふたし)たる所山は翠に河は清きと云ふことを想起して、自ら日本国を誇る心が起つたと云はれましたが、私は日本の如き小国で何が出来たものか、苟も国威を海外に張らんには、これが元たる富なくてはならぬ、又莫大なる土地を有することも必用ではないかと思ひました、譬へは日本の国土は優美なるにもせよ、富士山は壯麗なるにせよ、山川は清麗なるにせよ、高の知れた一小島なり、土地の富原には限がある、四千有余万の同胞が此微小なる土に嘯みつき居る様な事は、逆でも大事業をなす見込が立ぬ、宜しく著大なる産業を起し、正理の商売を盛にし、所謂日本魂を振起せんと思ふものは、キリスト教の感化力に由らざれば、到底覺束ないと思ひました。今日は実践の世界、學術の世界、実業の世界、優勝劣敗の世界、金は則ち權利なりと云ふ世界である、(大拍手大喝采) 今日は何威を海外に張り、自由独立を維持し、之を真正なる文化に導き、幸福の国土となさんには、日本を實踐、學術、実業、優等及富有なる国となすより外に道がない(大拍手大喝采) 唯葦原瑞穂国には米が出来るの、日本は天然の景色に富めるだの、或は日本の富士山は絶景なり、琵琶湖は清涼なり、土地は豊饒だなど云ふて、これしきの事に誇つては居られぬ、若し此愛す可き日本を天下の遊覽所とし、骨董店とし、遊戯店として、満足する氣の人はそんな事に誇つて居ても宜いかも知れぬが、私は日本を天下の遊覽所としてはならぬ、(大拍手大喝采) 骨董店としてはならぬと決心致した、(大笑大拍手大喝采) 日本の国運は未だ確

定して居らぬ、これより揖「かじ」の執り様では、山に登るやら巖に撞突するやら、分らんではないか、天然が奇麗な位の事で、満足して居られるものか、天然が奇麗でも、氣候が温和でも、古物が沢山でも、ローマは滅びたではないか、伊太利を以て強盛なりとは云はれぬではないか、(拍手喝采)そこで日本を強大富有の国と成し、実力ある人民と為されば吾等は安んずることは出来ぬ、されば画に描た様な国をもつたとて、決して安心が出来るものか、左甚五郎の彫刻物や、正宗の銘刀でもあるは、なきに優る万々なれども、こんなものがあればとて、実力の世界に立つて競争は出来ぬ、之を誇るは恰もアイノ人「アイノ人」の所謂宝物を尊重すると一般のみ、抱腹の至ではありませぬか。日本も国土を測るときは甚小なり、これに多くの依頼は出来ぬ、たゞあるものは日本人民のみ、若し此民にして実力あらんか、天下の事何事かならざらん、何れの国か懼るゝに足らんと勇氣を鼓して慰「こゝろ」しました。そこで同胞の実況を熟察するに此民は氣力に乏しく、道徳心は薄く、智力も亦大ならず、身体も虚弱、国も貧弱である、これは如何と思索しました、或は云ふ此弱き人を以て彼強き民と對抗せんとするは、恰も幕下「まくご」か劔山に向て角力を試むると等しく、到底望なき事じやと云ふものがありますか、私は彼の小錦は幕下より突進して時々劔山をも投げ得る様になつたではないかと云ふて、励み心を起して矢張之をやりとげる氣である、(大笑大拍手)が其実は日本の文化などは殆ど小供遊「こひごあそび」びのようであつて、天下に冠たりと称譽するアメリカ合衆国の事業など、は、逆でも較へものにはならぬ、これが正直なる云ひ分であります、しかしかゝる邦国と並立し、又之を凌駕しやうと云ふ意氣込であつても、實際そうはいかぬものから、途中何を見ても面白くなく、たゞ鬱然として胸塞り、慷慨心に満て進み行きました。桑港を立ち始めて始めて汽車を下りた場所は、ソルトレーキシチイと申す市街にて、「モルモン」宗の人が多く住ひ居る所であります、その市に付きては敢て御話申す程の事もありませんが、「モ

ルモン」主義の新聞社に行き、該宗教に就きて質問などを致しましたが、此方の質疑に対しては意味なる答辨などを聴きました、（たゞ）假令は多妻主義の事に就きては、キリストも多く妻を有つた、彼の多のマリアの如きは是なりなど申ました、彼等已を耶蘇教の一派なりと自称するとは云へ、基督教としては文明国中に長く跡を存すべきや否やに至つては一問題であります。夫より彼有名なる「モルモン」宗のタパルネークル（會堂）などを見物したが、中々壮大なる建物であります、該宗を奉ずる人の中には、富豪家が沢山ありと云ふ事であり、而してアメリカの如き女権を拡張する国柄でありながら、何故此処では一夫多妻の道が容易く行はれるかと云ふに、多くは金満家で該宗の人が欧州辺に行きて、自分の「モルモン」宗なる事を自白せず、婦女を誘ひ歸りて妻とする、そこで婦人もきて見て其状況に驚けども、歸るには金はなく、最早仕方ないと云ふて堪忍する、云はゞ哭き寢入と云ふ容であるとの事であります。それよりこの地を立ちタンヴェルと云ふ市にも行いた、（おとも）其市街は彼の有名なる金鉱の爲め建た村であつて富盛である、又壯觀美麗なる會堂なども沢山ありました、夫より旅行して遂に彼の名高きチカゴに着しました、此市街は極めて繁盛である其道路も広く、家屋も華美壮大である、又天下より各種族の人が輻輳するから、善惡共に中々盛んに行はれをる、其為す所も千種万別であるが、事業に熱心なる事に至ては、皆一徹である、又會堂も沢山あつて、此市街ばかりにも其数四百七十ヶ所もある、是等は皆日本にあるものとはちがつて、粧飾配置尽く宜しきを得、実に壯麗を極め、高塔は雲間に聳へ、尖頂は青空を突くが如き觀ありて、耳目を驚かす可き壯觀であります、先づ是等の話は止めて、二三の神学校を見物したことを御話申上ます、私が或る神学校へ往いて先づ教場（まへ）に入て見たら、丁度試験中であつて、其試験の模様や質問のケ条などを聞きましたが、原罪の事やゴブルメンタルテオリーの事などを大略問答して居たが、其模様を見て恐愕いたし

ました、夫より書室に入つたがこれは古本屋に這入込んだかと思ふやうでござりました（大笑）夫より段々と外を巡視するに及んで少しは鬱を払ふことを得ましたが、大体神学校の模様には失望致しました、其后該市街には三四回も来り、いろいろ探究して其地の繁盛なる事、又教育慈善の事も思ひに勝りて行届き居るを見て、驚歎いたしました、其地には博奕ぼくちの為に建たる壯觀なる家もあれども又慈善に係る建物も数限りもない程多くあります、私の滞在中に一日ファウンドリングハウスと云ふ、捨子を拾ひ養育する救児院に参りて其様子を見ましまが感心にベビーをよく世話して居りました、其所には曾て横浜二百十二番女学校を卒業して其后シカゴ府に行き、該地の医学校を卒業した石川某と云ふ姉妹も居りて、是れは実験の爲め其救児院に雇はれ世話を致し居りました、其地を立てからミチガンのアナバルアナバルに往いた、該地の大学校には十七名の日本人が居る、是等の人に逢つて話なども致し、又該地には曾て旧藩の頃熊本学校の教師たりし、彼の有名なるカプテンゼンス氏の住居ありたれば、同氏を尋ねました、丁度横井氏が同伴であつた故同氏と親しく交るには至て好都合であつた、同氏は我等兩人を厚遇マユしてくれました、同氏を評する人に二者の別があります、一種の人は彼を人物と云ひ豪傑だと申します、又一種の者は之に反して彼は非を飾る惡漢物とて非難します、私は同氏と共にある間に、充分注意して其人品性格を伺ひ知らん事を勉め、敢て多言をなさず、其教を聴き、其行を見ました、日本人は往々西洋人を評して曰ふ、西人は妻に厚くして親に薄し、仮令たとへば一人の男あり、親と妻とを伴なつて馬車に乗り他行せんとするに先づ妻を車に乗せ、の后ち親を乗らしむるなど、何事に依らず妻を先きにし親を后のちにする之れ孝道に背くなり、外国人中にはかゝることをする人のあることを見受けた事は屢々あり、又かく崇妻主義の人も沢山なるが、在米中には誠に歎賞すべき程孝道を嚴守する人々にも度々出逢ひました、其一例はゼンス氏である、同氏は今は妻

なけれども三名の令嬢と二名の令息と一名の老母がある、其子を教育するに熱心なる事、其母に孝順なる事は我等の善き模範とする程であつて、常に曰く慈母（実母にあらぬ父君の後妻なり）の心を慰むる事に意を注いで居りましたと、其他多の実例は枚挙するに暇なきほどであります、総して耶蘇教は孝道を廢するなど云ふは大間違で、反て之れを奨励すると云ふことが事実であります、又同氏は日本鼻負の人であり、米國に在りながらも日本の文化を補助し、此民の裨益となる事を謀つて居る様に見えました、己が曾て教育に骨を折つた所謂熊本連などには、屢々信書の往復などをなし助力をして居る由であります、然し日本鼻負じやと云ふても日本を妄信すると云ふ人でもなく、又これに誦ふでもない、たゞ良き所は良いと云ひ、悪しき所は悪ひと云ふて青年が将来の方針を誤まらぬ様にと注意し、特に日本将来のキリスト教に付て忠告などをする時に満腔の精神を注いで之を為しくれる人であると思ひました、我國益となる事はよく胸襟を打開きて話し呉れる、其厚情には実に感服した、其人品性格等に就きては敢て評論する必用がありませんが、同氏は精神豪強、意志堅確、俗に所謂キカナイと云ふ人であつて、一個の偉丈夫たる事は誰れも其人と交つた者には等しく感擲するところでありませう、夫より該地を去り、ペンセルベンヤ州の方に旅行を進めたが途中有名なるナイヤガラナイヤガラの瀑布を見物したこれは名に負ふ世界第一の瀑布なれば壯觀でありました。是迄は横井氏と同道であつたが途中より分れ同氏は新約克ニューヨークに向け小生はハリスボルグに行きました、該府はゼルマン、リホムド教会の外国伝道会社の本局あり、又会計ケルカルと云ふ人が居りました、彼は意志堅確にして忠実老練なるキリスト信者であり、殊に日本伝道の事は熱心に之を思ふ人でありました、私より兼て着府の時刻を通知し致し置きし故、朝早くわざ／＼ステイションまで出迎へ、夫より家に伴ひ、又種々の談話のすゑ、同会社の書記バルソロミユと云ふ人の招待を受け、暫く同氏の宅に滞在

する事に決しました、両氏とも至て親切なる人でありて、私の為めには幸福でありました。合衆国では文物の隆盛は重に東方にある故、是より長く東方に滞り、物事の觀察に心志を委ねんと決しました、夫よりは小中の学校は申すに及ばず、大学教師範学校などにも度々出掛けて其様子を視察致しました、若し之が穴探をする気ならば不審な廉もあり、又非難すべき事も随分沢山ありますが、概して申せば浦山敷き有様が多くござります、就中諸学校教員に（大学を除き）多くの婦人が加はり居る事であり、彼れ女教員等が随分高等なる科程の教授を負担し居つて、二十歳から二十五歳前後の青年書生を「ブツ」とも云はさずよく統御し、又能く教授す而して書生も之れ等女教員によく服従して居る有様は、我等日本人の眼には奇観でござりました。一体米国合衆国では特別に尊女の風が流行してあるから、此等女教師を輕蔑せられぬも亦道理ではあるが、又彼等女教師が教授の任に堪へる学力才智を有するからであると思ひます、これだから米国婦人の頭角の高くして大きくなるも理由なきことではありません、かゝる事情あるにも係はらず、米国の婦人は吾等が予想せしより却て謙遜なるには驚歎しました、日本にもかゝる婦人を多く見たい、たゞ頑堅なる頸丈けは之を除きて、（大笑）かゝる才学力量兼備の婦人が多くある様にならねば逆でも日本の眞の文明は望まれませぬ。又米国では在校の青年が課業時間の外はすばらしく遊びます、教場を出で、駆け廻る、（大笑）日本青年は多くは坐して理屈を云ふが、余り運動などを好まぬ様だから足が短かいが米人は実に長い（大笑大拍手大喝采）之が彼国人の身長の高き原因である、之は学理的に研究した理屈話しでない、私の考へだ、（大笑）然し古来より世界の歴史に著れた俊傑中に身長が沢山ある、之れは座つた結果だと前提を定めた、そこで「コンクルウジョン」を為して日本人は座るから丈が短ひ、丈が短ひから俊傑である（大笑大喝采）と定めた、之れが在米中最深く私を慰めた事件であつた、（大笑）夫か

ら日本はゑらひ国だ末頼母しき人民だと云ふことを考へ起した、(大笑大拍手大喝采) なに彼等碧眼奴等に負けるものかと云ふ氣になつた、(大笑大拍手大喝采) 其から意氣揚々たり、(大拍手大喝采)。又役人と人との間にも誠に隔離がない、上下の其情はよく互に貫通して居る、私は上下と云ふたが彼等は上下とは思ふまい、其証拠には一寸郵便局へ金円を受取に行きても其模様が知れる、役人どもが日本の様に決して威張てはをらぬ、(大笑) 日本では小役人が威張るばかりでなく渡すのも遅ひ、(拍手喝采) 新約克の様な繁忙な郵便局でも親切にして、大概書留をなすにも一二分間よりはまたさぬ、然し日本の郵便の組織は中々優れたものじや、威張る事を止めてもつと新切に又早く仕事が出来様になつたら更によいであらう、かく事業を早く又立派にする事は、文明開化の結果でもあるが又原因ともなると思はれます(大拍手大喝采)。又「ステイション」にいて見ても、田舎の「ステイション」などでは、切符を売る人も荷物を取扱ふ人も同じ人が為して居る事は度々見受た位で、全体小數の人をもて夥多の仕事^{かた}を為す仕組になつてをる、そこで不取扱^{ふとりあつかひ}で旅人が迷惑するかと云へば決して然ることなし、彼等は己が職務を励んで出精する故仕事にも慣れ、又可成早くする慣習を養成して居るから、驚く可き程旅人には便利である其上甚だ叮嚀であり、(聴衆大笑大喝采大拍手) 前の様に申せば米國は此上もなき国柄の様に見へますが、中々悪漢物も沢山居ります、かゝる悪漢物は我等東洋の黄色人の目には反て欧米の「ゼントルメン」や「レイ」の目に見へるよりもよく顯れるかと思ひます、其理由は彼等の我等に向つては遠慮会釈なく平素を表はすからである、私は数ヶ月間各州を巡遊する為めに単独旅行を致しましたが、「ステイション」を下ると、屢々人足体の者がからかつてチャイナメンなど云ひますので、誠に五月蠅もあり小腹も立ち、彼れ野蛮奴なにを云ふかとは思へどめつたな事を英語などでしやべると反て馬鹿にする故、そこで言妙の神國に生れた特權を

担ぎ出し、日本語を以て「べらぼうめ糞でも喰へ」と云ふて威張^{マエ}でやると、(大笑大拍手喝采) 閉口して不思議がつてこいつ羅典語を遣つた、(大笑大拍手喝采) こりや大変な学者であると思つたであつたらう、そこで益々威張^{マエ}て肩で風を切て、(大笑大拍手喝采) 之れ見よと云はぬばかりに、緩々^{かんかん}と歩んだは氣味がよかつた、(大笑)。東西両洋人の位置を見る時は彼は富み、是は貧しく、かれは有力これは無力、何んとなく優劣の感がある、日本などに來り居る西洋人でも彼を雇役し居る者は政府か若くはある会社の外に私にはとんとなき程の有様であるが、東洋人^{マヤ}が彼に役せられ居る者甚だ多くある、そこで識らず／＼の中に彼を役する事などは殆ど絶望の感あらしめて居たが、こんど合衆國にて旅行中白人で靴磨きをして居る者を見て、これ屈強と始めて靴を磨かせてやつた時は、中々愉快な感じを起しました、(大笑大拍手喝采) 靴磨き代は通常五錢なるに或る所で悪ひ奴に出逢て十錢ねだられた、そこで中々無法の金は一文も取らさぬ氣であつたけれども、到底腕力に訴へられる時は迎ても微力の私には打ち勝つべきとも思はれず、若し又負けたならば日本国の大恥辱と思つたから(大笑) 十錢与へた(聴衆大笑) 併し此の靴(足に穿^はてる靴を示しつゝ)を磨かしたのは我が國の名譽ではありませぬか、(聴衆大笑大拍手喝采) これからあとの話に私が前に一寸申し上た如く、アメリカに來つた目的を達せんものと、此所に思ひを凝しましたことを、聊か申上ます、先づ第一に神学及神学校に就きて研究し度事あり、又教会内部の真情を洞察し度望みがありまして、是はたゞ一個の爲めばかりでなく、眞実我が日本の利益だと云ふ事を造次^{アウジ}にも忘却しません、彼が如き事々物々繁盛を極めた國を見て、なんと愛國の熱情を燃さずに居られましようか、そこで愚考しまするに、キリスト教も猛進して已に我國に入れり、是れより將に同胞中の多数の有力者を專領するは、鏡に掛けて見るが如きである、又自分も是が布教に心身を委ねて居る者だか、是迄我が信奉して居る信条は果し

て真にして誤なきか、若し明確に信奉する事の出来ざる者は之を執らざるの勝れるに若かずと思ひました。又次にキリスト教と云ふものは如何なる真結果を生ずるものであろうか、之れまでは自分の心中に感銘して居る証拠の外、社会上に波及する其感化力に至ては、たゞ人の話を聞き、又書籍に就きて見し迄である、日本にキリスト教が来りてより日もまだ浅き故に、何も著しき結果とては見えない、まだ花も咲かねば、ましてや果実の結ぶ筈もないが、欧米各国は已に此教の勢力の有無を試験し結果の如何を見るに、十分なる年月と事情をもち、且つ適當なる地位に立ち居ること故之れを視察するには屈強なる国柄であると思ひました。私は素キリスト教を理想的完全の唯一宗教と見る斗でなく、實際的宗教を信じ、此教は一個人を高尚にし、又国家と社会を高潔にするものじやと満腔の精神を以て信仰して居る故に、途中処々の教会や集り場の有様を見た所より、皮相の見解を下す時は、丸で世俗的の信者と仮定したもので、大に失望した、そこで思ふに彼れ等は丸でキリスト時代のユダヤ国の如く、彼のパリサイ宗派の再出したもので、実に有名無実なる信者であると思つた、(大笑) 丁度真宗信者の阿彌陀仏を念ずるが如く僧俗ともに慣習風俗に依つて教を奉ずるのみ、其用はたゞ祭婚葬祭の爲めと云ふ様な方便主義のものとなつてはをらぬか、(大笑) 若しキリスト教の力が僅か阿彌陀教の力位ならば、敢てこれを信奉するにも足らず、又骨折てこれを国内に布き弘むるにも及ばぬと思つたが、前にも申した通り斯る大事を容易に断定する筈でない、ホトトギス 眞実 謬なき実景を明かにしなければならん、これ神と人と国とに對しての責任だと思ひました。彼是して居る内亜米利加社会の模様も追々判り、又基督教の勢力の社会に及ぼし居る所もヤ、知れ来り、大に愉快を感じました。夫より日本伝道の事に就て平生思考して居つた事あれば機会を得て当局者に此事を述べ、又其方案を示し度きものと考へ居りました、我等が血涙を注ひて愛慕する、此日本国は誰人の爲めにも之を犠牲に

供する事は出来ぬと思案する中、幸にして外国伝道会社の臨時集会有りまして、日本伝道の様子を告げ、又伝道に就き良き方案あらば集会の前で語り呉れとの招待を受けました故、喜んで之を承諾し其日の来るを待て、此集会に臨みましたら、多くの「ゼントルメン」がつて一場の咄を許しました、夫から演説を終るや否種々なる質問を受けました、其質問中に日本伝道の為めに向後も尚多くの宣教師を派遣せしむ可きや否やとの問がありました、私は最早学校教授の外には別に多の宣教師は必用でないと申ました、(日本語を見事に話し日本人に同情同感の「センチメント」を有し居る人は格別)若し又派遣せしむる時は多数の尋常人より、少数の才学ある人を要す、そうなくば日本では差したる仕事もないから自然遊歩でもするの外はない、宣教師には二者の別あり、一は伝道に熱心な人で此種の人は大に難艱に堪へ、己に克ちて働くが、其他は冷淡な人で是れは本国を離れ居る故、己れはとんと無責任の様な容であつて、これぞと云ふ仕事もない宣教師にして、常にあまり働かず、ぶら／＼して居る、斯ては伝道の助けにならぬ斗りでなく、反て日本伝道の障礙(てまがひ)となる、又是からは伝道の方針は大に變じて、更に良法を選定しなければ日本伝道は失敗するかも知れぬと云ふ趣意を以て咄しました、(大拍手大喝采)そこで此演説や問答の事が新聞に載せられた所が、之を読んだ人の中には、たま／＼感服した人もあつたが、又大に不平を抱く人も起り、手紙などを以て私の説を非難し、貴君は日本には最早伝道師は必用でないと云ふたぞふだ、そう云ふ事を云ふならば此教会の有力社会からは「ウエルカム」とは申ませぬぞ、斯る事を此亜米利加に來りて云ふは君の為めには甚だ気の毒千万であるなど申越しました、(大笑)此手紙を見て私の思ふには是は奇怪な事を云ふものかな、亜米利加は天下に名高き言論自由の国じやと云ひながら何ぞ計らん斯くの如き事を云ふとは、我が曾て述べし事は我が心中真と信ずる所である、若し此論が謬りだと思へば、捨て、問はずに済むもの

を、取捨は彼の権内にあるものを何ぞ斯の如く窮屈なるか、若し云ふ如く世界最大の国なる此広きアメリカに我が足を止むる所なくば我は直に帰るべし、我は日本人にして我か愛慕する国は日本なればなりと決心し其事を申遣し、模様によつては直ちに汽船に投じ帰へる決心でありました、今度も真理の爲め我国の爲め利益と認むる所を主張するが己れの責任だと決心して居つたから、何も恐ろしくもなければこはくもなかつた、其上万一の事を懼れて兼てより用意し置きたる兼て用意の金円がこゝにあつたから、(自ら懐を叩きつゝ) 大丈夫 (聴衆大笑しつゝ、大拍手大喝采)、若し不得止事不得止事あらばこれをもて帰途に就く可しと勇氣に充て居た、(聴衆大笑大拍手大喝采) その後は何事も申越すものなく至て閑を得たから、英語の研究に骨折りました、我等が英米の間にあつて英語でよく会話をする事が出来ずば何も判らん、況んや己が意見などを主張する事が出来るものか、丸で人も相手にして呉れぬ、そこで彼国に居て物事を視察したり、意見を述べたりしようとするれば、話丈けは不自由なく出来るが誠に緊要であります、そうでなくば聾マウーと啞マウーが事をき、咄をしに出掛けるようなものである、日本人中には英語の一字も知らぬ者が、よく欧米社会の実況を視察しに出掛ますか、大概は金の使ひ損でありましよう、猫も杓子も欧米を漫遊したとて何の役にたつものか。当時閑暇に苦しみ居る処から、幸ひにムーデ氏より米国大学校夏期学校へ招待を受けたから、直ちに之を承諾して行きましたが、同氏の学校は極めて盛大なる集りであつて、合衆国各大学校より有志が集るのみならず、英蘇独逸等からも来つて居た、ムーデ氏の神学上の意見は兎も角も宗教界の一俊傑たる事は相違ない同氏は我等日本人に対して大に親切を尽した、又氏が他人に及ぼす勢力に至つては顕著にして驚歎する程である、該校には多く日本人もあつて色々裨益を得ました、夫より后私も多くの教会から招待を愛くる様になり、又「ゼルマン、リフオムド」教会外国伝道会社より当時開設してある各大会に臨席

する様にとの依頼をも受けし故、多くの州郡を巡視し、且つ持論を主張するの機会を得ました、各大会も教会もよく迎接し、皆欣んで日本の現況や、伝道の方案などを述ぶるを聞いて呉れました、かゝる事状に遭逢したから、兼ての目的を達するには、最も良き機会を得ました、又社会全体に及ぼし居る基督教勢力の有無を篤くと伺ふ事が出来ました、初め多くは私を目して「アンチミツシヨナリスピリット」を有するものと推測しましたが、之れは大なる誤解であります、初は私も誠に西洋人嫌ひであつて、横浜に居る外人を見る時は、腰間の秋水を以て之を斫らふと思つた者であります、（聴衆大笑大拍手大喝采）又攘夷論者の一人であつて何とかして夷狄を此神国から逐ひ払つてやりたいものと思つた、（大笑大拍手大喝采）併し乍ら略真理を解し、キリストの教を奉するようになった以来は、少しも西洋人が嫌ひでないが、彼等が無法に威張つて我が日本を軽蔑する様な事あるを見る時は、胸も張り裂ける如き怒氣を生ずれば、何も斟酌する事は出来ぬが、西洋人が敵じやと思ふ時は少もない、人はそんな少なな度量では困る、基督教の徳に由り、彼我共に同じく神の子であると云ふ事がよく判つた、（大拍手大喝采）其後は敢て狭隘なる心や、区々たる感情に制せらるゝ事なく、唯真と愛とを以て凡ての人と交る事を了解してをる、が私は自分の事は彼等の評に任せて置き嫌とするも否とするも我はたゞ信ずる所を述べ執るところを行へば、夫にて足ることござります。終りに臨んで基督教が社会に及ぼす勢力に就きて一言致します、滞在中は色々なる位置の人と交際を結ぶ便利を得て、医者とも官吏とも商人とも百姓とも製造人とも学者とも牧師とも代言人とも銀行者とも日雇稼する人とも男とも女とも其他各種の人と親しく相交るを得ました、故に彼等は如何にキリスト教に影響せられ、又何等の力に動かされ居るかと云ふこと、又何を以て最大の幸福とし、又義務の重なるものとして居るかと云ふ事を知らんと、心を之れが視察に用ひましたが、彼等が基督教の勢力に感化せ

られて居る事は、中々驚歎すべき程であります、勿論彼等が其感化力を蒙つて居ると云ふもそれは真実なる信者の事を云ふので、有名無実の人も夥しくある。又祈祷や集会の有様は日本の仕方とは種々なる事に於て異なる所がありますから之れを日本の流儀を以て批評する時は非難すべき廉も沢山あるが、たゞ見る所は「センチメント」の如何にあります、また之れが視察を誤らぬ様にするは、甚だ六ヶ敷（ござりま）ですが、兎に角キリストの力が彼等を制し、慰め又励まし居る事は、逆でも形容して咄し難き程であります、かく位置から見ても、職業から見ても、又教育から見ても風習から見ても、大層違つて居る人々を夫々に感化し、正直なる人、真理を求むる人、謙遜にして神を畏敬する人、又人に対して信義を尽す人、豪強にして事業を盛にする人、品行方正なる人となして居ります若しキリスト教が果して能くかく人を感化することを得ば、これキリスト教の真理なる所以にして敬（まう）すへき所であります、実にキリストは活きて信者の心中に働き居る事が見られる、然し之れも見様次第であるから、真理が知りたくば公平無私なるべく、誠心誠意なるべく、又事状の利害と事物の真偽とをよく判別し得る判断力が随分入用であります、そこで私はキリスト教国の「ソサイティ」中にも云ふに恥（は）づ可き害悪の全滅せざるものが多くあるにもせよ、該教は哲學上の考究より基督教の真理の完美なるより推して此教を真理と為すのみならず、社会に家族に一個人に及ぼす所の結果の生せるを見て、其教の勢力功用をも確（ま）く信（ま）じて疑（ま）ひません、尚御話申度事なきにあらねど時なければ今日は之れで止めます。（大拍手大喝采）

聴押川氏欧米漫遊之話述所感

海老名 彈正

今朝はノックス氏と私と説教致します是は私の願であつて、押川校長にわざと頼ました、其訳は彼は亜米利加の人で、私は日本のもの、彼は白哲人種で、私は黄色人種、彼は一致教派で、私は先づ組合教派、其上彼れの神学説は私のと定めて違つて居る所があらうと思ひますからです、斯く其国も其人種も其教会も又其神学の意見も同からざれども、主イエス、キリストの恩恵を蒙れば、心を同ふし力を合せて神の国に従事することに障碍なきことを承知します、故に爾後益この恩恵を蒙らんが為め、殊更にノックス氏と偕トに立て説教したいのです。

却説聖書に基く其題は、人を造りし者の像に循ひて、智識に至る新人に至ては、ギリシヤ人とユダヤ人、或は割礼ある者と割礼なき者、或は夷狄或はスクテヤ人、或は奴隸或は自主の別なし、夫れキリストは万物の上に在り、また万物の中にあり、抑も我等は御同様に倭魂ある父母より生れ、倭魂を以て育てられたれば、我等の心中には自ら外国人であるならば、何処の人の別なく深き理由のあることなしに、唯外国人と云ふ所からして怪有の情感を惹起す者である、支那人や印度人の如き、我等と同等の人民を見れば、自然と之を卑しめる氣風がある、また我等より優つた米国人や欧州人の如き外国人を見れば、何となく不快を懷いだき不平を鳴らし、彼等を惡にくみ怨む様な氣風をもつてゐる、又之と同じ訳で心が極めて狭い、異説を持つてゐる人とはどうしても親しく交ることが出来ない、直に彼を異端視する狭き根情がある、併し主キリストの恩恵を蒙れば必ずこの狹隘の根情が薄らぎます、固まことより一朝一夕では六ヶ敷けれども、精神を込めて修業を加れば、五年十年の後には必ずこの偏僻を脱すること疑はありませぬ。

ペテロ、ヨハネ、パウロの如きは、孰れもと斯う云ふ狹隘なる偏僻ある性質を持てゐました、彼等はへブル人より生れたるへブル人です、ユダヤ人と異邦人との中が大に悪るかつたことは、東西両洋の歴史を讀む者の明に知る所です、ユダヤ人は心底から異邦人を賤しめ、又嫌ひました、又ユダヤ人は万国民に悪まれ者となりました、彼等は交際をしなかつた、彼等の間には山よりも高き海よりも深き隔てがありました、ユダヤ人が基本国より移されて遠くバビロンに至り、ユウフレチスの河辺に苦役せられたる時、空しく西天を眺め、シオン山を思ひ起して、如何なる歌を詠しましたか、バビロン城を打ち滅す者は福なり、其嬰兒を岩上に投うつ者は福なりと謡ひました、ペテロ、ヨハネ、パウロ等は此歌を愛吟したユダヤ人の子孫です、彼等の母達は此の歌を吟しつゝ、懷孕致しました。我子こそ此永久の怨恨を晴らす丈夫なれと、勇んで分娩の勞を忘れました、彼等は幼少の折から此恨の歌を吟詠しつゝ、生長しました、怨み骨髓にしみこめりとは実にユダヤ人の異邦人に対する感情です、このユダヤ人が一度キリストの精神に感化せらるゝや、如何様になりましたか、彼等は実にキリストに由て全く生れ變つたではありませぬか、彼等は最早へブル人でない、キリストの僕である、最早ユダヤ人でない、世界の人間である、其隣人は独り同胞兄弟でない、天下の人類である、ギリシヤ人であれ、スクテヤ人であれ、或は割礼ある者、或は割礼なき者、或は羅馬人、或はユダヤ人の區別更まにありませぬ。

羅馬人が其驚の旗をエルサレム城に翻し、エホバの神殿を汚して意氣揚々たる風情をパウロもペテロも目撃しなかつたであらふか、残酷にも羅馬人に屠られたる、ユダヤの愛国者の鮮血淋漓たる惨状を目撃しなかつたであらふか、苛酷なる羅馬の税吏に血も汗も絞られたる菜色の同胞兄弟を目撃しなかつたであらふか、道路に餓へ死して居る人民を見なかつたであらふか、彼等の同郷人竹馬の友には、刀劍蔓々猛火焰々

の間に於て、城を枕として打死にしたる殉国の士少からず、パウロ、ペテロ豈に人情なからんや、我も人なり、我等も爾曹（なんじら）と同情を持つ所の人なりと云ふたではありませぬか、然るにキリストに在て如何なる生涯を送りましたか、我か切に願ふ所は羅馬に往て主の福音を其都人に伝ふことなりと云ました、彼等は我の敵、明友の敵、同郷の敵、国の敵親の敵、先祖の敵である羅馬人を祝し、之に無上の幸福を分ち与んとて思ひ焦れた、此福を伝ふる責任を感じては、我は彼等に負る所ありとまで云ました、ペテロやパウロが羅馬の都城を慕へること、エルサレム城に異ならず、其カピトリン山を恋ひ慕ふこと、シオン山を恋ひ慕ふにちつとも変りはありませぬ、キリストに在ては羅馬人やユダヤ人、ギリシヤ人やスクテヤ人何ぞ扱はん一視同仁であります、白哲人種であれ、黒色人種であれ、黄色人種であれ、赤色人種であれ、更に隔はない、我等が信仰の宇内（うない）には、我等が望の世界には、又我等が賜はりたる愛の天国には、人種も、教派も、国々の差別も、貴賤も、貧富も、何も彼も悉皆溶解して一生同体となります。

私は他人の欠点を挙るを好まぬ、乍去是を是とし、非を非とするはキリスト信者の本分なれば一言せざるを得ざることがある。日本人は外国人を見るに兎角偏頗（へんぱ）の考の起るが、外国人も亦大に偏頗（へんぱ）の情を持てゐる、視給へ、欧米に許多の伝道会社がある、夥多（た）の宣教師を海外の異教国に派遣する、この宣教師にして未だ其生来の偏僻（へんぱく）がぬけない、キリストの宣教師でありながら、余は亜米利加人である、余は英吉利人である、余は日耳曼人（にやーマン）であると、其国々の使者らしき心地がすると見へる、キリストの僕であるのに、其会社々々の手代根情（ねじやう）があると見へる、主の本旨を忘れたものゝ様です、余はキリストの僕、余はキリストの使者であると考ない、夫れだから自国の風俗までを宣教さきへ輸入したい気色がある、政治家ならば、常人ならば、少しは周捨も出来なければども、宣教師たるもの一向に天国を目前に置くべき筈のものが、其

国々の鼻負ひいきをなして肝腎要のキリストに着眼せざるはなんでしよう、凡そキリストの僕たる者信者たるものは、宜く専ら神の国を思ひ、キリストを慕ふ筈です、人々が自国を重じて其体面を飾らんとするはさまで悪ひことではないが、神の国と其義に活眼を注ぎて万事万物を見ざる時には、偏頗へんぱんに陥る恐がある。凡て宗教を学ぶもの、真理を探究する者は、キリスト魂を持ねばならぬ、若しそれ真理ならば何国の人が持て参らふが、誰が発見しようが、喜んで其真理を貰ふ筈である、凡そ世界に普及する真理は我明鏡の真理である、仏者も儒者も真理を探究して居ると云ふが、果して真に真理を探究して居るや訝し、宇内うないの真理を探す者があれば外教だなどと罵ののしすしく言触ごんぶす筈はない、是れ円満なる真理の月を觀するに非ずして箇々なる蛍の光を見るものである。是は眞の哲学者でもなく、又眞の宗教家でもありません、白哲人種が持たるも、黒色人種が持たるも、真理は即ち真理である、何ぞ持ち人によりて真理の価を上下せんや、王公貴人の持てるも瓦は即ち瓦である、穢多非人の持て居るも玉は即ち玉である、この玉は非人マユが持から穢はしといふて棄べきか、此瓦は貴人が持から尊しといふて取るべきか、実に馬鹿中の馬鹿にあらざれば左様不見識なる事は致すまじ、併し氣の毒千万なることは、斯る馬鹿ものが天下に少からざることであります、我等は玉ならば誰の手中にあるも之を尊び、瓦ならば誰れの手中にあるも之を賤いやしむ、何ぞ内外貴賤の別に眩惑することがありましようぞ、宇内うないの真理を有せんと欲せば宇内うないの心を持たざるへからず、取分けキリストの真理を伝ふる者はキリストの心を持たざるべからず。余は日耳曼人ゲルマンである、余は英人である、余は米人であるなど、鼻先に看板を懸て伝道するから、其事業が渺々數拳らぬ、私は切に思ひます、神に願います、我等が支那マヤ辺に伝道する時機来らば、只キリストの僕天国の民たる心得を以て伝道し見たい、キリストはユダヤ人になりてユダヤに伝道し給ひしが如く、丸で支那人マヤとなりて伝道して見たい、即ち

支那人の衣服を着、支那人の食を食し、支那人の家に住ひ、願くは頭髮をも剃り上げてチャン／＼坊主となり、又支那人の氣象を以て主キリストの福音を熱心に伝へて見たい、人木石にあらず、如何に偏頗なる頑固なる傲慢なる支那人も感心せずしては居られましょふぞ、早くこの精神を懐ひて先づ我がエルサレムを始とし、主の道を支那にまで施したいものです、私は外国人だの、白哲人種だの、米人だの、英人だの、日本人だの、又支那人だのと云ふ隔の間垣を除き去りて、主イエスキリストの王国を世界に建たいと希望します、一国を建るは善事である、併し世界をキリストの王国となすことは更に善事である、畢竟するに兼々主キリストを頭と一つに戴かず、万民の為に生命を棄給ひし所の、万国を一樣に見做し給ふ所の、公明正大なる所のキリストを標準とせずして、眼を区々たる所に注くものから僻根情が発るのです、故に事物の真想が見へないで、直きも曲りて、円きも角に見へるのです。キリストの愛は不正なる愛でない、偏頗なる愛でない、姑息なる愛でない、公明正大非を非とし、是を是とするの愛であります。

聞が如くなれば、押川兄の欧米漫遊の所感に躓きたる人々あるよし、兄は嘗るでなく誹るでなく、実に其見聞せしが促、つゝまずかくさず淡泊に演説せられた。米国の方々がその演説を聞て気を悪くし腹を立たれたそうだ、或る人に対し君は米国の友たり宜しく辨護し給へとまで云ふた人もありたるやに聞きました、とんだ事です、宣教師たる者の眼前にはキリストのみある筈で、米国だ日本だと依怙も最負もある筈はない、宜しくキリストを標準として国の内外を問はず、事々物々を判断すべきなり、キリストの許し給ふだけは外国の事も誉むべく、キリストの許し給はざる事は内国の事も責むべきである、何の国を問はず、何の人を論ぜず、悪事を悪とし善事を善とするがキリスト信者の持前です、外国宣教師にすら、時々このキリストの標準を打忘れて自国の最負する者が少からずあります、嘆すべき事ではありませぬか、日本人に

も実にこの標準がない、日本人が外国人に接するや秋の空の如く変遷極めて速です、最初は外国人を禽獸と云ひ、次に外国人を無暗に恐れ尊み、何でも外国でなければならぬと云ひ、間もなく彼れを夷狄視し蛇蝎視して外国を悪口しました、そうすると復外国人を矢鱈に崇拜し、鬼神と見ちがいましたが、近頃復々条約改正論の矢釜敷やかまなると同時に国粹保存など、我身自慢の外国嫌の氣焰もへ燃上りました、この愛憎常なき氣風が流行するごとに、キリスト教会までも世間の風波に動揺せらるとは真に歎息すべきことではありませぬか。我等はキリストを標準となして事々物々の是非曲直を判定し、不易の大道理を握りて愛憎常なき流行病に罹りたくないものです、東洋人アヤであれ、西洋人ヤウであれ、条理は即ち条理真理は即ち真理、彼我の差別はありませぬ、責むべき件あらば日本人と雖いえとも之を責め、誉むべきことあらは朝鮮人と雖いえとも之を誉めて、何ぞ西洋に敵対せん、何ぞ東洋に負ひせん、宇内うたいの大義を握てキリストと偕ともに審判者となり、天地の大愛を心としてキリストと偕ともに万国を一視同仁してもらいたいものです。

尚ほ一言したきは神学上に関する事であります、この後異説紛々の時代が来るに相違ない、已に其時になりました、これ我等が信仰を試煉する猛火である、この猛火に熱せられては觀音様も閻魔様となり、廉潔の君子と阿世の小人となること屢です、この際我等は屹然として遠く世情囂さわびすしき外に飛脱したいものです、それとて異説紛々の外に飛去りて冷淡にして無頓着なるべしとの意では更さらにありませぬ、公明正大に自説を拡張し異説を駁撃することを至当なれ、断乎として為すまじく、願はしからぬは一時紛争の真中をぐまかし、瞬時の名望を博し、蔭に廻りて卑劣手段を設る如き事です、先つ忘る間敷は、よし神学説は異なるとも偕ともにキリストの恩下に在るならば、真理を愛めで正義を重んじ、恩愛を旨として宇内うたいの幸福を謀るの心志に至りては毫も異なる所なしといふことである、故に彼等はキリストに在る同志の友です、同窓の

学者です、さらば彼猛火は少しも恐るゝに足ませぬ、我等を焼き滅すはさておき、我心志を試煉し、我身を純良ならしめ、尊く有かたき真理を発見するに至らしむること明けし、この煉り上たる心志、この磨き上たる氣象、この經驗悟入したる真理こそ、実に我同胞兄弟を頑愚の罪惡より、腐敗の地獄より、救ひ出すに足りませぬ、欧米の神学や、教会政治や、儀式や、又許多の經驗等を輸入するは固より必要には相違なけれど、我同胞兄弟をしてキリストの眞の弟子たらしめ、豪氣に於てはペテロの如く、確乎不拔の胆力と豪邁なる博愛英断に於てはパウロの如く、廉潔方正なるヤコブの如く、高尚深遠なるヨハネの如くならずこそ至極切要であると思はれます、国柄や、人種や、教派や、何や彼や区々たる事に眼光を眩くらまされず、キリスト信者の本色を篤とことんと承知し我同胞兄弟を始として、見ず知らずの人々に迄も主キリストに在る独立自活の大道を悟る様に、十二分の力を尽したいものです、前にも申したる如くノックス氏と私は国も人種も教派も異なりて、又神学説も多分相違があるふと思ひます、然し同氏は公明正大に真理を探究する人であれば主の爲め、天国の爲め、天父の恩下に在て同心協力が屹と出来ると思ひます、故に同じく講壇に立つて説教することを辱うしたる訳です実にキリストに在る新き人に至てはギリシヤ人とユダヤ人、或は割礼ある者と割礼なき者或は夷狄或はスクテヤ人或は奴隸或は自主の別あることなし、夫れキリストは万物の上であり、又万物の中にあり、諸君よ主の爲め天国の爲め、天父の恩下に在て世界の人と同心協力し給へ、天の万軍と同心協力し給はんこと、偏ひとへに希望致す所であります。

欧米漫遊之話

其二

押川 方義

凡そ如何なる国でも其国民の爲めには神聖なる国である若し其国が神聖であれば其国を維持し、其民の自由権理を保護する所の法律も亦其国民の爲めには神聖である、而して法律なるものは道理的より成るものもあれど、多くは其国の慣習風俗から出来て居る、一国の慣習風俗の力も亦甚だ大にして、其功用も切なるものではありませんか、故に何事によらず之れを改めんとする時又外国より新なる風俗慣習が浸入して来た時は、国民たるものは之れが収拾に就ては最も深く心を留めて考定せねばならんと思ひます、爰に一個の商人が一個の物品を持ち来ることもあるも、誰か其良非を辨別せずして妄に之を購求するものがあらずや、必ずない、況んや宗教の如きは一国の道徳の基本とも、国民の氣風とも風俗の変化ともなるものを採用せんとする時に於てをや、夫れ新なる宗教が入り来りて若し之が一国民を救ふ事が出来ずば、反て之を亡す程の關係が起ります、故に欧米の政度文物を採用するにも、敢て彼に摸倣せず、善く我国の事態を察し、實際に適する様に斟酌参考して、以て之を判定する事なければ、逆も国家の規模定まり、政治の紀綱挙り良慣習を生じ、典章文物粲然として起ると云ふ様な訳にはなりません。近頃キリスト教の感化力の一証拠として、或人はよくハワイ国の事態を適用します、成程該国の昔は人を喰つた程の野蛮国であつたが、一度キリスト教が這入つてから、国王を始め人民挙げて之れを奉じ、名目丈けはクリスチャン国の名譽を頂戴した、然し年々其国の人々は減少すると申します、或人の考へに此模様で続き行かば、遂には全滅するに到るであろうと申す、之を見てもたゞ教と云ふものは名称ばかり變つたとても何の利益もなく、国民を救ふ事も出来ぬと云ふ事が明白であります、素一事件の眞理を証明せんとするに、事物の全体を挙げ

ず、たゞ物の一方ばかりを執つて証憑しょうひようとする時は、何事に由らず、善くも見へ悪くも見へ、又害とも見へ利とも見へる、教の事も其通りであつて、唯其善美なる所のみを採て此が証拠とする時は、「グレイキ」教でも、ローマ教でも又マホメット教でも、仏教でも、其他何教に係はらず皆夫れ々の申分がありましよう。何れの国たるを問はず、其盛衰は其国に行はれある宗教に大なる関係がある、特に外国より新に宗教を輸入する時は、単に宗教より起る関係のみでなく、人と人と、国と国との関係をも混じて生じます、されば之が処置の宜しきを得ると得ざるとは一國の盛衰文明にも威嚴にも名譽にも大に關係を及すことであります我等は素より之を充分覺悟して居るべきであります（大拍手大喝采）。

何れ新き物を輸入する時は、國中一面に大變動が起り來たるは知れきつたことである、若し此變動がなくば、改良も出来ないから、反て變動は望む所であるとは云へ、何の爲めに我が國が此變動を受けつゝあるかと云ふことは、明確に又公平かへいに悟つて居らねばなりません。そこで私が先達つて横井君と一緒に欧米に向け日本を出立した時、キリスト教と社會の關係に就きて、余程確實なる觀察と考究を得て歸へりたい望みでありました、只今横井君は宗教の事なら多少了解して居るから宜ひが他の事を云ふは宜くない、と云はれましたが、之れは謙遜の言葉だと存じます、君にして何ぞかくの如き事がありましよう、然し私こそ能く判つて居る事は何もござりませぬが、只所感だけはありますから之を申述べます、今私の述べんと欲することは果して彼國社會の真相にして所見に誤りなきやと云へは、自分にすらも其保証は出来ませぬ、況んや諸君が始めから終りまで私の演説えんせつを悉く信じられようとは望もせず、また御勧めも致しませぬ、只是より述ふる所は、私が實際に目撃したと云ふところであつて、又眞実に之を信するところだと云ふ事だけは保証致しますが、是が果して眞情まごころを穿つて居るや否やと云ふことは諸君の御判断に御任せ申す外はご

ざりません。先日私が此所で在来の所感を述べたりしとき、西洋の或る方が腹を立て、彼は亜米利加をアムリカより讒謗罵詈したと云ふたそうであります。恐らく咄の意味が訊らなんだのでありましようと思ひます。さなくば他人の説話を聞ひて漫マダラに演者を誹議するものこそ反オモて失敬だと思ひます。兎角人は互に誤解するより感情を悪くしたり、争論を惹き起すことが沢山あるが、特に内外人の間には、この弊害があり易き事である、それは倍ツ置き、是より復又欧米漫遊の所感を述べます。今日は先日申落せし分を捨ひあげて大略申上ます、積りであれど、時々は操り返すことがあるかも知れませぬから、それは御用捨を願ひます（大拍手大喝采）。私が桑港より東方に行く道すがら、西洋人の実況を見るに、富豪な人の多きことは申迄でもなき事ながら、貧窮者も亦少くはない、殊トに彼国には移住民の多ひに驚きましたが、更トに驚歎したる事は、皆荒働きを成さぬ様に思つて居ましたが、此れら移住民の妻君などは、良人を扶けて大働きを致します始めは多く天幕住ひで先づ三年から五年位迄の間に、一人前の身代を造り、相当なる家を建て、所謂ホームなるものを起すまでは、一心不乱と云ふ意気込で、勤勉を専務と致します、凡て独立の民と云ふ者は、斯まで事業に熱心なる者であるかと感服の外はありません、かく男女脇ワキ同して働く故、其結果も充分早く、又立派であります、日本では近頃少しばかり働くも、疲つかれたと云ふ風が宗教社会には大流行で内外殆ど口慣せの様であるが、亜米利加に居る人は、朝から晩迄働いても疲れんと見へて（大笑大拍手大喝采）働かねば食くれぬ者と考ふれば、働いてもそんなに疲れぬと見へる（大笑）此の咄は移住民の事じやが、働く人はたゞ移住民ばかりではありません、合衆国全体の人であります、曾て日本の或る新聞は西洋の宣教師の事を評して、彼ほど働かず安楽にして沢山の金を取るものはないと申しましたが、米国では宣教師じ

やと云ふても、中々まが氣兼もあり、又よく働きます、かく労力の氣風を起す、善き習慣を異邦人の前に示すことは、宣教師が宣教中の一大要務とも云ふべきであります、(大笑) 或る西洋人の様を見て、彼等は何の理由もなく、自ら富んで居るものじやと思つては間違だ、(大笑) 顔に汗して食を得、よく命令を守り、實地に之を施すから富むのである、彼等の労働する様を見て、浦山敷あります、此良習慣を生起せしめ國勢を増すために、日本人も米國へ移住せしめてはいかん、(大笑 大拍手 大喝采) 又天下移住の出来る地は、何を問はず、ハワイ出稼などに出掛るより、寧ろ移住の事を始め、天下に大勢を張つては如何でありましょう、(大笑) 何故信者にして身代あるものは、先づ奮発して北海道へ移住し、其所を開拓して一は國家の利益を起し、一は已の財産を増す氣が起らぬであらうか、次に述べ度きは百姓マエの事であるが、通例百姓マエの身代は百エークル(一エークルは日本の千二百二十四坪)から、三百エークル迄の畑をもつて居る、かゝる百姓マエは牝牛八頭から十四五頭、豚十頭から十五頭、鶏は四五十羽其他七面鳥もハム狗も猫もありて、其身代の高は大概二万円から四五万円だと思ひます、斯く広き田地を所有する人は、日本なら稀なる大百姓マエで、たゞ炉側に黙坐し、沢山の耕作人などを使役して、自分は旦那様ぶつて居るところだが、(大笑) 彼れでは家内一統働きて居り、たゞ僅か二三人の耕作人を仕役するのみで、此の広漠たる田畑を耕やします、主人を始め皆朝は暗い時分から起き、夜は星を戴ひて帰るほどによく働きます、夜になれば新聞紙などを読み、家族団欒して樂しみます、妻君は牛乳を搾り、バタを製造し又子守などをしながら、食事の仕度に充分注意して、滋養分の多きものを調理す、祖母は部屋の掃除、祖父は鶏の飼養(大笑) と云ふ様に、皆同心協力し、家内中誰一人も遊んで居る者はないので、従て苦情も少なく、皆自分で働くから互に同情の感が厚くあります、若し日本であつたら、かゝる大百姓マエは、朝もさんぐ長寢をして、終日何事もせず、たゞ

小成に安ずるのみならず、却て自分は大身代のものだと自負して、人を駆り使ひ、夜になると妻君を呼びつけて酒の爛や肴の仕度を命じ、己に酔ふ時は妻君が気に入らぬとて、一本まいる位の事は珍しき事ではない。(大笑) かく東西人の思想といひ感情といひ又家内の有様の如き皆違ふて居る、されど亜米利加人でも金持になるには、人々が熱心によく働ひて集財し、有益なる事か又慈善の外には散財せぬと云ふ、経済の通理の外には何にも秘訣はない。次には商況の事である、アメリカで商売の盛だと云ふ事は、今では三歳の小児もよく了解して居ること故、今更事々敷申述べる迄もないが、只商売の上にもキリスト教が影響を及ぼし居ると云ふことは、人があまり考へないことである、キリスト教と商業とは、素より直接に關係なきことなれど、信義と勤勉とは、キリスト教の道德にも商売にも亦欠く可からざる要領である、今日アメリカ辺では他人に向つて正直を云はざるものは、社会に入れられぬと云ふ風が行はれて居るから、今日では利害の点から見ても、虚喝を云はぬ様に気を付けることであるが、素と此等の善き慣習の由て来る所を尋ねれば、皆キリスト教の結果である、商売社会で一切掛直を云はぬと云ふは、如何にも善美なる慣習である、私が或る時十円以上の買物をした、そこで五十銭や一円は負けるであろうと思つて直ぎつたところが、店のものが笑つてまからぬ(微笑)と云つたそこで、まけろと命じた(大笑)ら負けぬといひ、(大笑)負けにや買はぬといへば(大笑)買はにや売らない(大笑)と申した、そうして彼れ私にいへるやうアメリカには商売するものは皆正直といへる主義を守つて居ります、其証拠は貴君が何処に往つても、ユダヤ人の店を除けば、何れの店にても一切懸直は申せんと云ひましたが、其通でありました、又新聞紙などは道路に鳥渡した棚やうものを造り、其上に並へて売つて居るが、誰も其店を守つて居る者なきに、往來の人は入用だけ取つて、適当な代価を払い、棚の上に乗せ置いて行きますが、新約克の如き人民群集

の市街でも、誰もその錢を盗み取る人はないと見へます。又鉄道馬車などに乗つても、唯賃錢函が車の角にあるばかりで、其賃錢を取りに参るものありません故に彼国の広き市では里数の遠近に係はらず、片路が五錢と定まつて居れば、之に乗つた人はその函に五錢づゝ投込みます、斯く自由であつても、無賃で乗る人はないようだ、是等は各人の「センチメント」を支配して居るでありましょうか、御判断を仰ぎます。是に引替神学生は兎角無氣力な人が、随分ある様に見受けられました、最も有為活発の人物も沢山あります、又眞の豪傑も見へますが、無氣力なる人に至ては、唯早く卒業し一教会の教師にでもなり、妻でも娶らんと目的である、勿論宗教の普及を希望する時は、たゞ大望々と斗り云ふて、我は田舎教会の牧師にはならぬなど法螺ばかり吹ひて居るは賛むべきでもないが、又實際こればかりが彼等の動氣であつては困つたものである、然るに道の為め熱心なるに至つては、何くも同じ事にて、亜米利加でも自己を犠牲として、道の為め救民の為に働き居る、現にウイスコンシン州に独逸語の大学校と神学校がある、私は其処へも招待を受けて参りました、其処の神学校々長は、初め一ケ年は僅かに百五十円の給料を以て働き始めたが、其克己の様を見て、百姓等が憐んで、大根人参の如き野菜などを送り其不足を補ひし程だと申ます、彼の如く始終忍耐と勤勉を以て、遂に会堂や学校などを建設するに至つた例は、枚挙に暇なき程あります、たとひ彼国でも遊び半分で伝道が出来、教が拡まると云ふ苦はない、皆創業の際には己を犠牲に供して働き、骨を折ることは、今日日本の有様と異なる所はありませぬ。其次は都府と田舎との間に、人物がよく散布して在ると云ふことで、日本では人物とさへ云へば単に東京にのみ輻輳して、田舎には平々凡々なる者のみ居る様な悪風があれど、亜米利加にては都府にも田舎にも有為の人物が、都合よく行き亘り居る、此れ彼国で人權の各所に普く行はれ、中央集権の弊に陥らぬ所以でありましょう。かく拔群の人

物が、何故田舎教会などの牧師をして居るか、不審に考へる人もあろうが、彼国では田舎だとして卑ひと申す感じは少ないのみならず、各己がミツシヨン即ち天職あることを信じて居るからである、私が或る田舎の教師に遭つたとき、其人の話を聞くに、彼れは己に三十年ばかり、田舎の教会を牧して居りしが、再び都府へ出た時は未だ曾て誰れにも負た事もなく、又第二流の位置に立つた例はないと申ました、されど日本では何事を成すにも東京でなくては仕事が出来ぬと云ふ風は面白くない、一体田舎は人体に譬ふれば背骨である、之れが強健でなくては、頭腦も其働はよく出来ぬ、況んやキリスト教は各人の権理マと実力を尊ぶ教であれば、田舎の人にも等しく教を施すやうに、力を込めねばならぬと思ひます。次は現今の神学上の事で、其変遷は驚くべき有様であるが、又之に抵抗する力も強盛でござります、宗教界にも所謂保守的と改進的との意見が、互に拮抗して居る、そこで彼等は只自己の意見のみを主張して、己を真理の如く、他を謬誤の如く云ひ触らすことであり升ます、然し一長一短は共に免かれ難き事かと思はれます、茲ココに私の心に尤も深く注意を惹き起した一事は、保守と改進とを問はず、両派ともに拔群の人物を存してをる事でありました、若し人物といへるものを造成し得るの力ありとすれば、神学が保守であらうが改進であらうが、敢て頓着するに及ばぬと存します、要する所は何れの説がよく我が心を満足し、我に処世の方針を明に示し、我に宗教上必用なる確信を与へ得るかと云ふ事が定まれば、夫にて足ることであります、然るに保守は改進主義に抵抗し、改進は保守主義を蔑視する様な傾向あるは、これ真理に忠実な心から起ると云はゞ善き様だが、実は相方の短僻と思はれます、然しよく眼を開ひて今日欧米神学界全体の傾向と勢力を公平に熟察しますれば、到底保守的の神学上の意見は全敗するに相違はあるまいと思はれます、其由縁ゆかりは如何にといふに保守主義の人でも近代の学問を修め、文物の進歩を了解し居る人は心中已に旧説に対しては多少

の変化を受け居る事が明であります、只彼等が今日旧説を採りて動かぬは、大に為にする所あつての事かと察し得られます。又次は政治界に一個の運動力となり得るだけの信用を社会に有つて居る人は、皆彼の「ホーム」なるものある人で、今日日本の所謂壮士の如き者は、何の勢力も持つことは出来ぬのみならず、斯かる人は社会の疾病として人に避けらるゝことであります、彼国の政治界で働く身となるには身代もあり妻子もあるが必要である、特に厳正なる品行ある人でなくてはなりません、少しなりとも政治界で頭角を頭はそうとするものは、公然權妻を携へたり、妓樓に登つて、憚はばかる所ないと云ふ様なことは決してない何れの国でも無財産、無責任且つ不品行の輩が政治界で跋扈はつこして居る様なことでは、到底真正なる文化の社会とは思はれぬ、(大笑) 愛国尽忠などを口頭に称えるは、容易なることなれど、是輩が皆真正の憂国者、社会の恩恵者とは思はれぬ。其次は親子の關係を考へたひ、西洋では子供がよく親の命に従はぬ風が流行しつゝある、心ある親はこの風のみに社会に流行せんとすることを、甚だ困つて居る、之では逆でもよく教育が出来ぬと云ふ人に、私は沢山出合ひました、されど是が彼の国の美風だと云ふて誇る人もありましたから、其善悪利害は見る者の判断に任すの外はありません、日本風の豊付教育は素より宜しくありません、自由教育は子供の天性を發達せしむるに欠く可からざることなりとの教育論は、我か国今日の急務である、キリスト教社会の爲には殊ことごとに「ミツシヨンスクウル」に於ける教育のことが、目下の大問題でありますから機会を得て委くわしく之を論し度と存します。次に彼国男女の關係を見るに日本などでは逆でも想像し得られぬ程のことである、西洋では婦人の勢力が大に社会の全体に及んで居ることに驚きました、一体婦人に権識がある、彼等は家斉の道は申すに及ばず、学校の教師となり、病院の看護婦となり、孤兒院こわにんの管理者となり、教会の保護者となり、社会の講和者となり、道德空氣の純潔きよめ者となり、顛狂院てんきやうの世話人となり、

其他郵便局の取次となり、外国伝道の奨励者となり、安息日学校の教師となつて、皆信用を社会に得て居るのみならず、事業によつては男子に優る仕事をする、彼国では何れも婦人に対しては至つて恭敬を尽す風があつて、其面前では猥褻なる話や、行は一切せぬことである程なれど、之に反して又風俗と云ふ者は誠に奇妙なものであつて、日本などでは決してせぬことじやが、彼国では親子の間で立派なお嬢さんが、何某の和子に恋慕したなど云ふことは、平氣の平左工門で話して居るようなこともある、然し概して申せば婦人に対しては、無礼や乱暴は一切せぬと云ふように注意する風俗か盛んである、これが為外観を飾る弊もあれども、若し男子が立入れば争論ともなる様な場合でも、婦人が這入つて能く之を救出することが沢山あります、併し婦人は大概保守的の傾向があつて、新説新事業などに抵抗するものは、男子ではなくて女だ、(大笑) 人が新規な事を云ひ出すと、之れは異端だと直に断定を下す者も亦女だ、(大笑) 勿論例外の婦人もあつて、新説を称へ新事業を起すものもあるには相違ない、それは格外にて女傑とも云ふ人のことである通例婦人は大変かたいものである、(大笑) 筋肉の柔かな割合に頭脳がかたい、(大笑) 婦人の脳には(私は唯物論者ではないが)両面があると見へます、一面の方は感じ易いが他面の方は動き難い、私のお話を聞きて第一番に喜ぶものも婦人であるが、又立腹する者も婦人であらう、(大笑) 婦人は概して秩序的の天賦あるが、男子は改進黨だ、これが顛倒した為め、屢困することもある、(大笑) 男女の交際は円滑であつて、又礼節が高ひ、日本では兎角男女の交際には奇妙な風や感情が行はれて、清らかな所が少ない、此れ国家の為に歎息すべきであります、男女は交際せねばならぬものなれば其二者の間は特に信義と潔清の心があり、方正なる行がなくては、此有益なる交際も、(可笑) 反て害あつて益がありません、然れば何の力をもつて、此緊要なる交際を清潔に、有益になし得るかと云ふは、今日日本社会の一大問題ではあります

ぬか、^レ而してキリスト教の外、何の教かよく此心情を造成するものでありましようか、爰に私が在米中困つた事に出逢た、一事件を想ひ出たしましたから、一寸御咄申ます、夫は別事でありませぬが、宣教師の事に就き、多くの人から質問を受けたことあります、第一宣教師は、よく働くか、一日何時間ほど働くか、又日本人の家々を尋ね行くか、其妻は何な働きをするか、日本語を立派に遣ふか、良人の伝道を何な風に助けるか、良人が伝道の為め他行せし時は同行するか、又家内には家僕や下婢を使つて居るか、又は自分で調理や洗濯などをするか、日本人の様な生活をして居るか、日本婦人の前に如何なる感化力とよき模範を与ふるかなど、其他種々な質問を受けた時は、殆ど返答に困り果た、そこでそんな細密な質問は御免下されと申ました、(大笑)ところが外国にある信者は、宣教師を厚く又深く信仰して居つて、宣教師と云ふものは野蛮な国や、異俗の民の間に這入込んで艱難を忍び、辛苦に堪へ、伝道に身を入れ心身を勞し居るが為め、遂には度々病氣を生じ、又不適当な氣候に逢ひ、粗末なる食物を喫し、粗造な家に住ひ、其他さまざまな難艱を為し居るは、誠に氣の毒な事だ、可愛さうな訳だと思ふて居る、そこで金満家が其余有を以て、外国伝道の為に捐金をなすは、当然の事とするも、貧困なる人が其乏しき中から、身を^裁いて捐金を出すこそ実に奇特なれ、されど又この信用が却て彼等の血涙の祈禱ともなり、同情の感ともなり、宣教師を尊重する敬愛心ともなつて居ります、且つ安息日学校に行きて見ると、幼少なる娘や、子供が少しづつ、の金を出す、此金は親から貰ひ受た金であつて、自由に遣ふ権のあるものじやが、菓子を買食したり、遊物を買ふ代りに外国伝道の為めに出します、其他忠実と信仰に満ちて居る善き男や女が沢山で、其心情を洞察する時は、自分の胸が迫る程である、そんな金が宣教師たちの給料ともなり、伝道の費用ともなつて居ります、アベルの血が地より叫んだように、かゝる神聖なる金が我等の^て耳朵に^は号ばぬ様に準備を

して居らねばならぬ、斯る事のあるは兼て聞き及び居たことであつたが、之を目撃しては千感万慨禁ずる能はざる所でありました、そこで可成僅少の費用を以て、大成功ある伝道上の方案を發見し、且つ氣付ひたことは、何事によらず彼等に之を示すが、私共の義務だと思ひました、曾て直接伝道に骨を折るよりも、教育の為に金と力を尽すことを勧告致したのも、多少彼等の困難を省き、又広く世界に伝道する成果ある方法だと思つた為でありました。さて又日本のことは概して欧米では好評判であります、一体これは日本の御役人衆が洋行して大層金円を播き散らされたが為に、日本の富は莫大だと思はしめた為でありますよるか、或は我が文物の彼等を凌駕して居ると云ふことを發見した為でありましょうかと云ふに、さることではありますまい、唯彼国の上流社会の或者が日本を好評する理由は、我が国が僅か数十年の間に欧米の文物を採用して、東洋不動の社会を變じ日新の社会に代つたと云ふが、我国の好評判を博する原因には相違がありませんが、又日本見物に出掛た彼の国の好事家が日本の事物を誉め嘸^ほやして報告するのと、欧米に留学して居る日本学生の成績^{せいせき}が彼等の予想外に善くあるのが、与つて大に力あることだと申すことが出来ず、彼等は外国語をもて修学するにも係はらず、校中にも多くは中等以上の位置を占めて居るので「プロフヘソル」等が賞歎（尤比較的）して之を吹聴するからであります、若しこれが事実ならば独り我が国の名誉であるのみならず、青年学生の大希望心を奨励します、又此事が政治上にも實際上にも意外の影響を反^へばして、条約改正の成否にも関係がある、たゞ条約改正成否の問題などは外交官ばかりの骨折だの、外務大臣ばかりの功拙だのといひて、かゝる大問題の成否をたゞ此等のみに依頼するは、一国人民の価値をも、其勢力をも知らぬ人であります。其次亜米利加人は黄金崇拜者たるの評判が何処にもあるが、夫に相違はありません、然し彼等が集財に熱心なるは、国柄の然らしむる所で、彼の国では家もなく身代

もなき者は、社会で名譽なきは勿論、又事業も出来ぬから、事業の点から見ても、先づ集財せねばならぬ、無財産の人は一人前の者とは他人に思はれぬ国風である、併しかの国人は又善く散財も致します、其証拠には凡そ慈善の事業は大概士民の義捐金でなつて居る、或は学校なり、(小学校を除き)或は病院なり、救助院も、貧院マヤも、孤兒院マヤも、癡狂院マヤも、其他万般の「インスチユション」は、皆私立に係らざるものは殆ど全く稀である、これはただ財を散しさへすれば済むと云ふ訳ではない、金をだした上に又よく尽力致します、諸会社の役人などが日勤でありながら、然も目の抜ける程多忙でありながら、一週間には二度も、三度も、慈善会に出掛けて、心力を尽します、これは人々が名譽を得る為にするのだと、或人が云ふ様なことではない、斯る説を為す者は、其人の心情を知らぬものである、彼等は眞実慈善にも熱心であり、キリスト教の感化力を得た者には、其心情が能く判ります、彼等がこれを為すは、此れ神が己に命じた天職の一だと信ずるからであります、慈善の事業に就いても彼我を相較れば、其異なること五五齧天壤の差のみにてはありません。其次は国土の広大なことで一国の風土と人民とは相須あいまうて居る、国と人民は須臾じゆんじゆも離るべからざる関係がある、彼国の山は大に且つ高し、河川は大に且つ長し、田野は広漠に且豊穰である、此等が亜米利加人を網羅して居つて、其氣風を模造する、而して日本人は日本の風土に相似て居る、日本の美術は西洋人は之を賞めほや唯し、日本人も之を誇り居るが、日本の美術は皆此国土に相似て居る、富士山の嶺は高く且潔きも、壯麗ゴランドと云ふよりも寧ろ美麗と云ふべく、河川其水清くして流急なれども規模甚狭ひ、日本人の心は性質潔きも鋭く且つ火急であつて、物を容るゝの度量に乏しひ、宗教社会にも政治社会にも屢合同を計画して、又屢失敗するを見ても、之を判断することか出来る今日は我国人の氣風を養ふには、宜しく世界の感化を受くべきである、井底の蛙では困る、宜しく壮大なる氣風、勇壯なる精神を養

成し、盛大なる事業を希図すべき時であります、狭少なる規模をもて満足すべき時ではありません。其次に或者は彼国では主義に一致して人には一致せぬと言ひ伝へ居りますが、これは其実を誤つた見解であります、彼等は互に信任すること日本人の及ばざる所である、彼等が主義に熱心にして之を確守し、其信する所を断行する風あるは申迄もなきことながら、又よく人をして信せしむる、人は活ける感情的の動物であれば、たゞ冷淡なる主義のみに由て働くことが出来るものか、必ず生命は生命、人は人と相結んでこそ、始めて事業は出来ず、以心伝心と云ふは東洋人の専有物だと云ふは、大なる誤だ、たとへば社会の利害を主とする各政党ですらも、或人に向て君は何政党の者でありますかと問へば、「デモクラット」であると云ふ所へは、私は「クリブランド」だと云ひ、又「リパブリカン」だと云ふ代りには私は「ハリソン」だと申す、日本人は人を信じ人に依るやうに見へて、其実は人を信せず又人に頼りません、而して尊長の風あるやうに見ゆれども其実は然らず、彼等が長者を尊ぶは多くは己が位地を保たんが為のみ、これ謙遜辞讓の美風と云ふよりも寧ろ卑屈心の結果と云ふべきのみ、さりとて一定したる主義もない風じゃから、之を改良せねばならぬ、近頃は日本の人民も参政の實権を有する様に成りかゝつて、今年は衆議院も開設になるが、過日来議員選挙の醜聞が毎日の如く、我等の耳朶に達しまして、誠に国家の為め歎かほしきことばかりであります、人民がかく賄賂の受授を公然と致す様では逆ても信任は出来ませぬ、万一にも不幸にして代議政度の国に在る人民が互に信任なく、又代議士を信する事出来ぬと云ふ有様に至らば、国家の為め由、敷大事と存ます、我等日本人たる者は之が為には深く憂慮すべきことではありませぬか、最早在米のことは此まで止め、是より欧州漫遊の所感を少しく申延べます、米國を發して第一に到りました所は、英の倫敦でありました。流石世界第一の都府とも云はるゝ程あつて、事物の繁盛は云ふ迄もなく、人

民の輻輳^{ふくそう}、商業の隆盛は、言語に尽されません、東京を以て之れに比すれば、仙台を以て東京に較ぶると殆ど同じ位の感が、あります、又倫敦は各国の人民が輻輳^{ふくそう}し、又商業が盛んなばかりでなく、有名なる学者も夥多^{おほい}くあります、彼のマルチノウの如き、ブルークの如き、スポルヂオン、フワル、パアカル等の如きは、神学上の意見こそ互に異なれ、宗教界では著名なる人々である、特にブルーク氏の如きは最も心切に我等を導きくれました、該府には珍敷物多くあれば御咄申度けれど、已に長談となつたから止めます、夫より蘇^{スウエーデン}国に行き種々珍しき物を見たらうち彼の有名なるジョン、ノックスといへる古き矮少なる建家を見た時は、我が国今日のキリスト教社会の情態に思ひ合せ、大に感激しました、夫から大陸の方へ行きまして、第一番に足を止めた所は和蘭^{オランダ}でありました、該地には兼てキリスト信者に知友もあつた故、其地に止まりまして、交々感慨を起しましたことか多くありましたが、銃砲丸の如き国にして、昔時は天下の商權を専有し、天下を睥睨し、遂に日本へまでも夥多の船舶を派遣し、通商貿易を開き、殖民地を建てたと云ふこと、或は海軍の勢力は大に之に關係を有せしことありといへど今や英国の権力に圧せられ居ることなどを見て、千感万慨措く所を知らせなんだ、夫より独逸のベルリンに行きましたが、該地には嘗て米國にて知友となつた人で久しくロシヤのピートルスボルクに在りて、ゼルマンリフオムド教会の総管たりし、ダルトンと云へる人の招待を受けました故同氏のお客となりました、其が為め種々な好便利を得まして、同氏の紹介にて有名なる人々にも遭ふことを得ました、其内一名の東洋学者に逢つて問答したことを一言申述べます、先づ其人に遭つて初対面の挨拶終るや否や、氏は我等を連れて東洋博物館に行き、日本及び支那^{チナ}の諸器物を見せた上、私に向つて申さるゝやう、君は日本将来の文化の方針に就いては如何なる意見を持ちますかと、私は直ちに答へて欧米各国の文物を斟酌参考し、我國の事態を察して、彼国實際的文明

の制度を採用する積でありますと申ました所が、彼微笑して申さるゝ日本にして何ぞ欧米の文物を採用し、其文明を輸入するに及ぶものか、日本の文明は既に充分に進歩をなし居るとて、日本の美術から茶の間一切の諸道具に至る迄、之を示し、遂に日本の寵のことに及び、之れ則ち日本文明の完全なる信憑にあらざやと云ふて、国粹保存主義の咄を懇切に致し呉れました、一寸聞く時は最もらしく見ゆる議論であるから、国粹保存論者などが、かゝる話を聞く時は、之れ屈強なる徴証なりと云ふに相違ありません、又かゝる論は吾等欧米の文物を採用せんとする主義を有つ者をも、時としては惑はす所と思ひます、夫より種々談柄の末、彼れの論はたゞ学理的の考究に止まり、日本の如き生活をなす国にはかくくゝの家具諸器物のあるは当然のことであるから、かゝる生活を為す国は之れにて足れりと云ふ説なることが判然解りました、(大笑) 彼れとても日本が向后欧米各国の文明と競争するにも、日本は従前の倂いままにて足れりと云ふ説にはあらぬことを、私は悟りました、若し果して日本文物が完全で、欧米各国の文物に優れ居るなら、何故ベルリン市街の真中へ日本風の家屋を建築せぬか、又石造の家屋へ日本製の畳畳を敷かぬか、(大笑) 磨鉢連木を用ひてなぜ牛肉や鳥肉のスープの代りに味噌汁を吸はぬか(大笑)と云ふたら、彼の国の如き忙しき国では、逆でも家外では靴をはき、屋内では靴をぬぐなどの如き緩々たることをして居ることは出来ぬと申すよふ、勿論世が段々進み活発なる競争の世界に生活して居るものは、決して長袖の衣を着畳の上に静坐して居る閑がありません。夫からフランスのパリにも行き、又天下に風景を以て冠たるスイツランドなどにも行きました、フランスは予て無宗教の国柄だと申す評判を聞きましたが、成程 パリなどでは熱心な宗教家も少なひように見受けましたが仏国はパリ、パリは仏国と思ふは大なる誤りであります、田舎などには随分熱心なる信者が沢山あると申す、又独逸でも近頃は宗教再興の芽萌頭れ居りまして、其実

は皮相論者が排評する程宗教に冷淡ではありませぬ。次に伊太利国の事を申す、伊太利国は古代史中有名なる国柄である故、ローマ府などには多くの旧跡古物等があることは、申迄もなきことにて、凡該府を瞥見するものは、往昔該府の旺盛であつたことを想像しないものはありますまい、其所に世界第一の大きな築建物などもあり、所謂セントピートルス会堂の如きは、最も壯觀であります、誰人も之れを見て驚きましよう、又曾てペテロポールの禁錮されたと云ひ伝ふる岩屈の獄舎などがありました、之れを見れば自ら敬慕の心を起すと同時に昔時の宗教者は其身を犠牲に供して、真理の爲め、天下の爲めに、千辛万苦を嘗め、喜んで艱難に堪へたことを回想し益々敬慕の念を起しました、斯く一旦盛隆であつたローマ府も、今は其市街にぶら／＼歩き居る腐敗したる天主教の僧侶と救助を他に求むる乞食とを以て充されて居るとは恰も我が西京に行き夥多の遊惰僧侶の歩き廻つて居るのと一般であります、(大笑) 近頃は追々伊太利風が我が国に流行せんとして居りますが、我が日本は氣候も伊太利と善く似て居り、形勢も之に能く似た所が沢山あり、其他国家の貧困なる事から、国家の盛衰は多く政府のみに依頼して、又政府も己れのみ之を負担するもの、如く、上下共に感じ居るなどのことも能く似てをります、且又腐敗して宗教が慣習的に人心を束縛して居ることも甚たよく似て居ります、故に若し天主教の如きものが我が国に這入りて、人民の無氣力に加へて迷信を起さしたなら、大変なことであらふ、甚だ戒心致しました、夫から私がブランドジイより出帆して帰朝の途に就きました、此地は小港であるが、其不潔なことや、人民の無氣力や腐敗したる宗教風俗は、一目して判然であります、所謂乞食坊主と偽せ尼で満ちて居る、私も五十錢斗り尼に欺き取られたことがあつたが、(大笑) 宗教の信仰も斯くばかりになつては、其弊害も極りありませぬ。私の乗た船は英吉利の郵便船でありましたが、該船の寄港する所は、皆英吉利の旗旛飄々たるを見ました、彼

の欧米の強国が斯く東洋の各国に向つて権力を専らにするを見て、^{うた}転た感慨の情胸中に満ちて禁ずること
が出来ませなんだ、私が見た人々の中には、ユダヤ人もあり、印度人もあり、アラビヤ人も、支那人もあ
りましたが、多くは自己の権力を圧へられ、欧州人に奴僕視せられ、逆遇せられて居たを見て、つらく
我国の前途を考へ、大に警戒すべきことと思ひました、日本を東洋の英国など、云ふものがありますが、
我が国の景況を見ては、逆でもそんな夢想話に安心しては居られませぬ、唯要する処は日本の実力を増す
のみであります、途中シンガポールに寄つて、赤道直下の樹木の繁茂して居るを見るに、日本などの樹木
は老木の如く、又朽木の如き觀を呈して居ります、そこで我が国のために大に歎息したことは我が国の婦
人が二三百名も娼妓となりて、其地に徘徊して我か国辱を露し、^{てむ}而て己が身を利せんとする有様を見たり
しが、実に歎はしき極点でありました、夫から香港に来つた所が、こゝは随分繁盛なる開港場でありませ
が、こゝでも勢力あるものは独り英人でありませぬ、夫より又上海にも行きましたが、同じく立派な港であ
りますなれども、東洋人は見る影げもありませぬ、其上支那人は阿片店といふものが凡そ一町内に五軒も
七軒もあつて、多く其所に行き朝から阿片を喫して顔色憔悴と云ふ様である、私は屢々阿片洞なるものに
行き見ましたが、喫煙者の無氣力無精神なるを見て、憐れな様であります、抑も阿片の害毒あることは実
に名状す可らざる者と存じます、欧米でも随分不品行な人も多くあつて、飲酒などは盛なるが、是れと彼
れとを比べて見る時は、一見して其強弱を判ち得ます、是れは云ふに云はれぬ容貌をして、誰にも抵抗す
ることは丸でない様であるが、彼は飲酒店にて我等を見ても糞喰へと云はぬばかりなる風をなして、鯨飲
をやつてをる、(大笑) 吁々支那人は何ぞ斯く無氣力なるや、斯る大害毒品を強売する所の英人を其国外に
驅逐せざるや、何ぞ一大戦端を開ひて彼等の肉を喰はざるや、何ぞ神明に誓て自国の民を保護せざるや、

支那には四億万の人口ありと云ふ、何ぞ其半を義戦の爲めに殺さざるや、李鴻章は英傑なりといふ何ぞ開戦の布告を天下に示すの命を乞はざるや、若し余をして支那の李鴻章たらしめば、一大義戦を開き彼の不道徳なる碧眼児を追ひ払ひ、国家を磐石の安きに置くべきにと思ひました、(拍手喝采)彼の支那人が阿片を喫し、英人が之を強売するは我に於て何の係りもなきようなれど、彼の様を見ては我とても憤慨に堪ざる次第でありました、(大拍手大喝采)夫より上海を発し日本に向ひましたが、我が隣国なる支那人の現情を見ては、日本のことが気に懸り、我が国は如何にもして之を強盛にせねばならぬと思ひつゝ、満腔の精神を抱ひて歸りました。そこで長崎に着船した時は思はず愁然として涙を流しました、私は此愛慕する國に安着した時、何故かく愁然たる有様でありましたろう、人或は私に申しよう、君は東京に妻子あり、日本の各地に朋友あり、親戚あるなるに、何んぞ此安着を喜ばず、反て此美麗なる愛慕すべき生誕の國土を見て慟哭するかと、其御不審を蒙るは一応尤もの訳でありますなれども私は此愛慕する我が國が未だ全く欧米の文化に遠く及ばざる事情の多くあるを益々感擲したからであります。日本社会内外の真相を以て、之を欧米文明の強國と比較する時は、感慨の心は自ら胸中に湧出てます。苟も我が日本人にして身を海外の國に置く時は、愛國の情は之を禁ずる能はず、及ばずながら日本の名譽を挙げんと、造次にも顛沛にも國を忘るゝ事の出来ぬは自國の尊重なる事を知る者の、禁ぜんとして禁ずる能はざる事なるに私が在米中に聞き及び尤も忿懣に堪へず、千感万慨我が胸を打ちし事は、日本より米國に遊學して居つた或る「クリスチャン」が、所々を巡遊して演説をなした時、我が國の醜行惡俗を挙げて之を公衆の前に語り、尚之を足らずとして可笑き品物を持出して、之を聴衆に示して笑はせたり喜ばせたりして、其布施を貪るを以て目的としたるわる物破廉恥の奴があつたと云ふ事でありました、斯かる狡猾手段を用ひて人を瞞着し、殆

んど欺騙に等しき法をもて財を集むるは、仮ひ拜金宗をもて其主義とする、貪財者流に取りても、尚嘆惜すべきであります、況んや正義を旨とする「クリスチヤン」にして斯る事を為す者は実に我国の賊にして真理の敵である、我れ其者の首を斬る、尚我が宝刀の穢れんことを恐る、たとひ其血を流して之を鳥に与へ、其肉を截きひて之を獸に与ふるも、鳥獸尚其肉を喰ひ其血を啜るを屑とせざるでありますよう、かゝる輩こそ売国の奴、真理の敵として鼓を打ち鐘を鳴らして責むべきであるに、人の之を顧みざるは其之れを知らざるが為めでありませう、諸君請ふ宜しくキリストの血をもて我が国を救へ、若し諸君にして国家の為め真理の為に心身を犠牲に供する決心と操行あらしめば、仁慈なる天父は遂に我國家を救ひ玉ふて正義の国となし玉ふを信じます、我が国の危険なる今日に於て、諸君何ぞ奪起せざるや、諸君何ぞ邦家の大事を担任せざるや。(大拍手大喝采)

与于第二回夏期学校生徒書

エル、デー、ウイシヤルド

謹んで一書を親愛なる学生諸君の左右に奉呈す余不便の境遇に在りて身親しく諸君と共に会合する能はざるを以て甚だ残念に思へ共心は御集会の初より終に至るまで常に諸君と共に在りて離るゝことなかるべし（あはた） 偕（あ）て目下余が働（あ）き居る地は中華（シレスチアル、エンパイアー）と誇称せらるゝ所なり余輩は皆眞の天国（シレスチアル、エンパイアー）の民にして又其旅路に急きつゝある者なれども余は未だ其国に入らずして

此世に在るをいたく喜ぶ去ぬる秋の小夜中頃余壞れかゝりたる汽船の甲板に立ちつゝ、激浪怒濤の戦慄く船客を今にも天の彼岸に払ひ去らんとするを見し時は彼の慕はしき天津御国はいと近くなりしと覺えたりき斯る危難にも拘はらず斯く近きぬる榮ある御国を望みて暫しか間余の心は喜を以て震ひたり此時余はジョン・パオンヤンの天路歷程中にある年老ぬる一人の旅客が美しくも描き出したる感情を深く味ひぬ彼れ死の川の水に入りし時叫んで曰く「此川や夥多の人の怖るゝ所なりき、然り、之を想ふて余も亦屢怖れぬ、此水や口に苦く、胃腑に落ちて冷かなり、去れども余が行く処を思ひ岸の彼方に余を待つとの接遇を思ふの情は熱火の如く余が心の中に燃るなり」と然れども余が此想像に耽りしは只瞬時の間のみなりき余が働終りぬるを悟りし時余は筆紙の尽す能はざる失望と落担とに陥りたり其時の心情は諸君が世の青年をして基督の爲めに一生を送らしめんと既に最後の力を用ひ給ひたるを覚悟せられたる時に非ずんば諸君の得て想像する所に非ざるべし此時余は若し余の生命にして救はれなば以前に百倍するの精神と熱心とを以て主の爲に尽力せんと思ひ定めたり而て又余の生命は只之れが爲に救はれたりと常に信すべし親愛なる青年諸君よ余が今日諸君に向て殊に敬賀せんとする所のは諸君が生存して此世に在り神の子と一体となり神の子が其生命を賭して始め又諸君の生涯を用ひて成就せんと欲する所の事業則ち人の無窮なる生命を救ふ事に尽力し給ふ事なり余輩が事を為すに当り願くは其生涯の発端に於ては余はわが父の事を行ふと云ひ其臨終の際には余が事終りぬと云ひ給ひたる神の子の生涯を余輩の精神と献身との最も高尚なる模範たらしめよ過る一年に於ける基督教青年会の進歩に就き聊か諸君に報道することあらば恐く以て諸君の熱心を鼓舞奨励するに足るものあらんか実に基督教青年会が其運動を始めし以来過ぎし一年の如く広き働をなしたる年はあらざるべし又万国史上基督教が斯くも多くの国々の青年の間にかゝる熱心を起したるの年ありとも思はれざ

るなり

亜米利加に於ては書記或は助役として青年会の為めに其全時を費すの青年続々輩出して殆んど一千人の上に超過しぬ、又青年会館の数及び実業家の喜捨する金銭の額に於ても古来未曾有の増加を見たり亜米利加に於ける大学青年会の数三百二十五より尠からず五人の順廻書記は此処彼処の大学に奔走し或は青年会を組織し或は青年会を發達する為めに其全時を消費せり数多の学校【あまた】の学生は互に訪問して青年会運動の事に付討議を開きぬ又大学青年会の中青年会館建築費の募集を始めたもの多く而して本年中に其落成を告ぐるの会館も亦尠からず当夏米国に於ては学生の大会合三ヶ所に開かれ又諸君か東京に相会し給ふ頃にはノースフィールドに於て万国青年学生の会合開かれ居る筈なり且つ青年会が過る一年中になしたる働の結果を最よく証するものは一年間に公然基督を救主なりと認したる青年の多数なること、一生を全く基督教の事業に抛ちたる青年の多数なること、の二つなり

大英国に於ては曩【むかし】に開きし諸大学青年連合会に極めて好結果を得たり此会が英国学生間に於ける基督教の事業の一として永續する事は疑ひなかるべし蘇国エデキンバロー大学に於て数年前よりあり来りたる伝道会も亦大に成效を顕しぬ

諾威、蘇典、及び丁抹【デンマーク】に於ては基督教事業に關して他国の青年と本国の青年とを一致連合せしむる為め計画をなし居しが本夏は諸君と等しく夏期学校を開設するの運びに至りぬ一人の大学卒業生にして学問技芸に熟達したる青年ありストックホルム府青年会に於て他の模範となるべき事業を經營しつゝ、ありしが是れ他日全国の青年会に大なる感化を与ふるに至るべし

独逸に於ては皇后陛下の御尽力により皇帝陛下より厚き恩賜ありて宏壯美麗の青年会館を建設するを得た

り、ベルリン大学青年会の本部は則此の府青年会館の内に在りて既に好年報を發するに至れり又ベルリン在留の米國學生は一の同盟会を組織し一致和合の基礎を開きたり

仏蘭西に於ては昨年中数月間国内諸青年会總書記一名諸事に執掌し巴黎府に青年会館を建設せん為め資金を募り始めたり又特に該府學生の爲めに運動するの手始をなしたり

ノースフィールドに開く万国青年學生大会合には大英國、スカンデネビヤ、独逸、及仏蘭西の諸大学より派出員臨席するなるべし、該会には亞米利加在留の日本及東洋諸國の學生等も多く臨まるゝならん

亞細亞に於ては土耳其トルコの中央土耳其大学及アインタップ府に青年会ありて府内の青年中に宗教上の運動頗る見るべきものあり他の亞細亞土耳其トルコの大学中にも宗教に心を注ぐ者多しと聞く余は是等の各校より招待を受けたれば向ふ二ケ年間に訪問を果さんと望み居るなり

印度に於ては青年会の事業印度青年の間做起り事務頗る整理す該國に大業の挙がる日蓋し遠に非るべし米國青年会委員會印度部書記デビッド、マッコノオイー氏のマドラス到着以來三ヶ月を経ざるに青年会に加はる者百余人ありて一家屋を借受け運動を為せり此家屋の内には図書室、遊戲室、商議室、及び浴室等の設ありて社交上及び文学上の集会漸く盛に且つ聖書研究会聖書教授法講究会の如きも大に其功を顯はせり一ケ年一千八百円許の費用はマドラスにある印度及び英の実業家より供給せらる、余れカルカッタの一ケ月間巡廻を終へし時此地方の爲め諸青年会總書記一名を送らん事を切に米國青年会委員會に乞ひたり印度に於ける事業は一は階級上より一は教育ある青年輩の智識に誇るにより大に障害を受く然れども是等は基教徒の一味合体により打ち勝つを得べし余れ印度の諸都府より招待を受けたれば他日尚一季を彼の地に於て費すなるべし

錫倫に於ては五個の学生青年会を合せて凡そ十五許の青年会あり米國より總書記一名を迎ふる事に一致したり余ジャフナ大学に於て一の地方会を催したる時合したる青年の數殆んど四百人に及びぬ又伝道の爲め該大学内に打ち續きて集會を開きしに多數の学生主を信ずるに至りたり

支那に於ては既に五個の青年会ありしが余れ又一個を組織したり上海にある青年の中にも亦運動をなすの計畫あり東洋に在つて余が臨席したる集會の中最も有益に覚えしもの、一は福州の英華学校に於ける集會なり該集會にありて殊に著しかりしは基督教徒が献身の精神に富みし事なり又一週中に教會に入らん事を乞ひたる青年七人ありたり其後青年教徒の運動は益隆盛に趣くとの報を受けたり余は彼の國に適當なる組織を以て運動を始むる時機の熟したるを深く信す假令其進歩は緩慢なるも其運動の健歩にして漸進すへきは疑ふ可らざる事たり

余は神の恵の断間なく日本にある諸君の事業に加はるるを諸君と共に喜ぶ余が切に祈る所は既往に成效したる事は将来神が為さんと欲し且つ爲し能ふ大事業の端緒たるに過ぎざるを諸君が覚悟せられん事なり、願くは此事業は諸君のものにあらざるを忘れ給ふ勿れ此事業は実に神のものにして神は諸君の爲めに諸君が或は求め或は考ふる處に勝りて遙に大なる事を爲し給ふべし

今日神か其事業に最も多く用ひ給ふ人々は啻に神が己等を用ひ得るを信するのみならず又己等を用ひ給ふべきを信するの人々なり昔時ソウルの軍中にゴリアテを誅せん爲め神は己等を用ひ得べしと信じたる兵士は実に数千の多きに達せしならん然れども此大軍の中に神は此任を余に負はしめ給ふべしと信じたる者は独りダビデありしのみ日本の青年諸君中神は己等の手により大業を爲し得ると信ずる人は甚だ多かるべし然れども啻に神が己を用ひ得るのみならず真理に反対する強徒を圧倒する爲め殊更に神の任命を受けしと

確信する新嶋襄君其人の如きは只稀れに見るあるのみ斯の如き信仰あるを以て新嶋君は現時世に嘗ある多くの人の名の消亡せたる後も尚ほ永く其令名を日本の史上に留むるを得べし君は神の子を信し日本長久の計に其心を籠め是等のために其全心を犠牲としたるの故を以て永く日本国民の記憶に存するならん余思ふに新嶋君の力の一大要素とも云ふ可きは其謙遜なりし事なり神が君を用ひ遂に其名をして天の衆星の如く長へに輝くものたらしめしは此謙遜ありしが故なるべし余日本に在るの日数々新嶋君を訪ひしが君は常に胸臆を開きて日本青年に對する企図と希望とを語りたり君は実に世の諸業諸職に青年基督教徒の充ちん日の来らんこと事を望みたり然れども君が最も欲望したる所は日本の最も秀逸なる青年輩が耶穌基督の福音を伝ふるために其一生を犠牲となすに至らん事なりしなり君或る朝余が傍に立ち此事を語りし時涙目に満ち声屢々絶へたり其面影は彷彿として今尚ほ忘るゝ能はざるなり其後余君に見ゆる事数々なりしが其顔色は天上の喜を以て輝き其音声は神の戦勝つの日諸天に鳴り渡る凱歌の響と相和する時再び君を見るに至るまで君が此時の面影は永くわが記憶に存すべし

吾人完全の模範たる主耶穌基督に次ては余は日本人中諸君の倣ふ可き人物は新嶋君を措て他に之れ有るを知らざるなり君は基督教の教師にして賢良なる教訓者たり殊に神の子の至誠なる役者たりしなり希くは君が耶穌基督に倣ひし如く諸君も亦君に倣ふ者となれ余は日本青年諸君の永遠の幸福を希ふの念益切なり諸君と基督にある友壻を結び得たる事は余が長き行旅中の最も貴き記念の一として常に心頭に喜ぶ所なり

在清国芝罘

千八百九十年六月十四日

エル、デキ、ウイシヤルド

再拝

日本東京

夏期学校生徒諸君

委員が本年夏期学校開校中ドラモンド教授の渡来を請はんため発したる書状は不幸にも君がオーストラリヤに出帆されたる後蘇国スウェットランドに達したり。君去月帰国の途次吾邦に立寄られたるも便船の都合により滞留五六日に過ぎず従て九月廿一日午後芝公園彌生館に於ての外君の演説を請ふの機なかりき。今其演説を此書に附録するは初め君を夏期学校に招きたるの意を果さん為なり

博物学教授ドラモンド君の演説

私は学生諸君に對面するを名譽に存じます、此度日本に参りましたのも或人の如く神社仏閣等を見るためではなく、諸君に面会する為に参りました、私の職業は青年の学生と共に居ること、尤も樂みとする所

も亦学生に逢ふこと御座います、夫れで私は四ヶ月前英国から豪州に渡りましたが何の為かと云へばやはり其国の学生と互に談話する為に行きましたのであります、この位、スコットランド、ヘーデルベルグへ帰る所でありましたが遠く迂路を取て日本に來ました是もつまり諸君に面會する為で御座います

諸君の前に於て演説をするのは実に愉快で御座います、下り併私は日本に始めて参りましたから能く日本のことは知りません、知らないから誉め言葉を用ゆる事は出来ません、併し日本の開化せしこと、進歩せしこと、立派な国であると云ふことは私は兼て聞て居りました、又此事は信じて居ります、諸君も此事は知つて居られますから、そんなことは言はない積りであまりまりす、そこで私は基督教は如何なるものであると云ふことを今日述べる積であります

国民の未來と云ふものは何物に一番關係あるかと云へば、人の頭腦即ち智識より寧ろ徳行に關係することが多いです、もと固より一國を維持するに智識即ち頭腦は入用であります、併し尤も大切なるものは人々の徳行で御座います。

私は基督教を信するもので御座います、何に従事するかと云へば実学に従事して居ります、何故基督教を信するかと云へば是が人の徳行に満足を与へ、又智識にも満足を与ふるもので有るから御座います、諸君の内には他人の話をして聞て學問は基督教と併行しないものなど、思ふ人もありませんがこれは決して左様でない其故はとなれば私一人が云ふよりも尚充分信すべき事実があります、今日歐羅巴の有名なる學術の大家を御覽なさい、大概一二等にある人は基督教の信者であります、基督教が學問に反対するなど、云ふ説は昔噺であります。進化説の理論が始めて出た時は基督教の反対でありました、進化説は基督教を撲滅する者だろうと思はれて居りました、併ながら今日の有様では基督教に反対する者でなく、かえ反つて基

督教を益々発達させ愈進めるものと成りました、これ私が基督教を信ずる訳で御座います、進化説は低い所のものが年経るに従て段々進むと云ふので、一つの動物があるならば段々其動物が進化して高等の動物に成ると云のであります、基督教と同じことを教ゆるものであります、単純より複雑に、下等動物より上等動物になるを示すものであります、進化説は基督教と矛盾するものではありません、却て是れが基督教を大に発達させ之を助け之を進めるもので御座います。

諸君、近頃の進化説を御覧に成りましたらう、低い所から高い所に進み行くことが書てあります基督の教は何でありますか、基督を完全の模範として其位地に進んで行くことを教ゆるのであります、自分の行為自分の心を基督の語に（三）適ふ（二）様にさせることを教ゆるのでありますつまり本統の人間にするの教であります。

基督教は何であると云ふ問題は、私の考にては基督教は人間の死んだ時基人を救ふて天国に送るのではありません、其人を今世に於て高尚の人に発達進歩させるのであります、基督教会は何であるとならば、尤も善き人が尤も善き方法を以て尤も善き目的を達する為に結合したる社会であります、此結果を成すに必要なる原素が二つあります、即ち第一最も善き人第二尤も善き目的であります、第一の尤も善き人とは如何なる人であるかとならば尤も近く基督に馳り近付く所の人であります、夫故に基督信者の言行及び品格は世の中の第一等に居らなければ成りません、即ち其人の思想が世人と異なる所であります。乍併ら今日の基督信者は皆な斯様な人ばかりだと云ふことは出来ません、基督信者は沢山ありますが其内には真正の人もあり又偽善の人もあります、だから其内の偽善の人の思想を見て直に之れが基督信者の思想だと思ふことは出来ません、近來米国ではサツマ焼の器を賞翫して居ります夫れで自然沢山サツマ焼の器はあ

りますが實際を調べて見ると本物は千の内十あるか無してありませう、其他の九百九十と云ふものは殆んど皆偽物であります、其通り今日基督教信者にも偽物がありませう、併しサツマ焼と云へば偽物を云ふのでありませんから私の云ふ所の基督教信者と云ふのも矢張り真正の基督教信者を云ふのであります。

第二の目的に就て、色々世の中に為し遂げ度いと思ふ所の目的が御座いますが其内で何が一番善き目的であると云ふことを考て見ますれば、私の考では基督を目的とするより高尚なる目的はないと思ひます、若し是に勝る目的があるならば今日より翻つて自分の生涯を改めます、基督教の最上の目的は何処にあると云へば、別段に亜米利加より基督教を持て来て学ぶに及ばない、英国より取つて学ぶにも及ばない、総てさう云ふことを捨て仕舞て始めに申す通り基督教を信ずるは何が目的であるかと云ふことを遡つて調べたいのであります、基督は既に此事を弟子に教へられました、茲に三つの要点があります、第一使徒等は世の塩、第二酵、第三は世の光であります、是が基督教の目的で御座います。信者は世の塩となれと云ふことは、どう云ふことかと云ふに基督自らは定義を下されなかつた、併し世の中は何に就ても此定義と云ふことを一番に申します、基督は何事にも能く譬を以て示されました、譬へて申しますならば今何か茲に話すことがあるとすれば凶を出し画を示して説明する時は定義は要せないで悉皆分ります、併し分るけれども何処まで意味があるかは分りません、こう云ふ工合に物に擬らへて説かるゝので御座います、そこで塩と云ふものは何であるかと云へば塩と云ふものは物の腐敗を防ぐ効あつて、物を保存するものであります、人が魚を保存する時に善く塩を用ひますのは腐敗を妨ぐ為で御座います、基督教信者も此通り社会にあつて社会の腐敗を止めなければ成りません、今日社会は何処でも清潔であるかと云へば反対に何処も腐敗しつゝ、あると云ます、是は各国共誰れも云ふて居ります、数年前或る詩人が何処にでも清潔な十方里の場所

があるならば自分は基督教を捨て、其処に行くと言ひましたが悲ひ哉何処にもありません、実に社会の腐敗を防ぐは基督教信者の義務であります、第二基督教信者は酔だと云ふことであります、英語で酔と云ふことは何から出たと云へば槓杆（こうかん）と云ふことから出て居ります、人類を高尚にすべき義であります、夫で基督教の信徒の勤は社会を高尚にすることでござります、今日それなら其職分を尽して居るかと言へば決して居りません、尤も中には尽さない所もありませんが無論此目的を以て社会に尽して居るには相違ありません、どう云ふ様にして高めるか、どう云ふ様にして高尚にすべきかと云へば、基督教が矯正改良し得ない社会はありません、基督教は美術を奨励して人の気を高めさせ、音楽を勧めて人々の心を優美にさせ或は工芸により或は学術により凡て人の心を高尚に進ませます、又此外にもつとどう云ふ目的があるかと云へば此地球を改良して天国の如くにし、此世界に生存する人に幸福な生涯を送る様に、此世界を改めて天国たらしめなければならんと務めます、之を成就する為に社会の槓杆（こうかん）となつて、世界を善美の方に進めて行きます。

第三、基督教信者は世の光りで御座います、即ち基督教信者は基督の光を受けて人間社会を発達させる役を務めなければ成りません、今日私共の見る所の光は色々ありますが其光の源は何処にあるかと云へば太陽が淵源になつて居ります、世の中に教は色々で沢山ありますが其本は何処にあるかと云へば一の道から出て居ります、基督教から出て居ります、世の中のことを段々考ふると解らないことが沢山ある、奇妙なこともあり、奥妙なることもあります、何故人間には解らない事があるかと云へば、知るべき能力が発達せないからです、私共の能力が充分発達しましたなら私共の知り度いと思ふ所ものは悉（shirushi）皆解つて仕舞ふかも知れません、けれども今日ではまだ解りません、基督教の外光を放つて居るものもあります、基督教

の如く充分に光を放つて居るものではありません、ソクラテスは多くの問題を考へて自分の国中を歩いて其説を人々に説き聞かせましたが、又人々からも色々の問題を出されました、ソクラテスは皆な是等の間に答へたかと云ふに答への出来なかつたものもあります、又基督は如何でありましたか、基督どんな問も皆な明かに答へられました、皆の間に満足を与へて光を放つて居りました、信者たるものも基督の光を受けて世界の暗き所を照らさなければ成りません、本統の光を放つ様にせなければ成りません、今日社会にある所の基督教の間接の機能を申しますならば、教育の方で一例を挙げませう、今日英吉利イギリスにある所の大学校、蘇格蘭スコットランドにある大学校、亜米利加に在る大学校の元は誰が立てましたか、皆な必ず基督教を奉ずる人が立てました是れを見ても今日学園の盛なるは大概基督教の致す所であることが解ります、是等の学校は毎日授業の始めに祈祷を捧げます、是は尤も善きことで基督を知らないものに教を勧める為にも宜いことでもあります、実に基督教は何処にも此通り尊ばれつゝ世の中の人の助をして居ります、私は亜米利加に居る時に天文台に行きました、その時は夜分でありましたから燭を照らして行きました器械の力に依て星を見ました星を見付けると蠟燭の光を消して仕舞ひました、何の為に蠟燭の光を消すかと云へば目的とする星を目付けたからであります、蠟燭の光は星を見る器械を見るまでの用で御座います、星を目付けた上は蠟燭は入りません、此通り光は種々ありましても眞の光を目付ける以上は他の光は捨て、宜い基督教を知りました上は外の教は用りません、宗教に斯く社会を低い所から高い所に進めるもので即ち吾人を高尚の域に導くものであります、故に吾人を高尚にすることの出来ない基督教の外の宗教は入用でありません」ト云

終りに方法のことを申しませう、どう云ふ方法にして其目的を達するかと云ふに、私が一番注目する所の手輕くて至極單純なることを申しませう、基督はどうして教を弘められましたか、基督は著述もなされな

かつた、夫れかと申して腕力を以て教を弘められた訳でもなかつた、説く所教ゆる所を自分で行つて働いて行かれました、是が今日尤も善く人々を導く方法であります、自分で語る斗りでない、信する斗りでない、其通り行ふのであります、塩の功能と云ふものは腐敗を防ぐことでありますが防ぐには多くのものにまざらなければならん、又酔は米麦などの粉末の中に這入らなければ之を膨張させることは出来ません、烈火も蠟燭其他のものに着かなければ光ることは出来ません、基督教信者は其教を自分の身に行はなければ光を他人に見せることは決して出来ません、自ら行ふて他の人を導かなければ光はありません、故に此目的を以て此方法を以て勤める様にしなければなりません、此頃虎列刺病が流行致します、是はどうして流行しますか、一の虎列刺病が発すれば「パチルレン」が飛び歩き馳り廻りて他の人々に伝染するのであります、若し此様でなかつたならば決して流行は致しません、此通り基督教信者は他の人々に伝染する様に、他の人々の心に善き種を蒔て発達させて行かなければ成りません、是が自分の云ふ所を行ふので、方法の單純なるもので御座ります

斯くして高尚なる良き社会になれば諸君は喜びて其社会の一人なることを望み玉ふでせう、固より成り度いと望み玉ふことと信じます、けれども希臘風の基督教は入りません、歐羅巴風の基督教信者の風は入りません、亞米利加信者の風は入りません、日本として生命を受け基督の信者となれば日本の基督教風で宜いのであります、諸君は日本服を着て御出であります、私は洋服を着て居ります、日本服も洋服も見た所は違ひませうが目的とする所は同じことであります、目的とする所は同じく私共の生命である生命を守るのであります、其通り希臘の基督教は幾分か希臘の風をなして居る亞米利加は亞米利加の風を為し歐羅巴は歐羅巴の風を帯びて居ります、其風は決して入りません、基督教を其假基督教の純粹な生命を日本に入れて日

本の着物を着せ日本にある所の哲学修身道德の点よりも考究して基督教に適合させて行かなければ成りません、欧羅巴にある基督教は欧羅巴の色がついて居ります、其通り日本に來た所の基督教は日本の風にしなければ成りません、日本風の哲学を以て研究しなければ成りません、さうして基督教を自ら發達させて自ら日本に適應する様にする事を諸君に希望致します。

諸君に御記憶を願ひます、基督教は身体でない精神であると御記憶を願ひます、酔は如何な働を為しますか、酔は自分の入れられた粉を器の形に致します、酔の入れてある粉を此「コップ」に入れて焼きます「コップ」の形になります、水挿に入れますと水挿の形を為します、其通り基督教の精神は支那に這入るならば其表面は支那風に成り、外国ならば外国の風に成ります、日本に這入りて發達するならば、焼き立てたる所は日本の形になるだらうと信じます、此様に自分の国を形どらなければ成りません、併し諸君の内には基督教を信ずる必要はないと云ふ人もありませうが、成程諸君には入らないかも知れないが、基督教は諸君の為に諸君を^運_運ち^運_運升、世の中は日々新旧の戦争をなさなければなりませんどうして基督に依頼せず居ることが出来ませう、而して漸々と發達して行きて裁判所の判事は基督教の精神を以て裁判を為し、代言人は基督教の精神にて辨論をなし、其他凡百の事に基督教の精神を用ちゆる様にならなければ成りません、斯く日本社会が總て基督教の精神を用ゆる様になれば愛国心も強くなります、人間相互の愛が強くなります、上等の社会に成ります、且今日社会の腐敗すると云ふことは誰も認めながら之を捨置くなら如何になりませうか、是を防ぐものは誰れであります、如何して之を防ぎます、基督教信者は之を防がなければ成りません、基督教を信ずるものは防ぎます且彼を信ずるものは限らない生命を受くることを得ます、限らない生命に与かることを得ますから基督が世界の為に生命を捨てた如くに国の為社会の為に

充分に働き又生命を捨てます、故に私は此事を一国民一個人に切に望む所であります私は今日此所に集りたる尤も善き人々なる諸君に望みます、どうか日本国の為に利益になることは必ず力を尽して勤められんことを望みます、前に申す通り能き目的を以て能き方法にて本国の為に勤められんことを望みます。若き学生諸君は尤も将来の日本に重き責任があります、私は是まで国々の多くの学生に逢ひましたが「エデンボロ」の学生の如く勉強するものは見ませんでした、諸君能く考へて御覧になれば自然基督教の高尚なること宗教中の尤も能き光りであると云ふことを感ぜらるゝであります』

精神的基督教 畢

第二回夏期学校来会生姓名簿

東京之部

福音神田青年会	河合篤叙	東京英和学校	龜山松二郎
同	齊藤中一	同	吉澤誠三
同	奥山寛平	同	舟橋 雄
同	河原久二郎	同	木村敬之助
同	進藤正十	同	各務多作
同	大野要造	同	小畑久五郎
東京英和学校	中里 尚	同	林 成一
同	久土日清定	同	若林石二郎
同	鵜澤芳松	同	關口 長
同	高木順三郎	同	鈴木愛之助
同	高見常三	同	菅原東丘
東京英和学校	三宅貞次	明治学院	秋葉省像
同	早乙女源三久	同	泉 彌六
同	卜部準平	同	多田 素
同	平野榮太郎	同	高畑宜一

東京英和学校 別所梅之助

同 武藤 廉

同 飯田菊三

明治学院 磯野 信

同 松浦和平

同 渡邊清三

同 嶋崎春樹

同 櫻井彦一郎

同 山崎重四郎

同 武藤 健

同 久野成七郎

同 小川豊吉

同 小山陽吉

同 笹尾糸太郎

同 山田幸三

同 河合龜輔

同 宮地謙吉

同 飯田賤男

明治学院

同 岡本敏行

同 池田藤四郎

同 白井孝次郎

同 白〔洲〕純平

同 中嶋糸吉

同 富永兵彌

同 戸川明三

同 赤田開太

同 小西研三

同 本挽町三丁目

同 寒田駒造

同 遠藤維熊

同 萩野又吉

同 玉置琢夫

同 友野芳朗

同 今井徳太郎

同 加藤利雄

同 兒嶋碩邦

同 松茂土龜四郎

明治学院	兒嶋才太郎	明治学院	依田義三
同	正村 正	同	山田萬太郎
同	藤田鋤三郎	同	小倉銳喜
同	濱嶋福壽	同	佐藤銚藏
神田美以教会	布川孫一	青山神学校	加藤元吉
同	永井延太郎	同	松浦重吉
白金猿町	兼重ムメ	同	杉原 登
東洋英和学校	中丸一平	麻布本村町	津田フキ
同	池田政澄	青山神学校	木村テツ
神田美以教会	別府丑太郎	青山英和女学校	大竹セイ
青山神学校	須郷瀧太郎	青山美以教会	佐藤四郎太
同	石川和助	高等商業学校	三宅川百太郎
同	宮城大太郎	同	福田徳三
同	田中儀三郎	同	坂田重次郎
同	飯沼正巳	同	茂木新三郎
同	大田高太郎	芝影日町	横濱源一郎
同	池 清輝	数寄屋橋教会	秋保親晴
数寄屋橋教会	景平源四郎	立学校	阪井徳太郎

数寄屋橋教会	吉河義和	本郷龍岡町	原房太郎
同	石川省吉	同	中村周次郎
同	濱田佳澄	同	高橋左善次
同	米村常吉	同	神崎幸造
同	長谷川裕	インダストリーホーム	原田章吉
同	本郷定二郎	下谷一致教会	奥野武之助
東京医学専門学校	根本駒吉	同	高田耕安
立教学校	鈴木東作	同	河原源六郎
同	落合吉之	同美以教会	堀卯之助
同	水田榮雄	同	野村秀雄
同	松木貞二郎	本郷組合教会	牧幸太郎
同	塚本眞一	築地福音教会	井上運平
芝之教会	奥野常二郎	中六番町	橋本宗之進
同	山口荘之助	農科大学	大淵寅治
同普連土教会	兼友直	同	大工原銀太郎
同	久野宗熙	同	八木和一郎
同	久野アサ	同	宮崎義香
同三田美以教会	鹽谷 榮	同	横山久四郎

第一高等中学	丹羽純三	新栄教会	和知牧太
同	樋口彌太郎	同	和知 茂
新栄教会	竹中百合	頌栄女学校	高橋ノブ
同	貴山幸二郎	同	森 ムラ
台町教会	高橋トシ	同	南小柿マロ
同	岡見 正	同	岡見ナヲ
同	岡見シヅ	同	木村スエ
同	田中ナヲ	同	飯田ヨシ
同	田中 松	同	里見ヨシ
同	日原於石	元崎町教会	新田義彦
同	大八木濱治	赤坂教会	片岡古傳
同	加藤又吉	同	大石 保
頌栄女学校	日原サト	同	井田壽道
同	近藤ルイ	同	小倉修吉
同	清澤クス	東京工業学校	奥田早苗
牛込福音教会	大月 隆	第一キリスト教会	穎姓孝三郎
同	福井捨助	同	狭川清彌
帝国大学院	木村駿吉	聖安得烈学院	久保田韓七郎

国民英学会

管 圓

東洋英和学校

大野義智

同

増野傳四郎

同

瀬上廣成

同

鶴飼吉次

物理学校

江副貫之

本所教会

津久井新三郎

地方之部

京都同志社

高橋由己

同

阪本義助

同

清水團次郎

同

近藤千代吉

同

高橋鷹造

同

山口六兵衛

同

三宅正直

同

緒方徳一郎

同

兒嶋正一

榎坂教会

羽田 轉

靈南坂教会

大竹義道

両国教会

高岸翠

麻布メソジスト教会

池田次郎吉

同

小田一郎次

東京

金澤鶴吉

同

津田 仙

京都同志社

中村衡平

同

中嶋治三郎

同

伊藤良藏

同

小板橋享三郎

同

丹羽清次郎

同

青柳 猛

同

眞部俊三

同

寺岡檀吉

同

平賀末治

京都同志社	内藤啓吉	京都同志社	河原林櫻一郎
同	眞木和四郎	同	加藤 壽
同	近藤保三	同	津田次郎
同	〔露〕無文治	同	三好末郎
同	山田嘉方	同	吉岡源一郎
同	寺坂市郎治	熊本人吉教会	犬童〔末〕作
同	小林峯三	同熊本教会	高木三平
同	古谷雄武太	同英学校	福田令壽
同	中村易次郎	同組合教会	白石保眞
同看病婦学校	伴 スミ	同熊本教会	高瀬敏徳
長崎スチール学校	城 貫一	新潟〔新発田〕教会	原 忠美
同	森山金藏	同教会	中林吉四郎
同	佐村徳介	長野県	高柳長四郎
同	平山橘二	同上田教会	石原 量
同	執行経藏	同岩村田教会	吉澤久治
同鎮西学館	遠山參郎	福岡県柳川教会	宮崎虎之助
鹿兒島美以教会	中山忠恕	同美以教会	大竹常業
同	海老名一郎	石川県金沢	細谷吉次

北海道札幌教会	丹羽氏彦	群馬県	山田近太郎
同札幌農学校	大〔島〕金太郎	同下仁田	林弘文
同	藤田環	同西群馬教会	高野貞吉
同	椿明良	同前橋	佐竹篤
同函館美以教会	中川邦三郎	同	中嶋彦太郎
同小樽教会	澤井弘之助	同原市教会	稻川富次郎
岐阜県	林衝太郎	同	中嶋展太郎
宮〔崎〕県日向教会	米卯助	同	中嶋寅太郎
崎玉県浦和	鈴木鎗次郎	同	松村治三郎
群馬県吾馬教会	新井孝作	同	佐俣謙吉
同安中教会	茂木一郎	同	齊藤安信
同志社教会	萩原福太郎	徳島県	田中喜惣太
同安中教会	近澤武雄	同	福井清住
青森県	新内岩太郎	千葉県	高橋寅吉
同美以教会	河澄明敏	同北条	岡山省三郎
茨木県	木名瀬保之助	同	兒玉章吉
同水戸教会	白土彌之助	三重県四日市	駒井トミエ
静岡県沼津教会	神山敬次郎	同	下里貞次郎

静岡県	永井寛太郎	三重県四日市	下里良之助
同	齊藤カ子	兵庫県関西学院	松本益吉
同三嶋教会	伊藤藤吉	同	安達金之助
神奈川県八王子	飯嶋彌太郎	同	住田吉太郎
同横浜	赤川竹松	同	蘆田慶治
同	相川富三郎	同神戸英和学校	雨夜ヒサ
同	井出猪之助	岡山県天城教会	内藏金藏
三重県	レナ、レズナー	同高梁教会	林 善助
岡山県高梁教会	福西シゲ	宮城県中学校	小池慎藏
同	大西ヨシ	同石巻教会	倉長 恕
岡山教会	小野田「伊」之助	同	倉長 ツネ
同	嶋村鐵太郎	同神学校	嶋貫兵太夫
山口県萩教会	間宮小五郎	不明	松本謙市
同	吉野市太郎	同	相澤虎次
宮城県仙台	下甲子郎	同	三浦 徹
同	岡本忠之丞	大坂組合教会	樋口 傳
同仙台神学校	太田勘七	新潟教会	辻澤忠齊
同	市村竹馬	米田町教会	荒木四郎吉

同仙台神学校

佐藤 潔

同

土田熊司

同

金成兵助

三一教会

土田龜太郎

芝白金猿町

岡見彦〔蔵〕

米田町教会

松永文雄

下総佐倉教会

白井和吉

日向教会

泥谷十吉

名古屋美以新教会

鈴木庫太郎

明治二十三年十月五日印刷

全 年十月十三日出版

〔正価金三十五銭〕

東京市本郷区森川町一番地

編者

木村 駿吉

全日本橋区大伝馬町式丁目十六番地

発行者

内田 芳兵衛

全京橋区弓町十三番地

印刷者

松本 義保

全

印刷所

續文舎

各 府 県 売 捌 所

東京市京橋区銀座三丁目	全	出雲町	十字屋書舖
全 神田区錦町一丁目	全	誠屋書店	警 醒 社
全 麹町区上六番町	全	日 成 堂	誠 屋 書 店
全 芝区田村町	全	鈴木聖書店	日 成 堂
全 牛込区神楽町三丁目	全	正 導 舍	鈴 木 聖 書 店
全 麻布区飯倉六丁目	全	池 田 書 店	正 導 舍
全 赤坂区南町六丁目	全	岩 田 書 店	池 田 書 店
神奈川県横浜市元町三丁目	全	十 字 屋 支 店	岩 田 書 店
全 横浜海岸百六十七番	全	石 田 善 吉	十 字 屋 支 店
大坂西区土佐堀三丁目	全	福 音 社	石 田 善 吉
全 京町通四丁目	全	任 天 堂	福 音 社
京都今出川寺町角	全	クリスチアンボード	任 天 堂
高知県高知本町三丁目	全	楽 園 堂	クリスチアンボード
全 本町上一丁目	全	柴 田 環 二 郎	楽 園 堂
和歌山県和歌山市小人町	全	福 音 社	柴 田 環 二 郎

二〇〇七年三月二十五日 印刷

二〇〇七年三月二十五日 発行

明治学院歴史資料館資料集【第四集】

—「精神的基督教」—

東京都港区白金台一ノ二ノ三七

編集代表 久 山 道 彦

東京都港区白金台一ノ二ノ三七

発行者 久 世 了

東京都港区白金台一ノ二ノ三七

発行所 明治学院歴史資料館

電話〇三(五四二二)五一七〇

東京都江東区森下一ノ八ノ四

印刷所 相和印刷株式会社

電話〇三(三六三一)〇〇四四